岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 451 集

矢盛（やもり）遺跡第３次・熊堂（くまどう）Ｂ遺跡第14次
発掘調査報告書

盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査

地域振興整備公団岩手総合開発事務所
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

矢盛（やもり）遺跡第３次・熊堂（くまどう）Ｂ遺跡第14次
発掘調査報告書

盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査

序

豊かな自然に恵まれた岩手県には、旧石器時代をはじめとする数多くの貴重な遺跡や重要な文化財が遺されております。先人たちが創造し、遺してきたこれら多くの文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは私たち県民一人ひとりに課せられた大切な責務であります。

その一方で、社会資本の充実を目指した地域開発等も県民の切実な願いであり、埋蔵文化財の保護・保存と開発という相容れない要素を持つ事業の、調和のとれた施策が今日的課題となっております。

財団法人岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本書は、盛岡市における盛岡南新都市計画整備事業に関連した、矢盛遺跡第３次調査及び熊堂Ｂ遺跡第14次調査の発掘調査結果をまとめたものであります。矢盛遺跡では縄文時代の陥し穴状遺構や近世の掘立柱建物跡を中心とする遺構、熊堂Ｂ遺跡では古代の集落跡や刻書が施された土師器の甕などが確認されています。

この報告書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに、埋蔵文化財に対する関心と理解を、より一層深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書作成にご協力とご支援を賜りました、地域振興整備公団岩手総合開発事務所や盛岡市教育委員会をはじめとする多くの関係諸機関、関係各位に深く感謝申し上げます。

平成16年 1 月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　合　田　　武

例　言（矢盛遺跡第３次調査）

1．本報告書は、岩手県盛岡市飯岡新田第２地割才川に所在する、矢盛遺跡第３次発掘調査の結果を収録したものである。

2．本遺跡の岩手県遺跡登録台帳の遺跡番号と調査略号は、以下の通りである。

遺跡番号　……　ＬＥ26－0139

遺跡略号　……　ＩＹＭ－02－３

3．本遺跡の調査は、盛岡南新都市計画整備事業に伴う緊急発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の調整を経て、地域振興整備公団岩手総合開発事務所からの委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

4．調査期間・調査面積・調査担当者は以下の通りである。

調査期間　　平成14年６月３日～８月６日

調査面積　　1,560㎡

調査担当者　　半澤武彦・久慈泰彦

5．室内整理期間と整理担当者は以下の通りである。

室内整理期間　　平成14年11月１日～平成14年11月30日

整理担当者　　半澤武彦

6．本報告書の執筆・編集は半澤武彦が担当した。

7．出土品の鑑定および分析は次の機関・個人に依頼した。（敬称略）

木製品鑑定・・・・早坂松次郎（社団法人　岩手県木炭協会）

8．基準点の測量は次の機関に委託した。

基準点の測量・・・㈱土木技術コンサルタント

9．野外調査・室内整理には、次の機関のご協力を頂いた。

盛岡市教育委員会、地域振興整備公団岩手総合開発事務所

10．遺跡の調査成果は、平成14年度調査分の岩手県埋蔵文化財発掘調査略報にも収録されているが、本書の内容が優先するものである。

11．本遺跡の調査に関わる記録と遺物等の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

例　言（熊堂Ｂ遺跡第14次調査）

1．本報告書は、岩手県盛岡市本宮字稲荷45－２ほかに所在する、熊堂Ｂ遺跡第14次発掘調査の結果を収録したものである。

2．本遺跡の岩手県遺跡登録台帳の遺跡番号と調査略号は、以下の通りである。

遺跡番号　……　ＬＥ16－2118

遺跡略号　……　ＯＫＯ－02－14

3．本遺跡の調査は、盛岡南新都市計画整備事業に伴う緊急発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の調整を経て、地域振興整備公団岩手総合開発事務所からの委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

4．調査期間・調査面積・調査担当者は以下の通りである。

調査期間　　平成14年６月17日～９月６日

調査面積　　1,954㎡

調査担当者　　石崎高臣

5．室内整理期間と整理担当者は以下の通りである。

室内整理期間　　平成14年11月１日～平成15年１月31日

整理担当者　　石崎高臣

6．本報告書の執筆・編集は石崎高臣が担当した。

7．基準点の測量・空中写真撮影は、以下の機関に委託した。

基準点の測量・・・㈱土木技術コンサルタント

空中写真撮影・・・東邦航空株式会社

8．本報告書に記載されている遺物は、種別に関わりなく連番を付している。図版・写真図版・遺物観察表に示した番号は同一である。また、登録番号も同一である。

9．野外調査・室内整理には、次の方々や機関の助言・協力を得た。（敬称略）

似内啓邦（盛岡市教育委員会）、平川南（国立歴史民俗博物館）、盛岡市教育委員会、地域振興整備公団岩手総合開発事務所

10．遺跡の調査成果は、平成14年度調査分の岩手県埋蔵文化財発掘調査略報にも収録されているが、本書の内容が優先するものである。

11．本遺跡の調査に関わる記録、遺物等の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

＜本文目次＞

序
例言
Ⅰ　調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 1
　1．遺跡の位置 …… 1
　2．遺跡周辺の地形と地質 …… 1
　3．周辺の遺跡 …… 4
　4．地層の基本層序 …… 4
Ⅲ　野外調査と室内整理の方法 …… 9
　1．野外調査 …… 9・11
　2．室内整理 …… 10・12

＜矢盛遺跡第３次調査＞
Ⅳ　検出された遺構と出土遺物 …… 16
　1．陥し穴状遺構 …… 16
　2．土坑 …… 21
　3．井戸跡 …… 22
　4．掘立柱建物跡 …… 22
Ⅴ　まとめと考察 …… 30

＜熊堂Ｂ遺跡第14次調査＞
Ⅵ　検出された遺構と遺物 …… 50
　1．概要 …… 50
　2．竪穴住居跡 …… 50
　3．竪穴状遺構 …… 69
　4．土坑 …… 71
　5．溝跡 …… 76
　6．その他の遺構 …… 80
　7．遺構外出土遺物 …… 83
Ⅶ　まとめと考察 …… 84
　1．遺物 …… 84
　2．遺構 …… 85
　3．墨書土器について …… 87

報告書抄録（矢盛、熊堂Ｂ）

― 矢盛遺跡 ―

＜図版目次＞

第１図　遺跡の位置及び遺跡周辺地形図 …… 2
第２図　周辺地域地形分類図 …… 3
第３図　基本層序 …… 4
第５図　周辺の遺跡分布図 …… 6
第６図　グリッド及び遺構配置図 …… 9
第10図　陥し穴状遺構（RD011～015） …… 17
第11図　陥し穴状遺構（RD016～019） …… 20
第12図　陥し穴状遺構（RD020・021）、土坑、井戸跡 …… 23
第13図　掘立柱建物跡（RB001） …… 24
第14図　掘立柱建物跡（RB002） …… 26
第15図　掘立柱建物跡（RB003） …… 27
第16図　旧河道 …… 28
第17図　出土遺物 …… 29

＜写真図版目次＞

写真図版１　調査風景・基本層序 …… 35
写真図版２　土坑・陥し穴状遺構 …… 36
写真図版３　陥し穴状遺構 …… 37
写真図版４　陥し穴状遺構 …… 38
写真図版５　掘立柱建物跡（RB001－①） …… 39
写真図版６　掘立柱建物跡（RB001－②） …… 40
写真図版７　掘立柱建物跡（RB002－①） …… 41
写真図版８　掘立柱建物跡（RB002－②） …… 42
写真図版９　掘立柱建物跡（RB003）及び建物跡群全景 …… 43
写真図版10　井戸跡（RI001） …… 44
写真図版11　旧河道・作業風景 …… 45
写真図版12　台風水害・完掘全景 …… 46
写真図版13　出土遺物 …… 47

― 熊堂Ｂ遺跡 ―

＜図版目次＞

第４図　基本層序 …… 5
第７図　凡例（熊堂Ｂ遺跡） …… 12
第８図　遺構配置図 …… 13
第９図　調査区およびグリッド図 …… 14
第18図　RA62（１） …… 51
第19図　RA62（２） …… 52
第20図　RA62出土遺物（１） …… 53
第21図　RA62出土遺物（２） …… 54
第22図　RA63（１） …… 55
第23図　RA63（２） …… 56
第24図　RA63出土遺物（１） …… 56
第25図　RA63出土遺物（２） …… 57
第26図　RA64 …… 58
第27図　RA64（２）、RA64出土遺物 …… 59
第28図　RA65 …… 60
第29図　RA65出土遺物 …… 61
第30図　RA66 …… 62
第31図　RA66出土刻書土器筆順 …… 63
第32図　RA66出土遺物（１） …… 64
第33図　RA66出土遺物（２） …… 65
第34図　RA68 …… 66
第35図　RA68カマド …… 67
第36図　RA68出土遺物（１） …… 68
第37図　RA68出土遺物（２） …… 69
第38図　RE11 …… 70
第39図　RE11出土遺物（１） …… 70
第40図　RE11出土遺物（２） …… 71
第41図　RD105・106・110、RD106・110出土遺物 …… 72
第42図　RD113・114・115・116・123 …… 74
第43図　RD123 …… 74
第44図　RD125・126、RD126出土遺物 …… 75
第45図　RG７・８・９・97・98・101 …… 77
第46図　RG８出土遺物 …… 78
第47図　RG97出土遺物 …… 79
第48図　RZ12 …… 81
第49図　RZ12出土遺物 …… 82
第50図　遺構外出土遺物 …… 83
第51図　熊堂Ｂ遺跡第４次調査出土刻書土器 …… 87
第52図　「爪」と記された墨書土器 …… 88
第53図　つくば市中原遺跡出土「万坏」墨書土器 …… 89
第54図　志波城跡SI442出土土器 …… 90
第55図　小幅遺跡出土「東□」墨書土器 …… 90

＜写真図版目次＞

写真図版14　RZ12土器埋設遺構出土刻書土器 …… 97
写真図版15　空中写真 …… 98
写真図版16　空中写真・調査前状況 …… 99
写真図版17　基本層序 …… 100
写真図版18　RA62（1） …… 101
写真図版19　RA62（2） …… 102
写真図版20　RA63 …… 103
写真図版21　RA64 …… 104
写真図版22　RA65 …… 105
写真図版23　RA66 …… 106
写真図版24　RA68（1） …… 107
写真図版25　RA68（2） …… 108
写真図版26　RE11 …… 109
写真図版27　RG 7 ・ 8 ・ 9 …… 110
写真図版28　RG 8 ・ 9 ・97・98・101 …… 111
写真図版29　RG 8 ・101、RD105・106・110 …… 112
写真図版30　RD113・114・115・116・123 …… 113
写真図版31　RD125・126、RZ12 …… 114
写真図版32　RA62（1）出土遺物 …… 115
写真図版33　RA62（2）・RA63出土遺物 …… 116
写真図版34　RA64・65出土遺物 …… 117
写真図版35　RA66（1）出土遺物 …… 118
写真図版36　RA66（2）出土遺物 …… 119
写真図版37　RA68出土遺物 …… 120
写真図版38　RE11、RD110・126、RG 8 出土遺物 …… 121
写真図版39　RG97、RZ12、遺構外出土遺物 …… 122

Ⅰ　調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市が経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた、北東北の拠点都市を目指して、現在の既成市街地のほかに南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。

この事業は、平成２年９月に岩手県・盛岡市・旧都南村の三者が、地域振興整備公団に対して事業申請を行い、これを受けて公団は実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成３年度から平成17年度までの15年間を事業予定期間とし、面積313haを対象とした土地区画整理事業が実施されることとなった。

矢盛遺跡・熊堂Ｂ遺跡については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成14年度の事業として確定した。これを受けて、平成14年４月１日に（財）岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。矢盛遺跡第３次調査は、平成14年６月３日に開始され、同年８月６日をもって終了、また熊堂Ｂ遺跡第14次調査は平成14年６月17日に開始され、同年９月６日をもって終了した。

（地域振興整備公団岩手総合開発事務所）

Ⅱ　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置

両遺跡が位置する岩手県盛岡市は県のほぼ中央部に位置しており、近世以降、旧南部藩の城下町として栄えてきたとともに、現在でも行政・経済・文化施設の中枢機能が集積しており、北東北の拠点都市として発展し続けている。

矢盛遺跡は、ＪＲ東北本線盛岡駅の南側約３㎞の雫石川南側右岸に形成された河岸段丘面の縁付近に立地しており、標高は122ｍ前後で、調査を行う以前の土地利用状況は、20年ほど前まで存在した旧都南村村営住宅の跡地と、その空閑地を利用したゲートボール場や荒れ地となっていた。

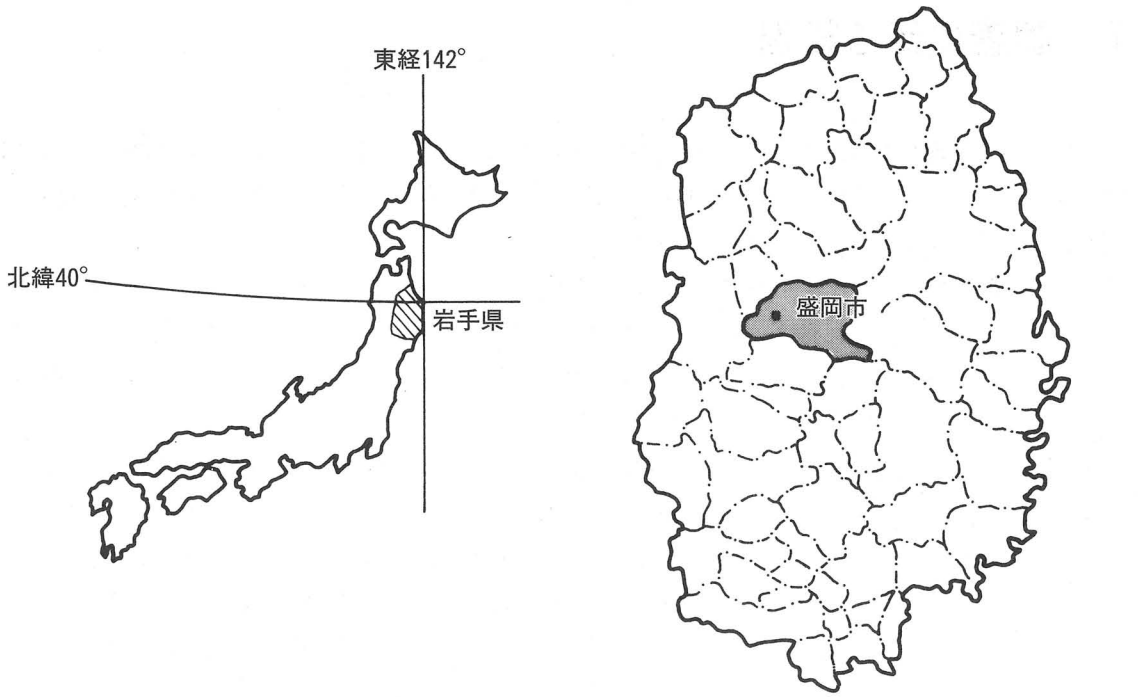
また熊堂Ｂ遺跡は、盛岡駅の南側約２㎞の雫石川南岸右岸の微高地上に立地し、標高は124ｍ前後で、調査を行う以前の土地利用状況は、耕作地と宅地が混在する状況であった。

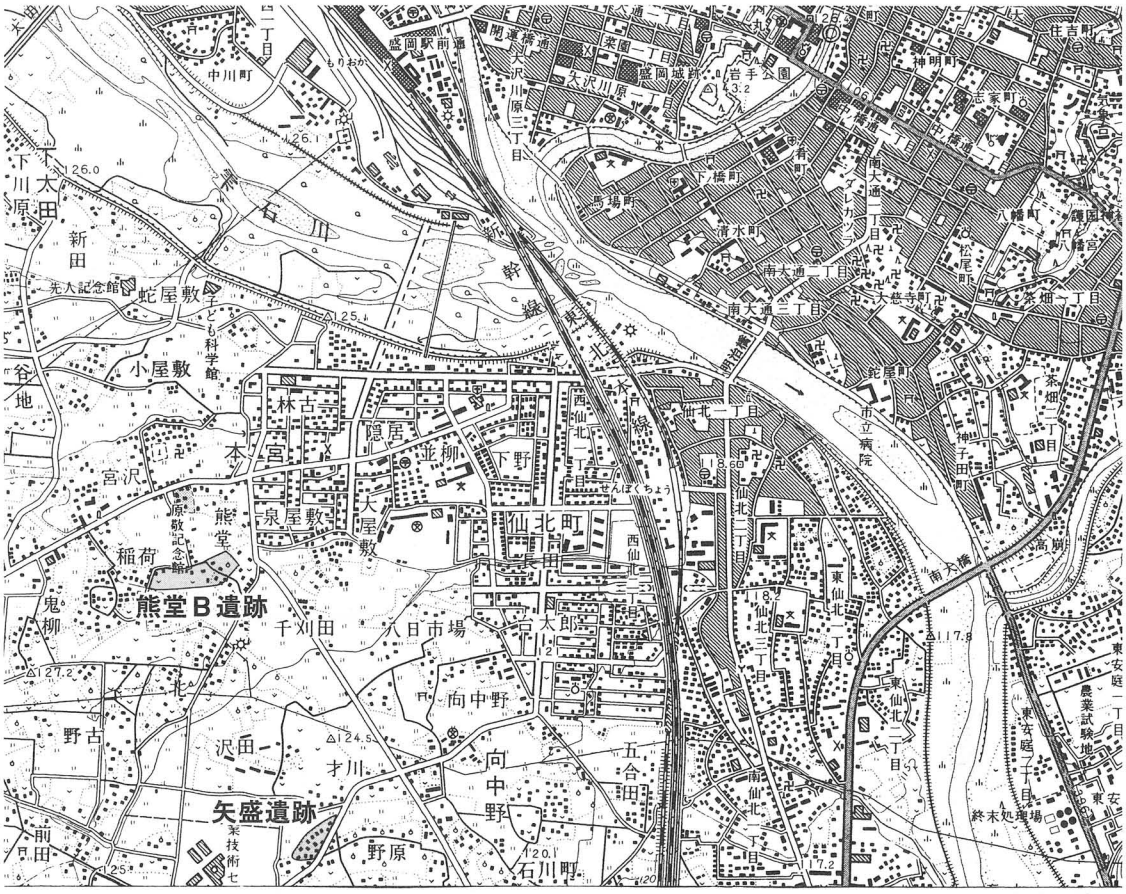
２．遺跡周辺の地形と地質

盛岡市は、北上川およびその水系に属する西側奥羽山系からの雫石川、東側北上山系からの中津川が落ち合う沖積地に立地している。流れの中心をなす北上川は、源流が県北部の岩手町御堂地内にあり、ここから南方向へ貫流しながら、太平洋へ流れ出る宮城県石巻市までの延長は243㎞、流域面積が10,720㎞、支流数216河川という東北随一の大河川である。

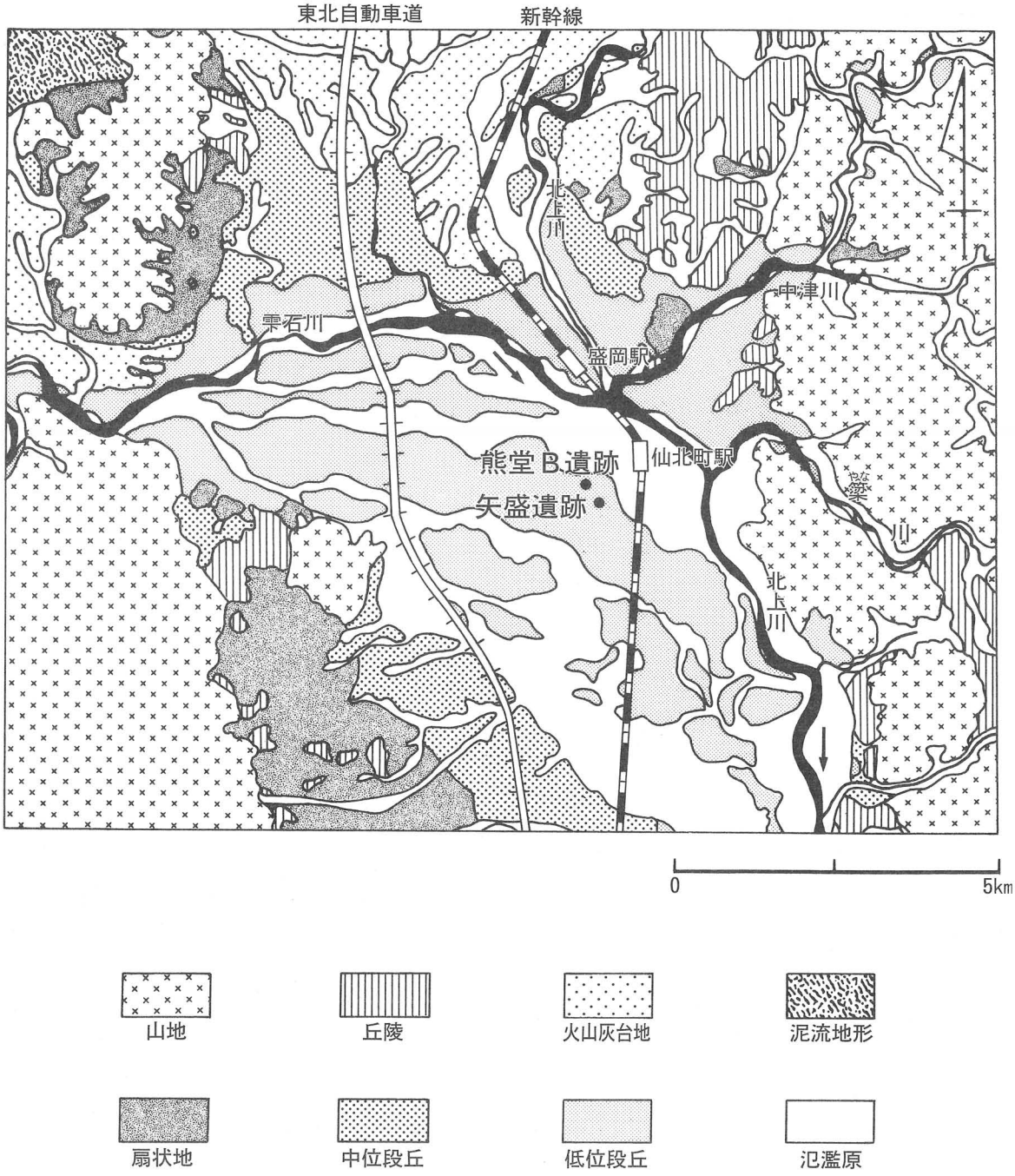
この北上川流域は、源流から盛岡市以北までを「上流域」、ここから県南部の一関市狐禅寺峡谷までを「中流域」、以下河口の石巻市までを「下流域」として区分され、両遺跡が位置する一帯は、北上川中流域の上流部と、雫石川の河口部が合流する地点付近に存在している。

これらの河川が肥沃な耕作地や平野を提供し続けてきた一方で、過去には水害による氾濫が幾度も繰り返





第１図　遺跡の位置及び遺跡周辺地形図



第2図　周辺地域地形分類図

され、当遺跡の北西約３㎞に存在した国指定史跡「志波城跡」は水害を克服できず、西暦803年に築城されてからわずか９年ののち、南東約10㎞に位置する「徳丹城」へ機能を移すこととなったようである。

当遺跡一帯の地形図や航空写真を観察すると、耕地整理や都市化、区画整理が進んだ現在でも、河川が流路を幾度も変えてきた痕跡をいくつか見て取ることができる。

調査区域一帯の河岸段丘面は、一般に「都南段丘」（中川久夫ほか「北上川上流沿岸の第四系および地形」『地質学雑誌』69　1963）と呼ばれており、北上川・雫石川との比高も小さい「低位段丘」で、長年にわたる開析を受けているため、その段差や境界が不明瞭となっている個所が多く見られる。

３．周辺の遺跡

平成14年４月の岩手県教育委員会のまとめでは、盛岡市内に500個所以上の遺跡が登録されている。第４図では、今回調査した遺跡が所在する市内本宮・飯岡地区周辺を中心に125個所の遺跡を紹介する。

両遺跡が立地する雫石川南側右岸と一方の北側左岸とでは、遺跡の内容が対称的に分布している様子がうかがわれる。北側左岸の台地上には、大館遺跡群などの縄文時代の遺跡が分布している一方で、南側右岸の段丘面上には一部の縄文期の陥し穴状遺構等を除き、志波城跡をはじめとする奈良～平安期を中心とした遺跡が数多く見られる。

４．地層の基本層序

（矢盛遺跡）

調査区の基本層序は以下の通りであるが、全域にわたって近年まで存在した旧都南村村営住宅の基礎、および残土・廃材等が厚く堆積しており、排水槽・下水管等による遺構検出面の下にまで及ぶような深い攪乱を受けた個所が随所に見られる。

Ⅰ層　　10YR5/2　灰黄褐色粗砂　粘性弱　堅く締まる
（礫・コンクリート片・ゴミ等を多く含む客土である）

Ⅱ－１層　10YR4/2　灰黄褐色土　粘性強　締まり密
（旧水田の耕作土で、全体に細かい礫と水酸化鉄を少量含む）

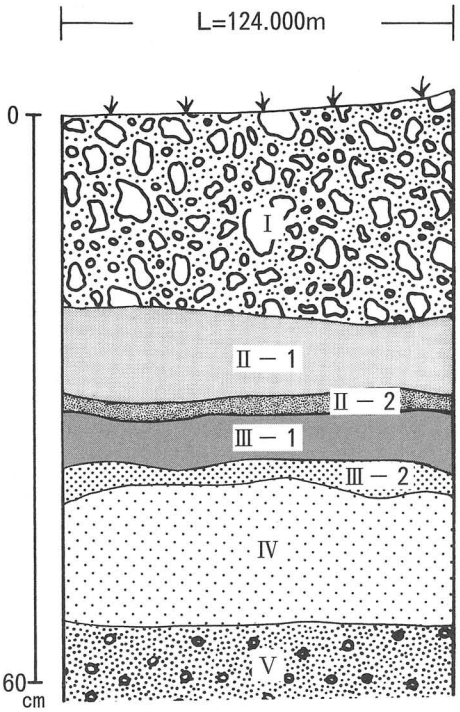
Ⅱ－２層　10YR4/2　灰黄褐色土　粘性強　締まり密
（水酸化鉄の集積）

Ⅲ－１層　10ＹＲ2/1　黒色土　粘性強　締まり密
（旧水田の床土）

Ⅲ－２層　10YR3/3　暗褐色土　粘性強　締まり密
（Ⅲ－１層の漸移層）

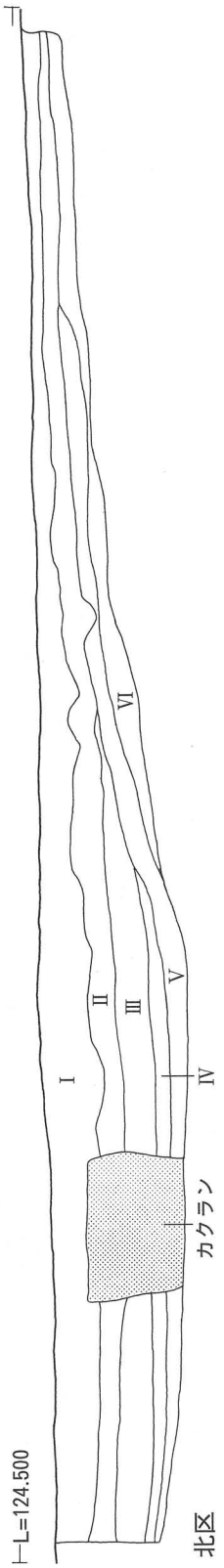
Ⅳ層　　10YR4/6　褐色土　粘性ややあり　締まり密
（遺構検出面）

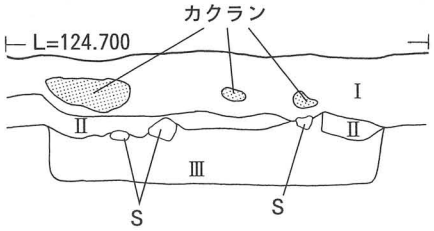
Ⅴ層　　10YR4/4　褐色粗砂　粘性弱　堅く締まる
（径１～10㎝の自然礫を密に含む）



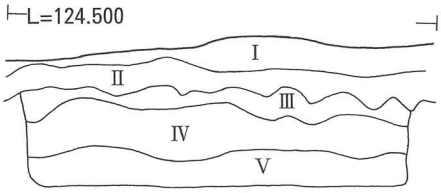
第３図　基本層序（矢盛遺跡分）

（熊堂Ｂ遺跡）





南区東



南区西

北区基本層序

番号	色調	しまり	粘性	
Ⅰ	10YR3/2黒褐色	密	弱	
Ⅱ	10YR2/1黒色	密	やや弱	
Ⅲ	10YR2/1黒色	やや密	やや強	旧河道覆土
Ⅳ	10YR3/2黒褐色	やや密	強	旧河道覆土
Ⅴ	10YR3/1黒褐色	やや密	強	旧河道覆土
Ⅵ	10YR4/4褐色	密	弱	

南区西基本層序

番号	色調	しまり	粘性	
Ⅰ	10YR2/1黒色	密	やや弱	
Ⅱ	10YR3/1黒褐色	密	やや弱	
Ⅲ	10YR2/2黒褐色	やや密	やや弱	遺構検出面
Ⅳ	10YR4/4褐色	密	なし	砂質土（地山）
Ⅴ	10YR3/1褐色	やや密	なし	砂質土

南区東基本層序

番号	色調	しまり	粘性	
Ⅰ	10YR2/2黒褐色	やや疎	弱	礫多く含む
Ⅱ	10YR3/1黒褐色	やや疎	弱	
Ⅲ	10YR2/2黒褐色	やや密	やや弱	遺構検出面

第４図　基本層序

第５図　周辺の遺跡分布図

周辺の遺跡一覧表

No.	遺　跡　名	種　別	時　代	遺　構　・　遺　物
1	田面野木	散布地	縄文／古代	土器
2	猪去八幡館	城館跡	中世	堀、郭
3	上猪去	集落跡	縄文／古代	縄文土器、土師器、土坑、掘立柱建物跡
4	細田	散布地	平安	土師器
5	松ノ木	集落跡	平安	土師器
6	八ツ口	散布地	古代	土師器、住居跡
7	八卦	集落跡	古代	土師器、住居跡、土坑
8	太田蝦夷森古墳群	古　墳	奈良	土師器、刀、玉、和同開珎
9	館	集落跡	平安	土師器、住居跡、城館跡、堀、土塁
10	上野屋敷	散布地	古代	土師器
11	畑中	集落跡	古代	土師器
12	小沼	集落跡	平安	土師器、緑釉陶器、住居跡
13	一本木	集落跡	平安	土師器、住居跡
14	五兵衛新田	集落跡	古代	土師器
15	天沼	集落跡	古代	土師器
16	竹鼻	集落跡	古代	土師器
17	志波城	城柵跡	平安	土器、掘立柱建物跡、門跡、築地、大溝
18	田貝	集落跡	古代	土師器、住居跡
19	竹花前	集落跡	平安	土師器、緑釉陶器、住居跡
20	新堰端	城柵跡	縄文／古代	土器（縄文晩期）、古代：住居跡、土師器、土坑、大溝
21	石仏	集落跡	古代	土師器
22	田中	散布地	平安	土師器
23	林崎	集落跡	平安	土器、掘立柱建物跡
24	小幅	集落跡	平安	土器、住居跡、掘立柱建物跡
25	大宮	集落跡	古代	土師器
26	大宮北	集落跡	平安	住居跡、土師器＜Ｈ８年調査＞
27	鬼柳Ａ	散布地	古代	土師器＜Ｈ９年調査＞
28	小林	集落跡	古代	土師器
29	水門	集落跡	古代	土師器
30	上越場Ａ	集落跡	古代	土師器
31	宮沢	散布地	古代	土師器＜Ｈ８年調査＞
32	熊堂Ａ	集落跡	縄文	縄文土器（後・晩期）＜Ｈ８年調査＞
33	**熊堂Ｂ**	**集落跡**	**古代**	**土師器、須恵器、住居跡＜Ｈ５・９・13・14年調査＞**
34	鬼柳Ｂ	集落跡	古代	土師器
35	稲荷	集落跡	古代	土師器
36	鬼柳Ｃ	集落跡	古代	土師器
37	野古Ａ	集落跡	古代	土師器＜Ｈ９・13・14年調査＞
38	野古Ｂ	散布地	古代	土師器
39	台太郎	集落跡	古代／平安	土師器、住居跡、溝跡＜継続調査＞
40	上平	集落跡	縄文／古代	土器（中～晩期）、土師器、住居跡
41	猪去館	城館跡	縄文／古代	土器、土坑、住居跡、掘立柱建物跡
42	蟹沢下	散布地	古代	土師器
43	二ツ沢	散布地	縄文／古代	土師器
44	小和田館	城館跡	中世	堀、郭
45	蟹沢	散布地	縄文／古代	縄文土器、土師器
46	ヘビ堂	散布地	縄文／古代	縄文土器、土師器
47	オミ坂	散布地	縄文／古代	縄文土器（早～晩期）、土師器
48	大ヶ森	散布地	縄文／古代	縄文土器、土師器
49	辻屋敷	集落跡	古代	土師器
50	西田Ａ	集落跡	古代	土師器
51	上越場Ｂ	集落跡	古代	土師器
52	西田Ｂ	集落跡	古代	土師器、須恵器
53	前田	集落跡	古代	土師器
54	向中野館	城館跡	平安／中世	堀、住居跡、土師器、須恵器
55	細谷地	集落跡	古代	土師器＜Ｈ12・13年調査＞
56	南仙北	集落跡	縄文／古代	縄文土器、土師器、住居跡
57	向中野幅	集落跡	古代	土師器
58	飯岡沢田	集落跡・古墳	古代／近世	古墳群・墳墓群・骨蔵器・集落跡＜Ｈ13・14年調査＞
59	飯岡才川	集落跡	古代	陥し穴、土坑、溝＜Ｈ10・12年調査＞
60	中村	散布地	平安	土師器、須恵器
61	月見山	散布地	縄文／古代	土器
62	山中	散布地	縄文／古代	土器（早・中期）、土師器

No.	遺跡名	種　別	時　代	遺　構　・　遺　物
63	飯岡館	城館跡	中世	空堀、縄文土器（中期）
64	堤	散布地	縄文／古代	縄文土器、土師器
65	高館古墳群	古　墳	奈良～	平安蕨手刀、切小玉、土師器
66	藤島Ⅱ	散布地	平安？	土師器
67	高館	散布地	縄文	土器（中期）、石器
68	大柳Ⅰ	集落跡	古代	土師器、須恵器
69	大柳Ⅱ	散布地	古代？	土師器？
70	館野前	散布地	縄文	土器（後期）
71	飯岡山館	城館跡	中世	
72	飯岡赤坂	散布地	古代	
73	いたこ塚	祭祠跡	近世	
74	赤坂Ⅱ	散布地	平安？	土師器
75	羽場館	城館跡	中世	空堀
76	羽場百目木	散布地	縄文	土器（中期）
77	砂子塚	散布地	古代	小塚
78	アイノ沢	散布地	縄文	土器（晩期）
79	因幡	散布地	縄文／古代	縄文土器、土師器
80	木節	集落跡	平安	
81	福千代	集落跡	奈良	
82	二又	散布地	古代	土師器、須恵器
83	内村	集落跡	平安	土師器、常滑
84	中屋敷	散布地	古代	土師器
85	藤島Ⅰ	集落跡	縄文／古代	縄文土器、土師器
86	深淵Ⅰ	集落跡	平安	住居跡
87	高屋敷	散布地	古代	須恵器
88	法嶺権現塚	祭祠跡		
89	飯岡林崎Ⅰ	集落跡	古代	土師器、須恵器、硯、住居跡
90	飯岡林崎Ⅱ	集落跡	平安	土師器＜H13・14年調査＞
91	上新田	集落跡	平安	土師器、住居跡
92	深淵Ⅱ	集落跡	平安	住居跡
93	上新田Ⅰ	集落跡	平安	住居跡
94	下久根Ⅰ	散布地	縄文／古代	縄文土器、土師器
95	石持	散布地	古代	土師器、須恵器
96	高屋敷Ⅱ	散布地	平安	土師器、須恵器
97	西	集落跡	平安	土師器、住居跡
98	西田	集落跡	平安	須恵器
99	下久根Ⅱ	散布地	縄文／古代	縄文土器
100	熊堂Ⅰ	集落跡	縄文／古代	縄文土器、石器、土師器、住居跡
101	松島	集落跡	古代	土師器、須恵器
102	熊堂Ⅲ	集落跡	平安	土師器、須恵器、住居跡
103	熊堂Ⅱ	集落跡	平安	土師器、須恵器、住居跡
104	田中	集落跡	平安	土師器、須恵器、石器
105	南谷地	集落跡	平安	土師器、須恵器、住居跡
106	夕覚	散布地	古代	土師器
107	横屋	集落跡	古代	土師器、須恵器
108	葛本	散布地	古代	土師器、石器
109	新井田Ⅰ	散布地	古代	土師器、須恵器
110	新井田Ⅱ	散布地	古代	土師器、須恵器＜H13年調査＞
111	新田	集落跡	平安	土師器、須恵器
112	間渡Ⅰ	散布地	古代	土師器
113	下羽場	集落跡	平安	土師器、須恵器、緑釉陶器
114	下湯沢	散布地	古代	土師器、須恵器
115	大島	散布地	古代	土師器、須恵器
116	湯壺	散布地	縄文	土器（晩期）、石器
117	湯壺経塚	経　塚	中世	中世、常滑
118	後島	散布地	縄文	土器、石器
119	湯沢	散布地	縄文	土器（前・中・後期）、石器
120	島	墳　墓	不明	小塚
121	小田Ⅰ	散布地	古代	土師器
122	間渡Ⅱ	散布地	古代	土師器、須恵器
123	間渡Ⅲ	散布地	古代	土師器、須恵器
124	森子	散布地	古代	土師器
125	**矢盛**	**散布地**	**縄文／古代／近世**	**陥し穴状遺構、住居跡、墓壙、掘立柱建物跡＜H４・14年調査＞**

Ⅲ　野外調査と室内整理の方法

（矢盛遺跡）

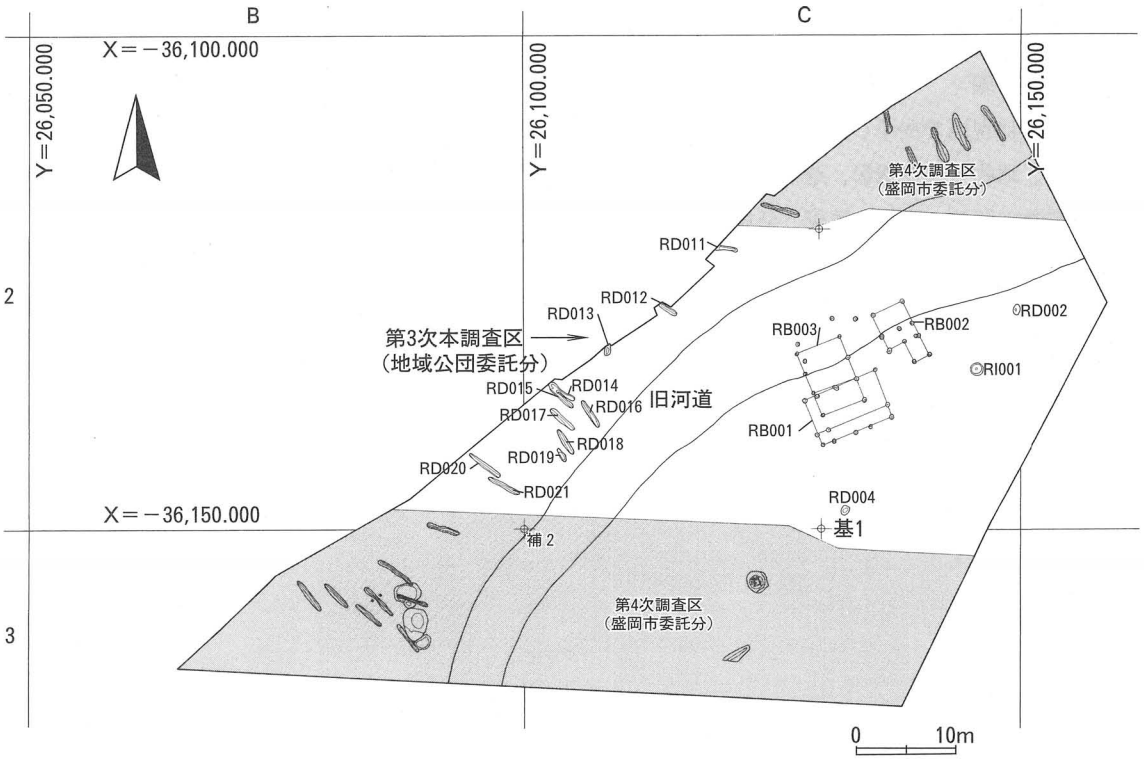
1．野外調査

（1）グリッドの設定

矢盛遺跡のグリッド（区画）設定にあたっては、盛岡市教育委員会の方法に準じて行っている。本遺跡の調査座標は、平面直角座標第Ｘ系のＸ＝－36,050.000、Ｙ＝＋26,000.000を原点として設定した。この座標原点を基点として、遺跡全体を50ｍ×50ｍの大区画に区割りを行い、さらに大区画を２ｍ×２ｍの25小区画に細分している。大区画は原点から東方向にアルファベットの大文字でＡ～Ｄ、南方向には１～４の数字を付した。また、小区画は原点から東方向にアルファベットの小文字でａ～ｙ、南方向には1～25の数字を与えている。本調査区は、原点から南東側の大区画２Ｃ区を中心に位置している。

調査区内における各基準点の成果値と杭高（標高）は以下の通りである。（日本測地系）

基準点№1	Ｘ＝－36,150.000ｍ	Ｙ＝＋26,130.000ｍ	標高＝122.663ｍ
補助点№1	Ｘ＝－36,120.000ｍ	Ｙ＝＋26,130.000ｍ	標高＝122.675ｍ
補助点№2	Ｘ＝－36,150.000ｍ	Ｙ＝＋26,100.000ｍ	標高＝122.457ｍ



第６図　グリッド及び遺構配置図（矢盛遺跡）

（2）粗掘りと遺構検出

本調査に先立ち、北東側に隣接する細谷地遺跡において第5次調査が実施されており、今回の調査対象区域の大部分について、遺構と遺物の状況がある程度把握されていた。調査開始にあたり、ほぼ全域にわたって満遍なく2m×5m程度の試掘個所を設定し層の状況把握に努めた。この結果、調査区全域の層序が比較的単純でほぼ水平であることや、表土には遺物が見られなかったことなどから、粗掘りには大型重機（パワーショベル：0.7）を使用し、その後人力による遺構検出を順次実施した。

（3）遺構の命名

検出された遺構の命名については、盛岡市教育委員会によるものに倣って付している。

掘立柱建物跡…RB　　陥し穴状遺構・土坑…RD　　井戸跡…RI

（4）遺構の精査と実測

検出された遺構は2分法を原則として精査を行い、陥し穴状遺構については原則として横断面中央部付近にベルトを設定した。記録として必要な図面作成は、精査の各段階において行っている。

全ての遺構についての平面実測は簡易遣り方測量で行い、各実測図（平面図・断面図）の縮尺は1/20で記入している。

（5）写真撮影

野外調査での写真撮影は、6×7㎝判カメラ（白黒）と35㎜判カメラ（白黒・カラーリバーサル）を使用し、この他にポラロイドカメラ・デジタルカメラ各1台をフィールドカード作成等のメモ的な用途に併用した。撮影にあたっては、撮影内容を記載した撮影カードを対象物の撮影前に撮影挿入し、整理の際の手間を低減した。

2．室内整理

（1）作業手順

室内整理は現場で洗浄した遺物の注記作業から開始し、遺物毎の仕分け、実測作業、拓本、遺物と遺構のトレース、遺物の写真撮影、遺物と遺構の図版作成、写真図版作成の順に作業を進めた。これらの作業と並行して遺物の計測、原稿の執筆、各種遺物の鑑定等を行い報告書に掲載した。

（2）遺　構

報告書図版中における各遺構図面は一部に縮尺を変更したものもあり、図面にはそれぞれスケールを付した。なお、平面図における方位矢印は座標北を示している。

（3）遺　物

遺物は小片のみのため破片実測を主体に行い、図版の縮尺率は1/2で掲載している。

（熊堂Ｂ遺跡）

１．野外調査

（１）グリッドの設定

熊堂Ｂ遺跡のグリッド設定は、盛岡市教育委員会の方法に準じている。本遺跡の調査座標は、平面直角座標第Ｘ系のＸ＝－35,000.000、Ｙ＝＋25,000.000を原点として設定した。この座標原点を基点とし、遺跡全体を50×50ｍの大区画に区割りを行い、さらに大区画を２×２ｍの25小区画に細分した。大区画は、基点から東方向にアルファベット大文字のＡ～Ｄ、南方向に１～４の数字を付した。また、小区画は大区画の北西角を基点に東方向にアルファベット小文字のａ～ｄ、南方向に1～25の数字を与えている。今次調査区の中心は6O・6Pに位置している。

調査区内に設置した基準点の成果値と杭高（標高）は以下の通りである。なお、測量法施行令が平成13年12月28日に公布、平成14年４月１日から施行されたことにより、測地基準系が日本測地系から世界測地系に切り替えられたが、熊堂Ｂ遺跡では、それ以前から調査が行われていることから、混乱を防ぐため、今回の基準点は日本測地系によった。

基準点№.2	Ｘ＝－35,200.000ｍ	Ｙ＝＋25,740.000ｍ	標高＝124.488ｍ
基準点№.3	Ｘ＝－35,200.000ｍ	Ｙ＝＋25,770.000ｍ	標高＝124.215ｍ
補助点№.3	Ｘ＝－35,270.000ｍ	Ｙ＝＋25,740.000ｍ	標高＝124.489ｍ
補助点№.4	Ｘ＝－35,190.000ｍ	Ｙ＝＋25,770.000ｍ	標高＝123.961ｍ

（２）表土除去と遺構検出

熊堂Ｂ遺跡の遺構検出面は、基本的に褐色土層であることがこれまでの調査によって判明しており、また表土には遺物が見られなかったことから、褐色土層の直上まで重機（0.7ｔのパワーショベル）を使用して上層土を除去した。その後、人力によって遺構検出を行った。

（３）遺構の精査と実測

検出された遺構の調査は随時セクションベルトを設定し、覆土の堆積状況の把握に努めて掘り下げた。カマドの場合は、住居とは別にセクションベルトを設定して精査を行った。また、袖部の断ち割りを行い、構造の把握に努めた。遺構の実測は、平面実測については簡易遣り方測量で行い、縮尺は1/20を基本とした。

（４）遺構の命名

遺構の略号については盛岡市教育委員会の方法に準じて以下のように命名した。また、番号については、第13次調査からの連番である。ただし、野外調査や室内整理の過程で、遺構名を変更したり、削除したことにより、欠番がある。

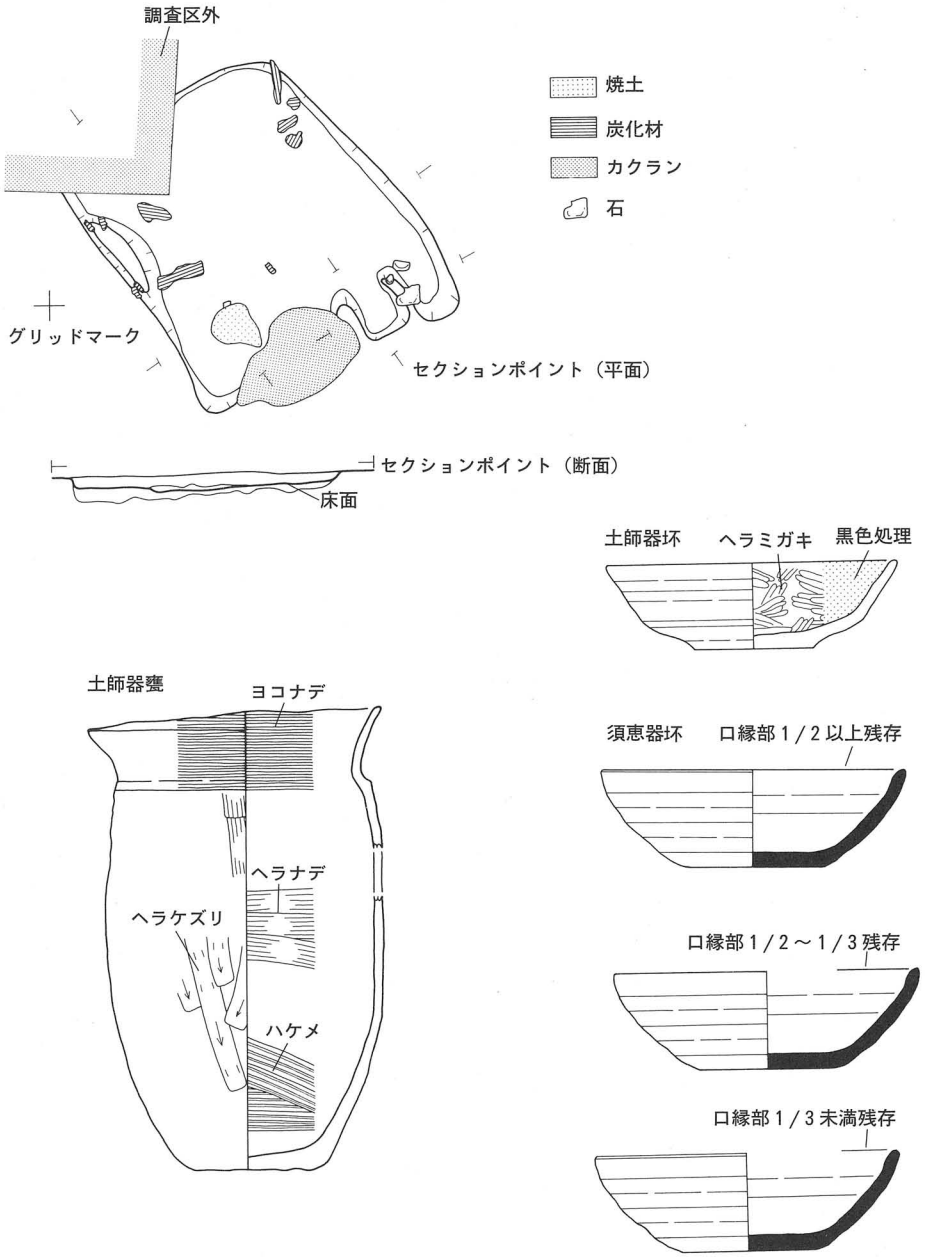
竪穴住居跡：RA　土坑：RD　竪穴状遺構：RE　溝跡：RG　その他：RZ

（５）写真撮影

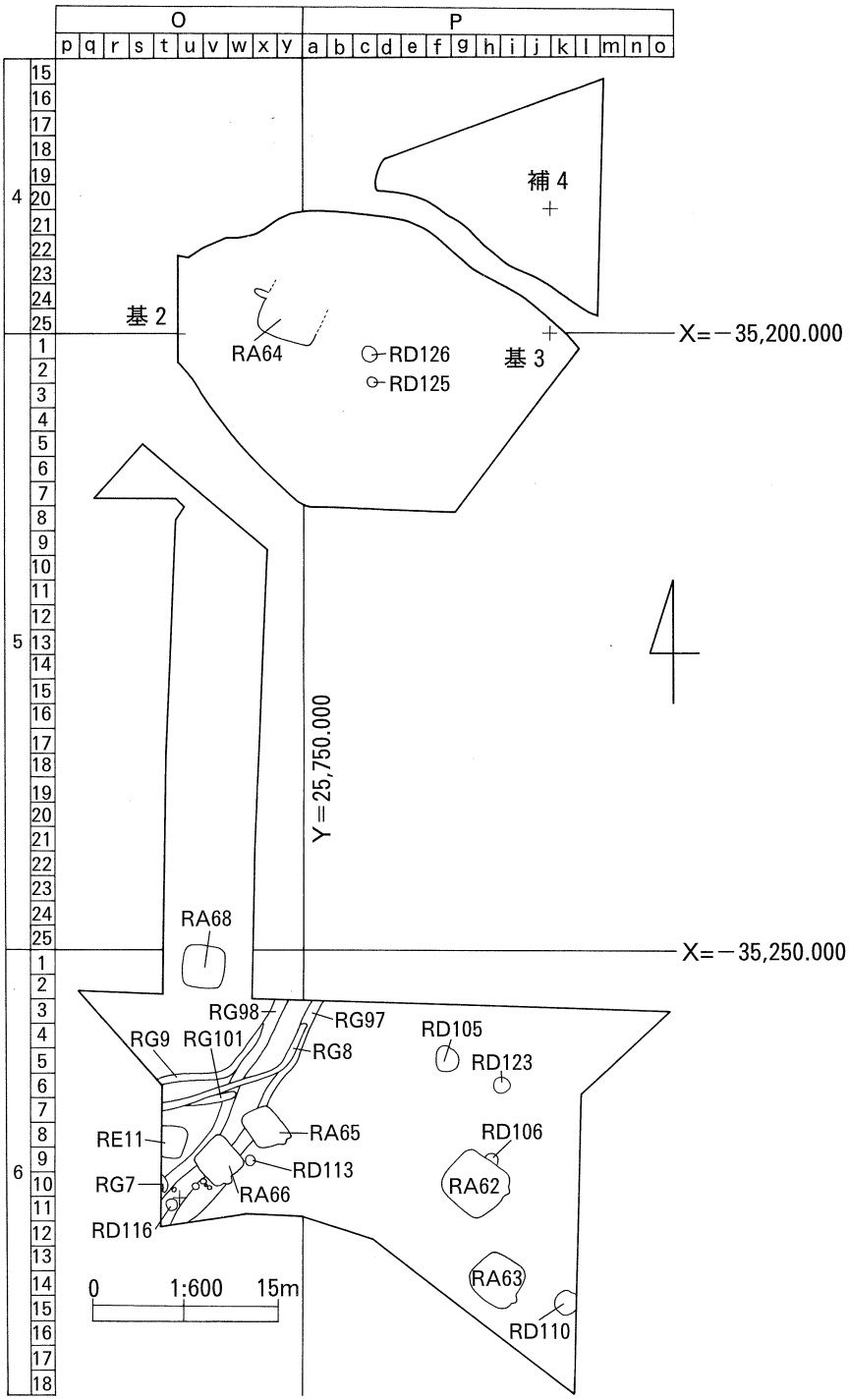
野外調査での写真撮影は、６×７㎝判カメラを中心に35㎜判カメラを使用した。使用したフィルムは、モノクロがコダックPlus-X　Pan・Tri-X　Pan、カラーリバーサルはコダックＤＹＮＡである。撮影にあたっては、整理時の混乱を防ぐため、撮影内容を記入した撮影カードを対象遺構・遺物の撮影前に撮影している。

2．室内整理

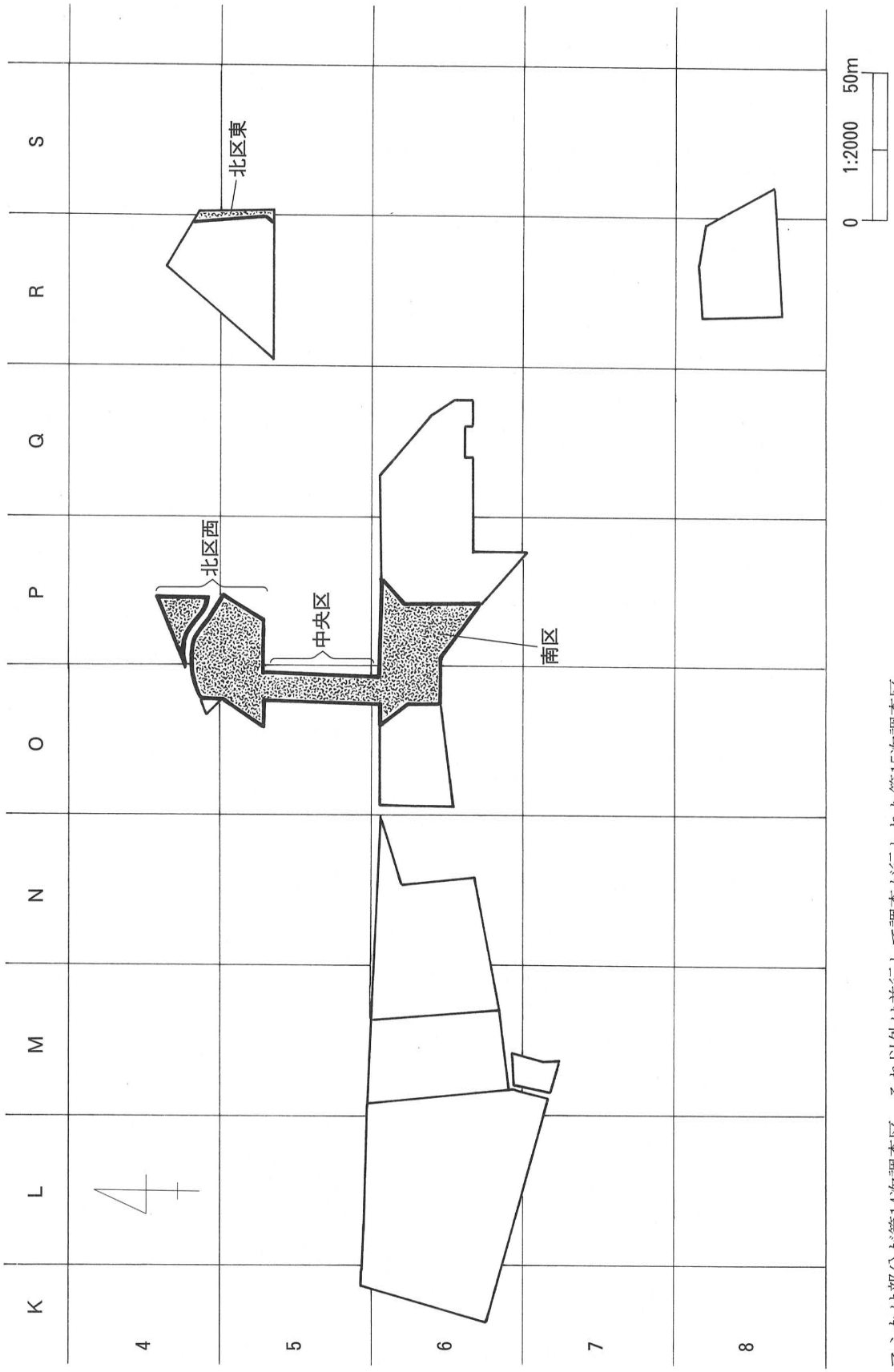
室内整理は、現場で洗浄した遺物の注記作業から開始した。その後、接合、復元、実測図の作成、トレース、写真撮影の順に進め、併せて登録作業を行った。また、野外調査で作成した実測図の点検・合成したのち、第２原図を作成し、そのトレースを行った。また、これらの作業と並行して原稿の執筆・図版組みなどを行った。なお、本報告書に掲載した遺物は、すべて写真撮影を行った。



第７図　凡　例（熊堂Ｂ遺跡）



第８図　遺構配置図（熊堂Ｂ遺跡）



アミかけ部分が第14次調査区。それ以外は並行して調査が行われた第15次調査区。

第９図　調査区およびグリッド図（熊堂Ｂ遺跡）

矢盛（やもり）遺跡（第３次調査）

Ⅳ　検出された遺構と出土遺物

＜概要＞

本次調査で検出された遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構が13基、時期不明の土坑が２基、近世の掘立柱建物跡が３棟と素掘りの井戸跡が１基となっている。

出土した遺物は、井戸跡底部から中世（15～16世紀頃）のものと思われる擂り鉢片と近世の木桶の一部、および掘立柱建物跡の柱穴内部から近世の肥前産と思われる陶磁器片が出土している。

１．陥し穴状遺構　＜ＲＤ＞

調査区中央を北東～南西方向へ貫く旧河道（古代以前のものと推定）の西側微高地上に、縄文時代の遺構と推察される陥し穴状遺構13基が、断続的に検出されている。遺構に伴う出土遺物は皆無で、底部に逆茂木等の痕跡も認められなかった。

RD011　陥し穴状遺構（第10図、写真図版２）

＜位置・重複関係＞　調査区北西部の２Ｃ12ｋグリッド付近に位置する。遺構検出面はⅣ層上面である。重複関係はないが、遺構は攪乱を受け約半分は調査区外へも延びるため詳細は不明である。

＜長軸方向＞　Ｎ－77°－Ｗ

＜平面形＞　細長い溝状を呈する。

＜断面形＞　（縦）フラスコ状・（横）緩やかなＶ字状

＜規模＞　開口部径は175×32㎝（暫定値）、底部径は202×18㎝（暫定値）、深さは88㎝である。

＜埋土＞　５層からなるが、埋土の断面観察から自然堆積と思われる。

＜底面＞　ごく緩やかに波打っている。

＜遺物・時期＞　出土遺物はないが、類例から縄文時代の遺構と推察される。

RD012　陥し穴状遺構（第10図、写真図版２）

＜位置・重複関係＞　調査区西端の２Ｃ15ｈグリッド付近に位置する。遺構検出面はⅣ層上面である。重複関係はないが、遺構の約半分は調査区外へ延びるため詳細は不明である。

＜長軸方向＞　Ｎ－53°－Ｗ

＜平面形＞　細長い溝状を呈する。

＜断面形＞　（縦）緩やかなフラスコ状・（横）やや屈曲したＵ字状

＜規模＞　開口部径は182×34㎝（暫定値）、底部径は178×20㎝（暫定値）、深さは85㎝である。

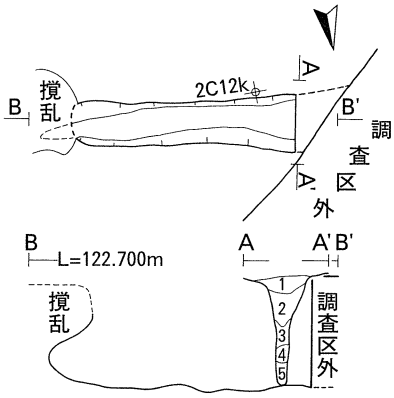
＜埋土＞　３層からなるが、埋土の断面観察から自然堆積と思われる。

＜底面＞　ほぼ平坦である。

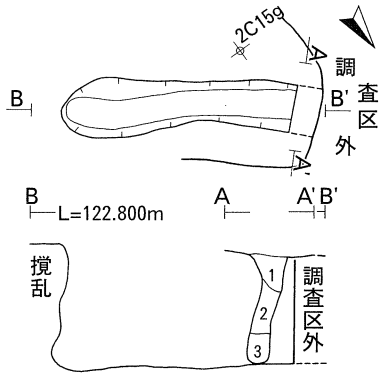
＜遺物・時期＞　出土遺物はないが、類例から縄文時代の遺構と推察される。

RD013　陥し穴状遺構（第10図、写真図版３）

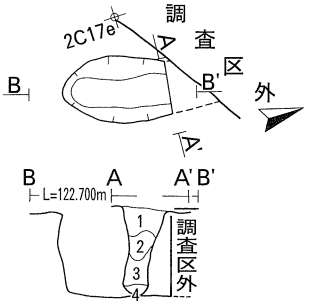
＜位置・重複関係＞　調査区西端の２Ｃ17ｅグリッド付近に位置する。遺構検出面はⅣ層上面である。重複



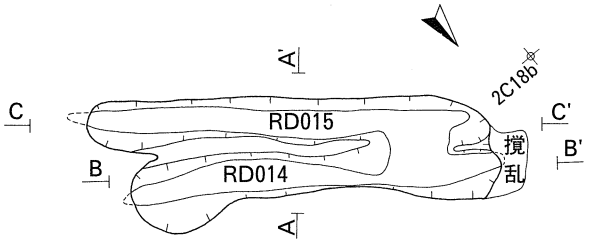
RD011 陥し穴状遺構
1. 10YR2/1　黒色土　粘性ややあり　しまり密
　(地山ブロックを10%含む)
2. 10YR2/3　黒褐色土　粘性あり　しまり密
　(地山ブロックを30%含む)
3. 10YR4/4　褐色土　粘性ややあり　しまり密
　(黒褐色土のブロックをわずかに含む)
4. 10YR2/1　黒色土　粘性あり　しまりやや密
　(酸化鉄を部分的に含む)
5. 10YR2/2　黒褐色土　粘性あり　しまりやや密
　(地山ブロックをわずかに含む)

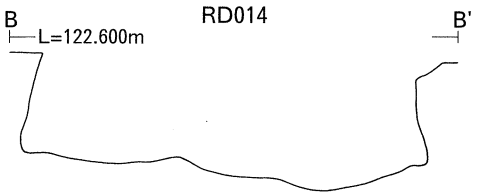


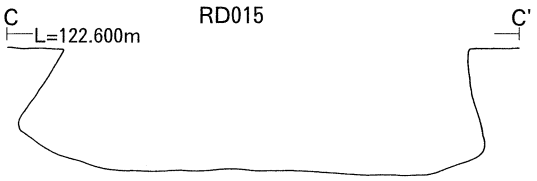
RD012 陥し穴状遺構
1. 10YR2/2　黒褐色土　粘性あり　しまり密
　(地山ブロックを30%含む)
2. 10YR4/6　褐色土　粘性ややあり　しまり密
　(黒褐色土のブロックをわずかに含む)
3. 10YR4/6　褐色土　粘性ややあり　しまり密
　(酸化鉄のブロックをわずかに含む)

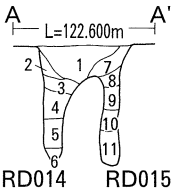


RD013陥し穴状遺構
1. 10YR2/1　黒色土　粘性あり　しまり密
2. 10YR3/3　暗褐色土　粘性あり　しまり密
　(全体に褐色土を薄く含む)
3. 10YR4/6　褐色土　粘性ややあり　しまり密
4. 10YR3/4　暗褐色土　粘性ややあり　しまり密
　(酸化鉄を薄く含む)









RD014（1～6層）・RD015（7～11層）陥し穴状遺構
1. 10YR2/2　黒褐色土　粘性ややあり　しまりやや密
2. 10YR2/3　黒褐色土　粘性ややあり　しまり密
　(地山ブロックを30%含む)
3. 10YR2/2　黒褐色土　粘性ややあり　しまり密
　(地山ブロックを10%含む)
4. 10YR3/4　暗褐色土　粘性ややあり　しまり密
　(黒褐色土を薄く含む)
5. 10YR4/6　褐色細砂　粘性ややあり　しまり密
　(全体に酸化鉄をわずかに含む)
6. 10YR4/4　褐色粗砂　粘性ややあり　しまり密
　(全体にシルトを少量含む)
7. 10YR2/2　黒褐色土　粘性あり　しまりやや密
　(地山ブロックを20%含む)
8. 10YR2/3　黒褐色土　粘性あり　しまり密
　(地山ブロックを40%含む)
9. 10YR4/6　黒色細砂　粘性やや弱　しまり密
10. 10YR3/3　暗褐色土　粘性やや弱　かたくしまる
　(地山ブロックを少量含む)
11. 10YR2/3　黒褐色土　粘性強　しまり弱
　(地山ブロックを30%含む)

0　S=1/60　2m

第10図　陥し穴状遺構（RD011～015）

関係はないが、遺構の半分以上は調査区外へ延びるため詳細は不明である。
＜長軸方向＞　N－15°－E
＜平面形＞　溝状を呈するものと思われる。
＜断面形＞　（縦）緩やかな凹状・（横）緩やかなU字状
＜規模＞　開口部径は83×52cm（暫定値）、底部径は77×22cm（暫定値）、深さは69cmである。
＜埋土＞　4層からなるが、埋土の断面観察から自然堆積と思われる。
＜底面＞　ほぼ平坦である。
＜遺物・時期＞　出土遺物はないが、類例から縄文時代の遺構と推察される。

RD014　陥し穴状遺構（第10図、写真図版3）
＜位置・重複関係＞　調査区南西端の2C19bグリッド付近に位置する。遺構検出面はⅣ層上面である。RD015陥し穴状遺構と重複するが、埋土の堆積状況から本遺構の方が新しいものと推定される。
＜長軸方向＞　N－53°－W
＜平面形＞　細長い溝状を呈する。
＜断面形＞　（縦）フラスコ状・（横）U字状
＜規模＞　開口部径は290×35cm、底部径は300×25cm、深さは92cmである。
＜埋土＞　RD015との重複はあるが、6層からなる自然堆積と思われる。断面観察から、本遺構の方が後の時期に構築されたものと推定される。
＜底面＞　一方が緩やかに落ち込む形状である。
＜遺物・時期＞　出土遺物はないが、類例から縄文時代の遺構と推察される。

RD015　陥し穴状遺構（第10図、写真図版3）
＜位置・重複関係＞　調査区南西端の2C19bグリッド付近に位置する。遺構検出面はⅣ層上面である。RD014陥し穴状遺構と重複するが、埋土の堆積状況から本遺構の方が古いものと推定される。
＜長軸方向＞　N－48°－W
＜平面形＞　細長い溝状を呈する。
＜断面形＞　（縦）フラスコ状・（横）細長いU字状
＜規模＞　開口部径は314×35cm、底部径は314×21cm、深さは94cmである。
＜埋土＞　RD014との重複はあるが、5層からなる自然堆積と思われる。断面観察から、本遺構の方が先に土砂の堆積等により廃棄されたものと推定される。
＜底面＞　長軸方向に緩やかに傾く形状である。
＜遺物・時期＞　出土遺物はないが、類例から縄文時代の遺構と推察される。

RD016　陥し穴状遺構（第11図、写真図版3）
＜位置・重複関係＞　調査区南西端の2C20dグリッド付近に位置する。遺構検出面はⅣ層上面である。重複関係はない。
＜長軸方向＞　N－32°－W
＜平面形＞　細長い溝状を呈する。

＜断面形＞　（縦）緩やかなフラスコ状・（横）緩やかなＵ字状
＜規模＞　開口部径は319×54㎝、底部径は345×18㎝、深さは107㎝である。
＜埋土＞　６層からなるが、埋土の断面観察から自然堆積と思われる。
＜底面＞　ほぼ平坦である。
＜遺物・時期＞　出土遺物はないが、類例から縄文時代の遺構と推察される。

RD017 陥し穴状遺構（第11図、写真図版３）

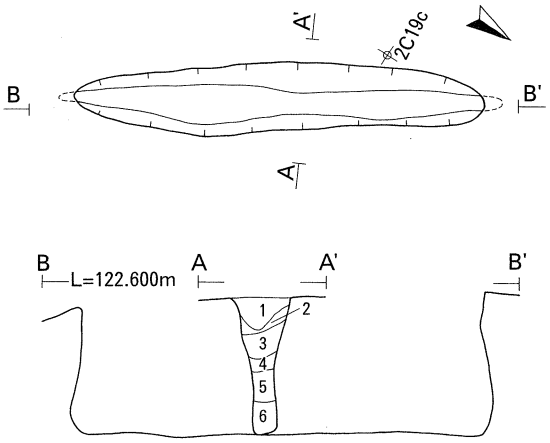
＜位置・重複関係＞　調査区南西端の２Ｃ20ｆグリッド付近に位置する。遺構検出面はⅣ層上面である。重複関係はない。
＜長軸方向＞　Ｎ－54°－Ｗ
＜平面形＞　細長い溝状を呈する。
＜断面形＞　（縦）フラスコ状・（横）緩やかなＵ字状
＜規模＞　開口部径は311×59㎝、底部径は332×19㎝、深さは100㎝である。
＜埋土＞　８層からなるが、埋土の断面観察から自然堆積と思われる。
＜底面＞　ほぼ平坦である。
＜遺物・時期＞　出土遺物はないが、類例から縄文時代の遺構と推察される。

RD018　陥し穴状遺構（第11図、写真図版４）

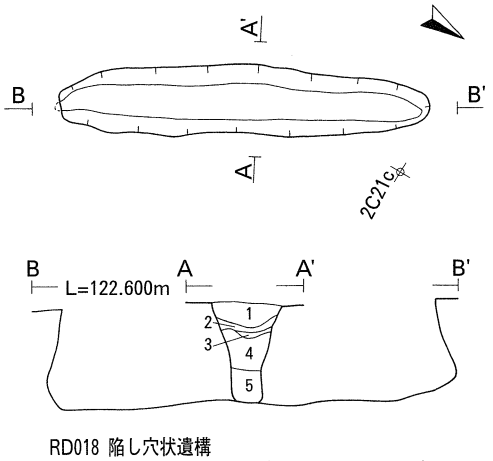
＜位置・重複関係＞　調査区南西端の２Ｃ21ｃグリッド付近に位置する。遺構検出面はⅣ層上面である。重複関係はない。
＜長軸方向＞　Ｎ－27°－Ｗ
＜平面形＞　細長い溝状を呈する。
＜断面形＞　（縦）フラスコ状・（横）緩やかなＵ字状
＜規模＞　開口部径は287×56㎝、底部径は286×29㎝、深さは79㎝である。
＜埋土＞　５層からなるが、埋土の断面観察から自然堆積と思われる。
＜底面＞　一方が緩やかに上昇する形状である。
＜遺物・時期＞　出土遺物はないが、類例から縄文時代の遺構と推察される。

RD019　陥し穴状遺構（第11図、写真図版４）

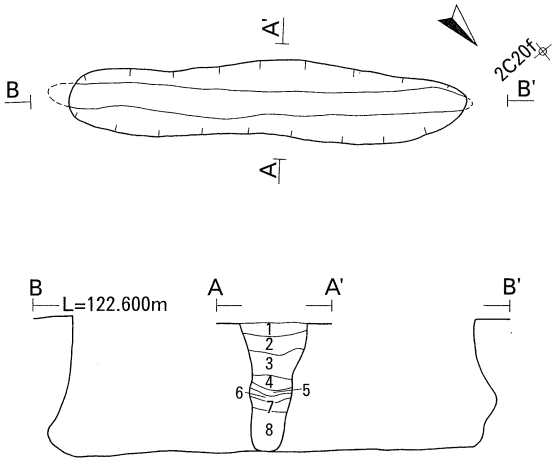
＜位置・重複関係＞　調査区南西端の２Ｃ22ｃグリッド付近に位置する。遺構検出面はⅣ層上面である。遺構の約半分は、旧村営住宅の排水槽による攪乱を受けている。
＜長軸方向＞　Ｎ－34°－Ｗ
＜平面形＞　溝状を呈するものと思われる。
＜断面形＞　（縦）緩やかな凹状・（横）Ｕ字状
＜規模＞　開口部径は113×50㎝（暫定値）、底部径は103×26㎝（暫定値）、深さは79㎝である。
＜埋土＞　６層からなるが、埋土の断面観察から自然堆積と思われる。
＜底面＞　ほぼ平坦である。
＜遺物・時期＞　出土遺物はないが、類例から縄文時代の遺構と推察される。



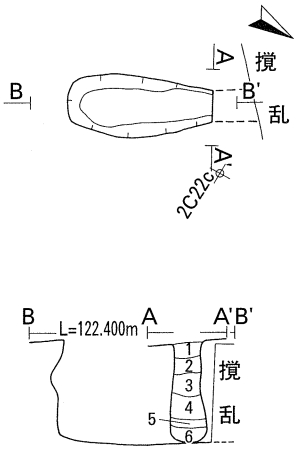
RD016 陥し穴状遺構
1．10YR2/1　黒色土　粘性ややあり　しまり密
2．10YR3/2　黒褐色土　粘性ややあり　しまり密
（地山ブロックを20%含む）
3．10YR2/2　黒褐色土　粘性あり　しまり密
（地山ブロックを10%含む）
4．10YR4/6　褐色土　粘性ややあり　しまり密
（黒褐色土のブロックを少量含む）
5．10YR4/4　褐色細砂　粘性やや弱　しまり密
（酸化鉄を全体に少量含む）
6．10YR4/6　褐色土　粘性ややあり　しまりやや密
（酸化鉄を全体に40%含む）



RD018 陥し穴状遺構
1．10YR2/1　黒色土　粘性ややあり　しまり密
（全体に地山ブロックを薄く含む）
2．10YR4/6　褐色土　粘性ややあり　しまりやや密
（黒褐色土のブロックを10%含む）
3．10YR2/2　黒褐色土　粘性ややあり　しまり密
4．10YR5/6　黄褐色土　粘性やや弱　しまり密
（黒褐色土のブロックを少量含む）
5．10YR2/3　黒褐色土　粘性ややあり　しまり密
（地山ブロックを20%含む）



RD017 陥し穴状遺構
1．10YR2/1　黒色土　粘性あり　しまり密
2．10YR2/2　黒褐色土　粘性ややあり　しまり密
（地山ブロックを20%含む）
3．10YR4/4　褐色土　粘性ややあり　しまりやや密
（黒褐色土のブロックを一部に含む）
4．10YR4/6　褐色細砂　粘性弱　しまりやや密
（黒褐色土のブロックを20%含む）
5．10YR2/2　黒褐色土　粘性あり　しまりやや密
（地山ブロックを10%含む）
6．10YR2/3　黒褐色土　粘性あり　しまりやや密
（地山ブロックを40%含む）
7．10YR4/4　褐色細砂　粘性ややあり　かたくしまる
（シルトを少量含む）
8．10YR4/4　褐色細砂　粘性弱　しまり密
（黒褐色土のブロックを少量含む）



RD019 陥し穴状遺構
1．10YR2/3　黒褐色土　粘性ややあり　しまりやや密
2．10YR3/3　暗褐色土　粘性ややあり　しまりやや密
（地山ブロックを20%含む）
3．10YR2/2　黒褐色土　粘性あり　しまり密
（地山ブロックを30%含む）
4．10YR4/6　褐色細砂　粘性ややあり　しまり密
（一部に黒褐色土のブロックを含む）
5．10YR2/2　黒褐色粗砂　粘性やや弱　しまり密
（全体に酸化鉄をわずかに含む）
6．10YR4/6　褐色土　粘性ややあり　しまり密
（全体に酸化鉄をわずかに含む）

0　S=1/60　2m

第11図　陥し穴状遺構（RD016～019）

RD020　陥し穴状遺構（第12図、写真図版４）

＜位置・重複関係＞　調査区南西端の２Ｂ23ｘグリッド付近に位置する。遺構検出面はⅣ層上面である。重複関係はない。

＜長軸方向＞　Ｎ－51°－Ｗ

＜平面形＞　細長い溝状を呈する。

＜断面形＞　（縦）緩やかなフラスコ状・（横）緩やかなＵ字状

＜規模＞　開口部径は377×48㎝、底部径は383×19㎝、深さは76㎝である。

＜埋土＞　８層からなるが、埋土の断面観察から自然堆積と思われる。

＜底面＞　一方が緩やかに傾く形状である。

＜遺物・時期＞　出土遺物はないが、類例から縄文時代の遺構と推察される。

RD021　陥し穴状遺構（第12図、写真図版４）

＜位置・重複関係＞　調査区南西端の２Ｂ24ｙグリッド付近に位置する。遺構検出面はⅣ層上面である。重複関係はない。

＜長軸方向＞　Ｎ－59°－Ｗ

＜平面形＞　細長い溝状を呈する。

＜断面形＞　（縦）フラスコ状・（横）緩やかなＶ字状

＜規模＞　開口部径は344×37㎝、底部径は390×18㎝、深さは102㎝である。

＜埋土＞　５層からなるが、埋土の断面観察から自然堆積と思われる。

＜底面＞　長軸方向に緩やかに傾く形状である。

＜遺物・時期＞　出土遺物はないが、類例から縄文時代の遺構と推察される。

２．土坑　＜ＲＤ＞

陥し穴状遺構を含めない土坑は、調査区の東側から２基検出されている。形態は楕円形で、出土遺物もなく時期や性格は不明のものである。

RD002　土坑（第12図、写真図版２）

＜位置・重複関係＞　調査区東側の２Ｃ25ｑグリッド付近に位置する。遺構検出面はⅣ層上面である。風倒木痕の上層から検出された。

＜平面形＞　円に近い楕円形を呈する。

＜断面形＞　壁は緩やかに立ち上がる。

＜規模＞　開口部径は94×76㎝、深さは16㎝である。

＜埋土＞　黒褐色土に細かい地山ブロックが全体に混入しており、人為堆積の可能性も考えられる。

＜底面＞　凹凸はなくなだらかである。

＜遺物・時期・性格＞　出土遺物はなく、時期・性格も不明である。

RD004　土坑（第12図、写真図版２）

＜位置・重複関係＞　調査区東側の２Ｄ15aグリッド付近に位置する。遺構検出面はⅣ層上面である。重複

関係はない。
＜平面形＞　楕円形を呈する。
＜断面形＞　壁は底面からやや急に立ち上がる。
＜規模＞　開口部径は150×54cm、深さは36cmである。
＜埋土＞　黒褐色土の単層である。
＜底面＞　凹凸はなくなだらかである。
＜遺物・時期・性格＞　出土遺物はなく、時期・性格も不明である。

3．井戸跡 ＜ＲＩ＞

調査区中央の東側、掘立柱建物跡が集中する区域に近接して井戸跡が１基検出されている。平面形はほぼ円形で、井戸枠や石組みはなく素掘りのみによるものである。深さは約１ｍでさほど深い井戸跡ではないが、旧河道に隣接していることからおびただしい湧水があり、地下水面が高く往時も枯渇の心配は少なかったものと推察される。出土遺物から近世の遺構である可能性が高い。

RI001　井戸跡（第12図、写真図版10）

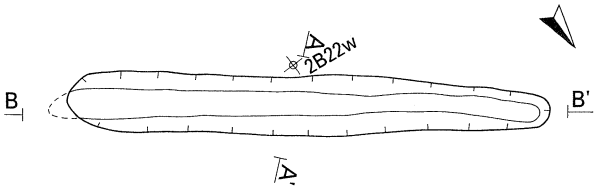
＜位置・重複関係＞　調査区東側の２Ｃ25ｑグリッド付近に位置する。遺構検出面はⅣ層上面である。重複関係はない。
＜平面形＞　円形を呈する。
＜断面形＞　壁はきれいなＵ字状を呈する。
＜規模＞　開口部径は124×123cm、底部径は102×98cm、深さは105cmである。
＜埋土＞　４層からなるが、４層目は壁の崩落によるものであり、３層目が粘性の強い黒色土、２層目では全体に酸化鉄を含み、１層目には地山ブロックが含まれていた。これらの状況から、廃棄または自然災害等による埋没があり、やや時間差をおいて再び埋め戻しが行われた可能性が考えられる。
＜底部＞　自然礫が大部分を占める基本層序のＶ層に到達したところが井戸の底部となっており、Ｖ層がやや被圧を受けた帯水層であることがわかる。
＜遺物・時期＞　15～16世紀の擂り鉢片（遺物№２）と、木桶片（ヒノキ）およびそれに付随する竹製の留め具材（№３～10）が出土していることや、隣接する掘立柱建物跡の存在等から近世の遺構と推定される。

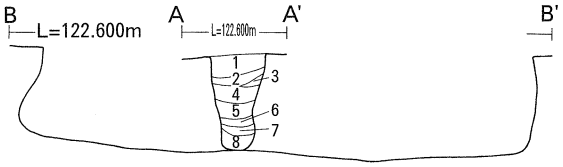
4．掘立柱建物跡 ＜ＲＢ＞

調査区のほぼ中央に、旧河道と一部が重複して３棟の掘立柱建物跡が検出された。各建物跡は出土遺物や柱間寸法等から近世の遺構と推定されるが、南西側の２棟は柱穴の重複状況から建て替えが行われた様子がうかがわれる。平面図中の柱間寸法については、代表的な柱間数値（cm）を計測したのち、１尺＝30.3cmで換算し併記している。

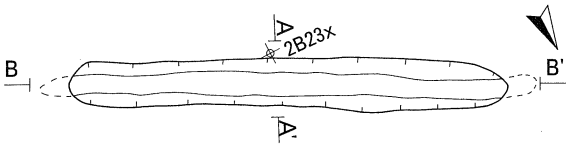
RB001　掘立柱建物跡（第13図、写真図版５・６）

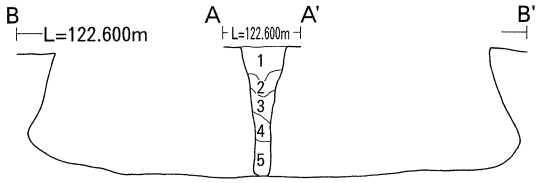
＜位置・重複関係＞　調査区のほぼ中央、２Ｃ20ｐグリッド付近に位置する。遺構検出面はⅣ層上面である。RB003掘立柱建物跡と重複するが、本遺構の方が古いものと思われる。
＜規模・建物方位＞　桁行４間（773cm：25.5尺）、梁間３間（499cm：16.5尺）、棟方向は北東～南西で北を



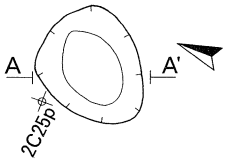


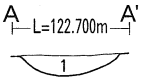
RD020 陥し穴状遺構
1．10YR2/1　黒色土　粘性ややあり　しまり密
　（薄く褐色土を含む）
2．10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性あり　しまり密
3．10YR3/3　暗褐色粗砂　粘性弱　しまり密
4．10YR4/4　褐色土　粘性ややあり　しまり密
　（黒褐色土のブロックをわずかに含む）
5．10YR2/2　黒褐色粗砂　粘性弱　かたくしまる
　（地山ブロックを30%含む）
6．10YR3/6　暗赤褐色粗砂　粘性やや弱　かたくしまる
　（全体に酸化鉄を多く含む）
7．10YR4/6　褐色土　粘性ややあり　しまり密
　（黒色の粗砂を30%含む）
8．10YR4/6　褐色細砂　粘性やや弱　しまり密
　（酸化鉄を多く含む）



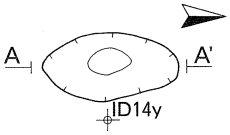


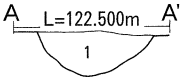
RD021 陥し穴状遺構
1．10YR2/1　黒色土　粘性ややあり　しまり密
　（地山ブロックをわずかに含む）
2．10YR4/6　褐色土　粘性ややあり　しまりやや密
　（黒褐色土のブロックを30%含む）
3．10YR2/1　黒色土　粘性あり　しまりやや密
　（地山ブロックを10%含む）
4．10YR4/6　褐色土　粘性あり　しまり密
　（黒褐色土のブロックを30%と、酸化鉄を全体に少量含む）
5．10YR1.7/1　黒色粘土　粘性弱　しまり弱
　（全体に酸化鉄を20%含む）



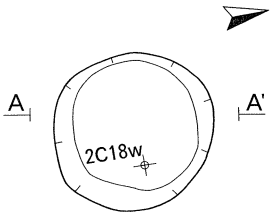


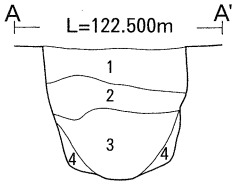
RD002 土坑
1．10YR2/2　黒褐色土　粘性あり　しまり密
　（細かい地山ブロックを全体に含む）





RD004 土坑
1．10YR2/3　黒褐色土　粘性あり　しまり密

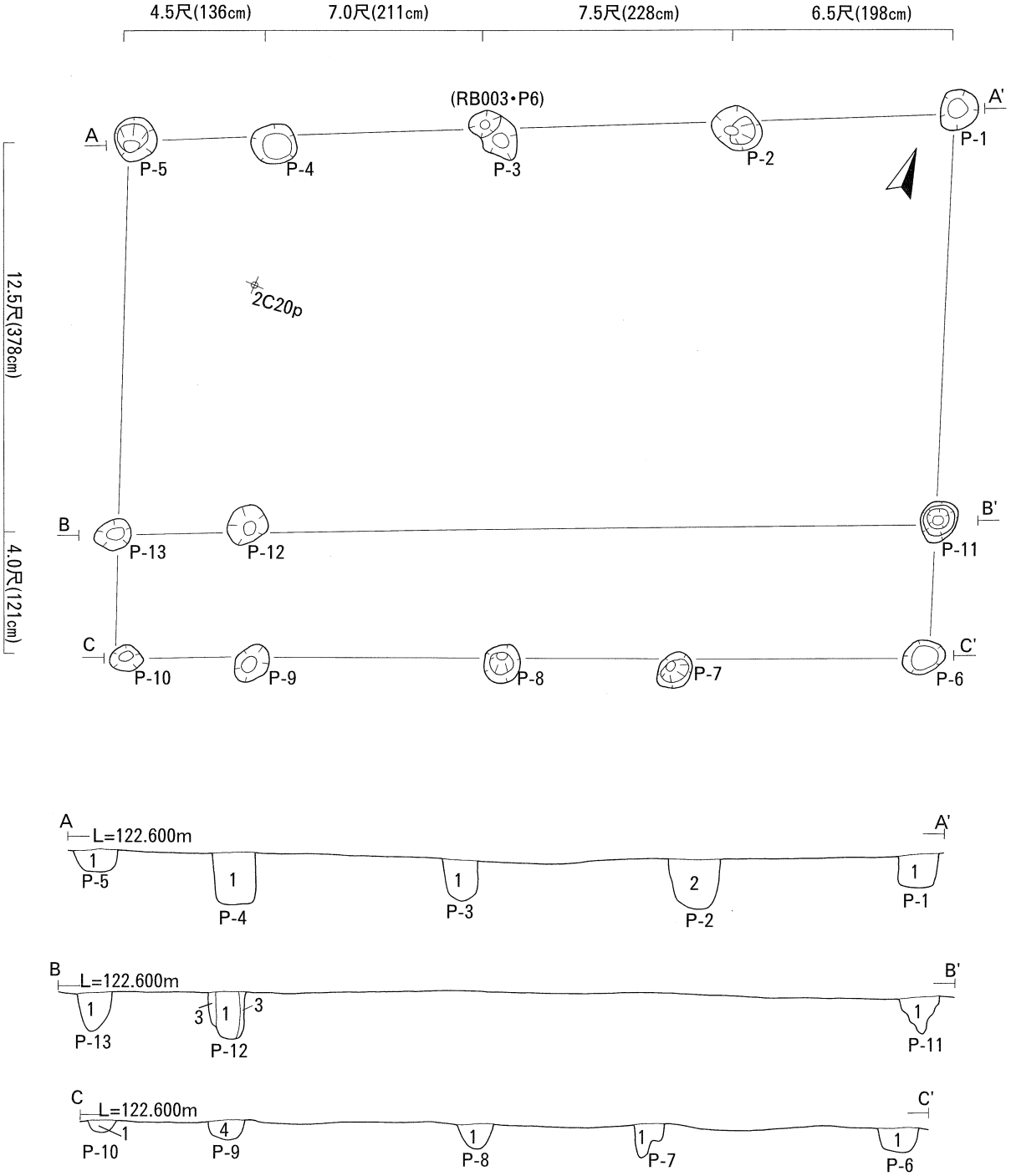




RI001 井戸跡
1．10YR2/1　黒色土　粘性ややあり　しまり密
　（全体に地山ブロックを10%含む）
2．10YR1.7/1　黒色土　粘性あり　しまり密
　（全体に粒状の酸化鉄を含む）
3．10YR1.7/1　黒色土　粘性強　しまりやや密
4．7.5Y3/2　オリーブ黒色粘土　しまり密
　（径1～10cmの自然礫を多く含む）

0　S=1/60　2m

第12図　陥し穴状遺構（RD020・021）・土坑・井戸跡



RB001 掘立柱建物跡

1. 10YR1.7/1 黒色土 粘性ややあり しまり密
(細かい地山ブロックを10～20%含む)
2. 10YR1.7/1 黒色土 粘性ややあり しまり密
(グライ化した地山ブロックを20%含む)
3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり かたくしまる
(地山ブロックを40%含む)
4. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり しまりやや密
(地山ブロックを40%含む。草の根の撹乱が多い)

RB001 掘立柱建物跡 観察表

遺構名	口径(cm)	深さ(cm)
P 1	40×34	52.2
P 2	(48)×38	8.0
P 3	(34)×(24)	39.2
P 4	47×38	42.2
P 5	42×38	19.5
P 6	38×31	20.5
P 7	36×28	18.4

遺構名	口径(cm)	深さ(cm)
P 8	38×34	19.3
P 9	38×28	18.1
P10	35×24	17.8
P11	42×35	43.3
P12	40×34	46.4
P13	35×27	26.8

※括弧内は残存値を計測し記載

0 S=1/60 2m

第13図 掘立柱建物跡（RB001）

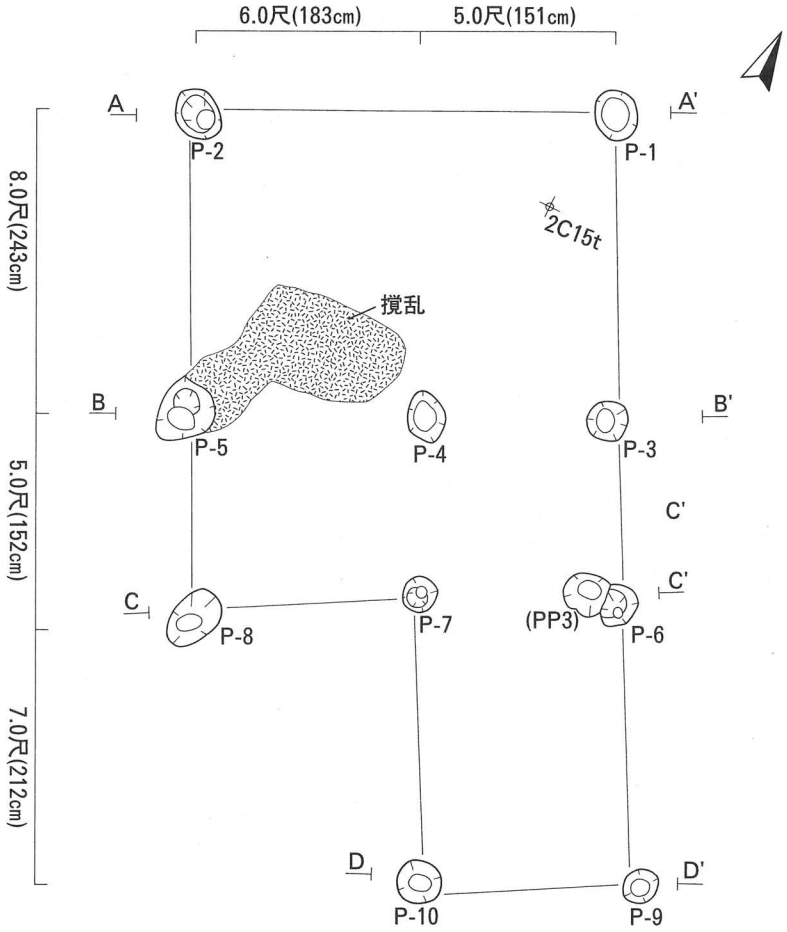
基準に約70°東偏する。
<柱間寸法>　桁行が4.5尺（136cm）・6.5尺（198cm）・7尺（211cm）・7.5尺（228cm）、梁間は4尺（121cm）と12.5尺（378cm）を使用している。
<付属施設・建物の性格>　平面形を観察すると、南側または西側に庇部分が付随する構造とも推定され、大きさから小形の家屋もしくは付属小屋的な用途が考えられる。近接して検出されたRB002掘立柱建物跡やRI001井戸跡とも関連する遺構と推測される。
<出土遺物>　P－2の底部から肥前産の陶磁器片（遺物№1）が出土している。
<時期>　出土した陶磁器片と柱間寸法等から近世の建物跡である可能性が高い。

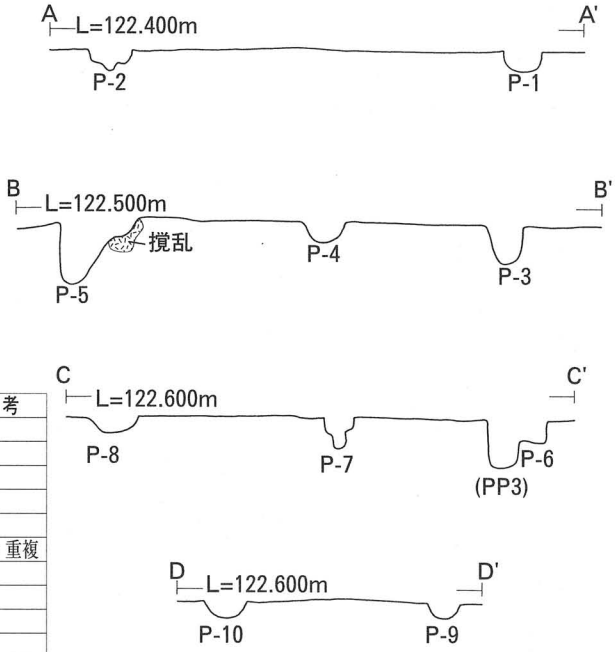
RB002　掘立柱建物跡（第14図、写真図版7・8）

<位置・重複関係>　調査区のほぼ中央、2C15tグリッド付近に位置する。遺構検出面はⅣ層上面である。重複関係はない。旧河道に伴う泥濘地形と多数の攪乱状ピットの存在から、検出時におけるプランの把握が困難であったため、柱穴の各断面は空断面で掲載している。
<規模・建物方位>　桁行3間（607cm：20.0尺）、梁間2間（334cm：11.0尺）、棟方向は北西～南東で北を基準に約25°西偏する。
<柱間寸法>　桁行が5尺（152cm）・7尺（212cm）・8尺（243cm）、梁間は5尺（151cm）と6尺（183cm）を使用している。
<付属施設・建物の性格>　南東側に1間分の張り出し部分を持つ構造であるが、建物の大きさから付属小屋的な用途が考えられる。近接して検出されたＲＢ001・003掘立柱建物跡やＲＩ001井戸跡とも関連する遺構と推測される。
<出土遺物>　出土していない。
<時期>　柱間寸法等から近世の建物跡である可能性が高い。

RB003　掘立柱建物跡（第15図、写真図版9）

<位置・重複関係>　調査区のほぼ中央、2C17pグリッド付近に位置する。遺構検出面はⅣ層上面である。RB001掘立柱建物跡と重複するが、本遺構の方が新しいものと思われる。旧河道に伴う泥濘地形と多数の攪乱状ピットの存在から、検出時におけるプランの把握が困難であったため、柱穴の各断面は空断面で掲載している。
<規模・建物方位>　桁行3間（681cm：22.5尺）、梁間2間（440cm：14.5尺）、棟方向は北西～南東で北を基準に約20°西偏する。
<柱間寸法>　桁行が7尺（213cm）・7.5尺（226cm）・8尺（242cm）、梁間は7尺（213cm）と7.5尺（227cm）を使用している。
<付属施設・建物の性格>　建物の大きさから、小形の家屋または付属小屋的な用途が考えられるが、重複する状況からRB001掘立柱建物跡の建て替えによるものである可能性が考えられる。
<出土遺物>　出土していない。
<時期>　柱間寸法等から近世の建物跡である可能性が高い。





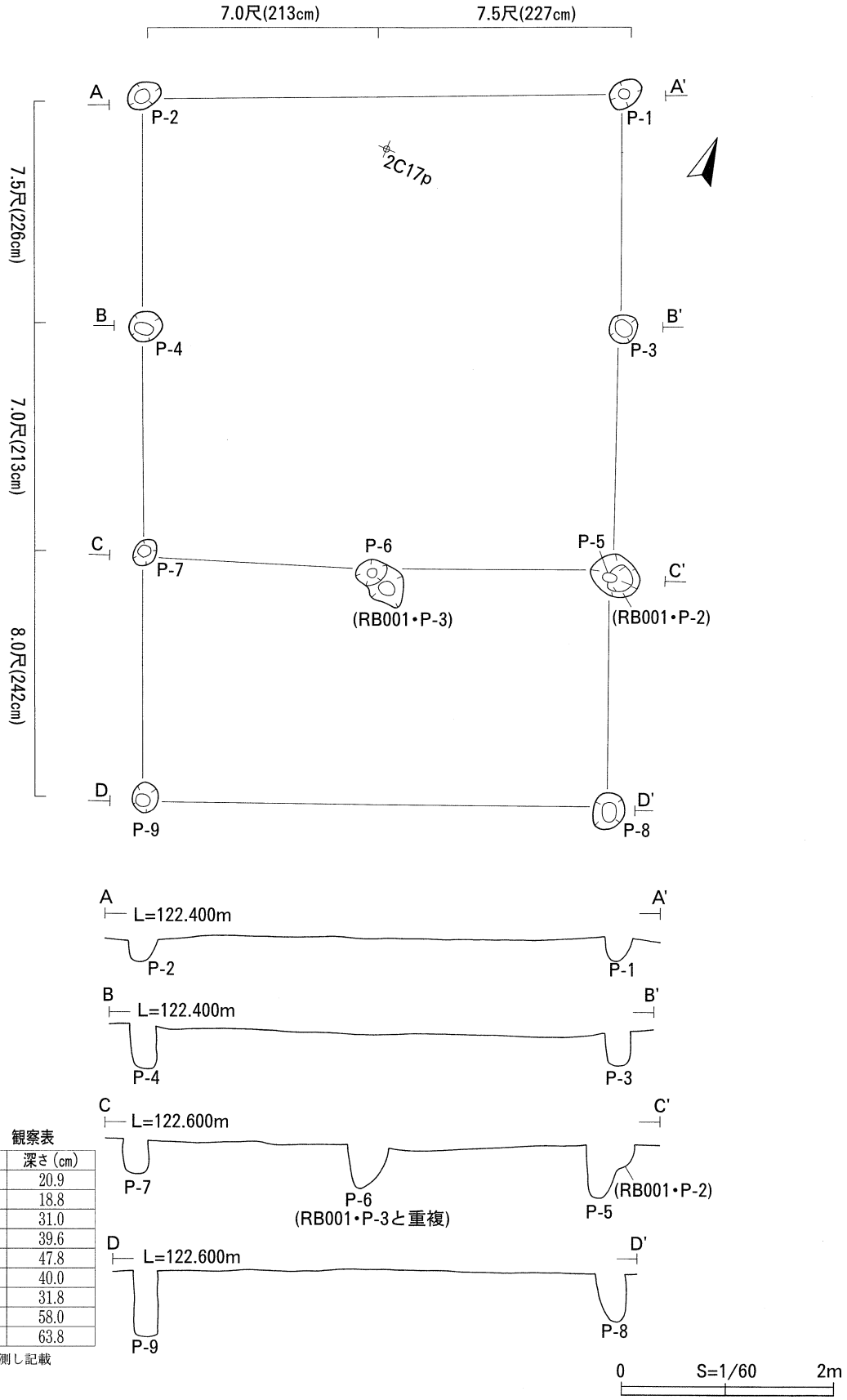
RB002 掘立柱建物跡　観察表

遺構名	口径(cm)	深さ(cm)	備　考
P 1	43×36	14.9	
P 2	43×35	12.4	
P 3	32×30	30.1	
P 4	42×32	14.9	
P 5	(51)×(40)	41.8	
P 6	(34)×(30)	28.7	PP 3 と重複
P 7	28×24	26.1	
P 8	50×38	16.8	
P 9	28×26	12.2	
P10	33×32	11.5	
PP 3	(37)×(34)	35.9	P 6 と重複

※括弧内は残存値を計測し記載

0　S=1/60　2m

第14図　掘立柱建物跡（RB002）

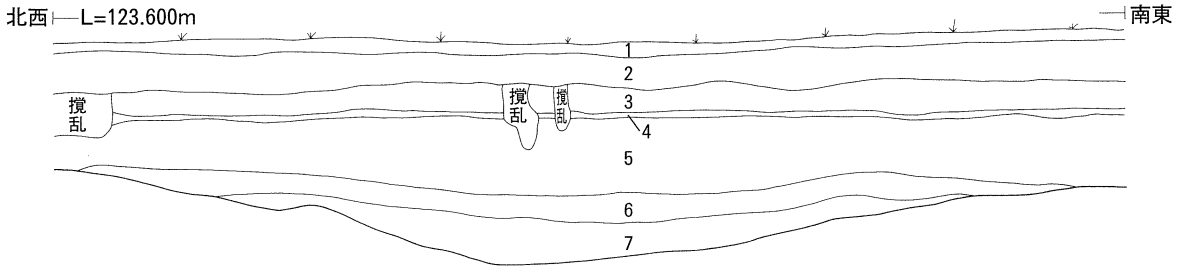


RB003 掘立柱建物跡　観察表

遺構名	口径(cm)	深さ(cm)
P 1	32×25	20.9
P 2	34×26	18.8
P 3	29×26	31.0
P 4	32×26	39.6
P 5	(48)×(38)	47.8
P 6	(29)×(22)	40.0
P 7	27×22	31.8
P 8	36×30	58.0
P 9	30×26	63.8

※括弧内は残存値を計測し記載

第15図　掘立柱建物跡（RB003）



旧河道
1．表土
2．10YR5/2　灰黄褐色粗砂　粘性弱　かたくしまる
　（礫を多く含み撹乱が多い）
3．10YR4/2　灰黄褐色土　粘性強　しまり密
　（全体に細かい礫と酸化鉄を少量含む。旧水田の耕作土）
4．酸化鉄の集積
5．10YR2/1　黒色土　粘性強　しまり密
　（旧水田の床土）
6．10YR2/1　黒褐色土　粘性あり　しまり密
　（全体に薄く暗褐色土を含む）
7．10YR2/1　黒色土　粘性強　しまり密

0　S=1/60　2m

第16図　旧河道

〈遺構観察表〉
陥し穴状遺構

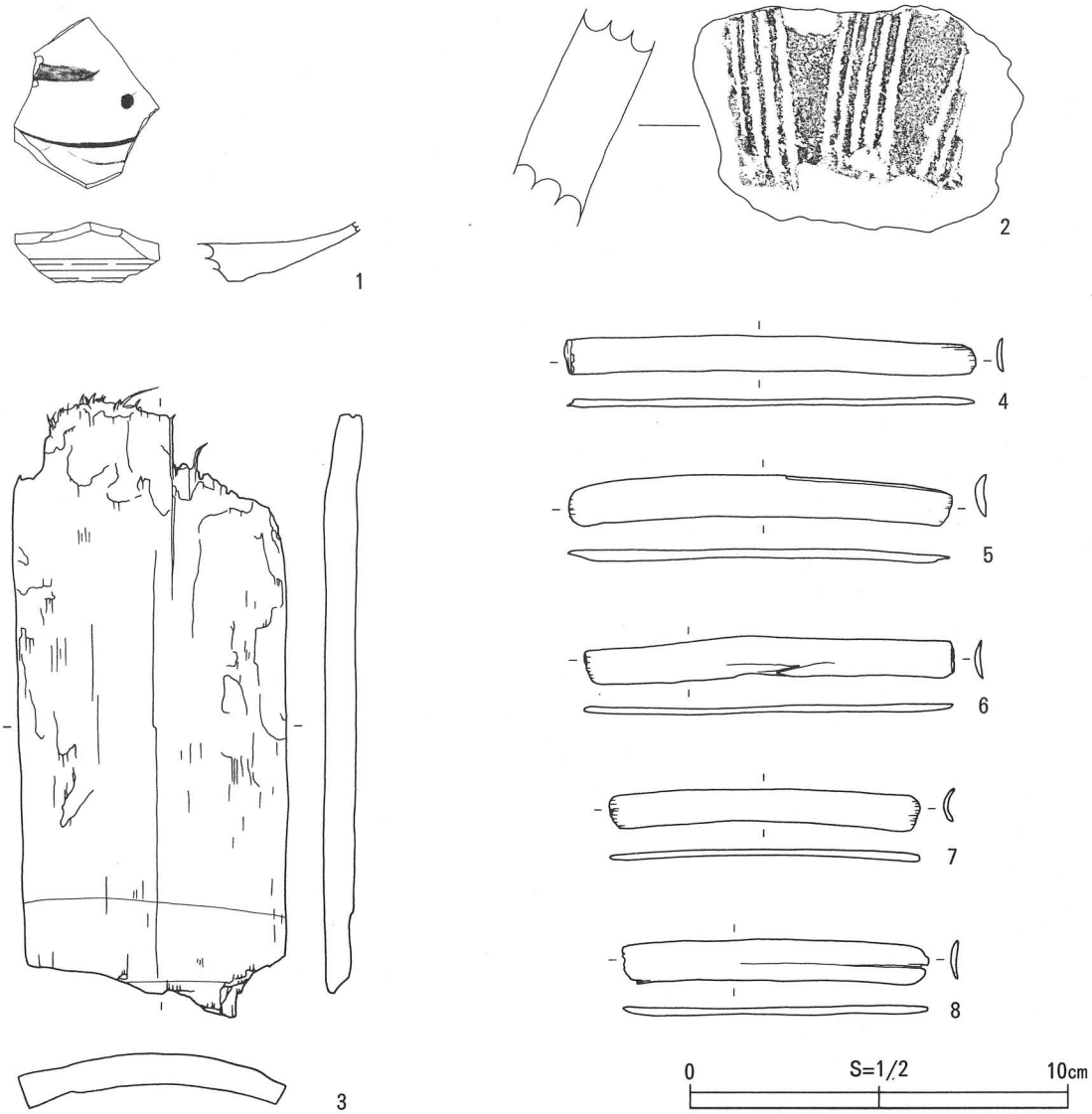
遺構名	位　置	平面形	開口部径 (cm)	底部径 (cm)	深さ (cm)	長軸方向	備　考
RD011	2C12k	溝状	(175)×32	(202)×18	88	N77°W	西端は調査区外へ延びる
RD012	2C15h	溝状	(182)×34	(178)×20	85	N53°W	西端は調査区外へ延びる
RD013	2C17e	溝状？	(83)×52	(77)×22	69	N15°E	北端は調査区外へ延びる
RD014	2C19b	溝状	290×35	300×25	92	N53°W	RD015と重複・本遺構が新しい
RD015	2C19b	溝状	314×35	314×21	94	N48°W	RD014と重複・本遺構が旧い
RD016	2C20d	溝状	319×54	345×18	107	N32°W	
RD017	2C20f	溝状	311×59	332×19	100	N54°W	
RD018	2C21c	溝状	287×56	286×29	79	N27°W	
RD019	2C22c	溝状？	(113)×50	(103)×26	79	N34°W	大半は撹乱を受ける
RD020	2B23x	溝状	377×48	383×19	76	N51°W	長軸が最長
RD021	2B24y	溝状	344×37	390×18	102	N59°W	

土　坑

遺構名	位　置	平面形	開口部径 (cm)	底部径 (cm)	深さ (cm)	備　考
RD002	2C25q	楕円形	94×76	64×43	16	時期・性格は不明
RD004	2D15a	楕円形	154×54	43×21	36	時期・性格は不明

井戸跡

遺構名	位　置	平面形	開口部径 (cm)	底部径 (cm)	深さ (cm)	備　考
RI001	2C18x	円形	124×123	102×98	105	底部から、中～近世の擂鉢片・木桶片出土



〈遺物観察表〉

陶磁器

No.	出土遺構名	層　位	種　類	器　種	年　　代	残存状況
1	RB001－P2	底部	肥前	Ⅲ	17世紀(ⅡまたはⅢ期)	底部
2	RI001	底部	陶器	擂り鉢	中世？(15～16世紀？)	底部付近

木製品

No.	遺構名	出土位置	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	残存厚 (cm)	種　類	樹種	備　　考
3	RI001	底部	16.5	7.1	0.8	木桶	檜	外面下部に留め具痕が残る。
4	RI001	底部	11.0	0.9	0.2	桶部材	竹	留め具の一部（近世）
5	RI001	底部	10.1	1.1	0.2	〃	〃	〃
6	RI001	底部	9.8	1.0	0.2	〃	〃	〃
7	RI001	底部	8.3	1.0	0.2	〃	〃	〃
8	RI001	底部	8.2	1.0	0.2	〃	〃	〃

第17図　出土遺物

V　まとめと考察

第３次調査で検出された遺構と遺物について、並行して調査を実施した第４次調査の結果もふまえながら、時期毎に整理しまとめとしたい。

検出遺構と遺物

＜縄文時代＞

陥し穴状遺構について

（位　置）

調査区を北東～南西方向へ貫く旧河道の西側に沿って13基が検出された。これらはやや一定の間隔を空けながら断続的に構築されており、旧河道内から遺物は出土していないものの、古代以前に存在した河道と推定している。遺構が断続的に検出された位置は旧河道よりやや高い面にあり、旧河道に伴う微高地にあたる部分を選んで構築されたようである。

（遺構の形態）

各遺構の形態は、検出面での平面形が細長い溝状を呈し、掘り下げた縦の断面形は、縦軸方向にのみ底部が広がるいわゆるフラスコ形で、横断面形は緩やかなＶ字またはＵ字状をもつものが大半である。一部開口部が広がった形態のものも見られるが、これらは開口部付近の壁が崩落したことに起因するものと推定している。野外調査時の掘り下げ作業中に感じたことであるが、検出面のⅣ層はやや粘性のある褐色土壌で掘り下げやすい反面、多量の降雨に見舞われた際には、崩落する状況が随所で見られた。

（配置・配列）

本次調査区内および並行して調査を行った第４次調査区内においても、断続的かつやや一定の間隔を空けて遺構が分布する状況が見られる。第４次調査区内から検出されたものも含めて、長軸方向が北西を向いているものがほとんどである。特に北端から検出されたRD005～009までの５基については、規則的に配置されている状況が際立っている。ほぼ同様な溝状形態の陥し穴状遺構が確認されている近隣地域の紫波町・稲村Ⅱ遺跡、同町西田東遺跡では、配置の形態に規則性がほとんど見られていない。

（出土遺物）

陥し穴状遺構に伴う遺物や逆茂木等の痕跡は一切見つかっていない。

（考　察）

本次調査区と第４次調査区とを合わせ、限られた微高地上（長さ約150m・幅７～35mの範囲）に、計25基が断続的かつほぼ一定の間隔をもって分布していることや、約50m北東側の位置にある細谷地第５次調査区内においても、本遺跡の陥し穴状遺構群と連続するような分布状況を見て取ることができる。

隣接遺跡まで断続的に延びるこれら陥し穴状遺構の配置は、旧河道にはさまれた僅かな微高地上を利用しなければならないといった地形上の制約がもたらした一方で、この細長い微高地地形が、旧河道内の水を飲用するために動物が頻繁に通る「けものみち」となっていた可能性も十分に考えられ、一方の旧河道をまたいだ東側には、同様な遺構が一切検出されていないことからも、微高地が狩り場として特化された場所であった様子がうかがえる。

旧河道については、陥し穴状遺構群の分布と並行していることから、当該期には存在していた可能性が高いものと考えられる。

＜近　世＞

掘立柱建物跡・井戸跡について

（掘立柱建物跡）

調査区のほぼ中央において、一部が旧河道上にまたがる形で３棟検出された。３棟のうち重複するのはRB001とRB003で、重複する柱穴の断面観察からRB001の方が先に建てられていたことが判明しており、各柱間寸法とＰ－２内から17世紀の肥前産と思われる皿の一部が出土していることなどから、当該期の建物跡であると考えられる。

また、南東側に１間分の張り出し部分をもつRB002について、各柱間寸法等から、近世の小規模な家屋または付属小屋的な建物と考えられる。RB001・003に付随した建物か、単独で建てられていたものかは不明であるが、前述の２棟と比較して小規模で特異な形態であることからも、おそらく付属小屋としての要素が強いのではないかと推測している。

（井戸跡）

RI001井戸跡（開口部径1.2m・深さ１m）の構造は素掘りで、井戸木枠や石組み等の痕跡は一切確認されていないが、底部から15～16世紀の擂り鉢片や近世の木桶片等が出土したことから、近世の遺構と推定される。深さは約１mと浅いものの、掘り下げた井戸跡内から絶えず著しい湧水が見られたことから、使用されていた当時も容易に水が得られたものと思われる。調査時の７月に来襲した台風に伴う豪雨の際には、開口部から緩やかに水が自噴したほどであり、現在でも地下水の帯水層上面が高いことがうかがわれる。

（両遺構からの出土遺物）

RB001掘立柱建物跡柱穴内からの近世陶磁器片１点と、RI001井戸跡内から15～16世紀のものと思われる擂り鉢片、および近世の木桶片（檜製の側板部分と竹製の留め具部材）が出土した程度である。

（掘立柱建物跡と井戸跡との関連について）

掘立柱建物跡群の東側約７mの位置から、上述のRI001井戸跡が検出されているが、両遺構とも近世のものと推定され、互いに近接していることなどから、関連し合う遺構である可能性が高い。

遺構の分布状況についての考察

旧河道の西側において断続的に分布する陥し穴状遺構群は、約50m北東側に位置する細谷地第５次遺跡でも、同様な遺構の分布状況を示している。一方の第４次調査区を含めた南西側も、遺構密度が薄くなる様子が見られないことから、旧河道と平行する未調査の南西側でも、更に陥し穴状遺構が展開する可能性が考えられる。

また、旧河道をはさんだ東～南東側は遺構の密度が比較的薄く、時期不明の土坑を除いて近世の掘立柱建物跡と井戸跡が検出されたのみである。

水が容易に得られる地である反面、やや強い降雨のあとは泥濘地の状況を呈し、調査には困難を極めることが多かった。この状況は当時も変わることがなかったものと思われ、人々が居住した痕跡を示すものは、近世の建物跡と付随する井戸跡のみである。このことから、本次調査区範囲内に限定すると、縄文時代から近世初頭に至るまで、居住にはやや適さない低湿な土地であったと推測される。

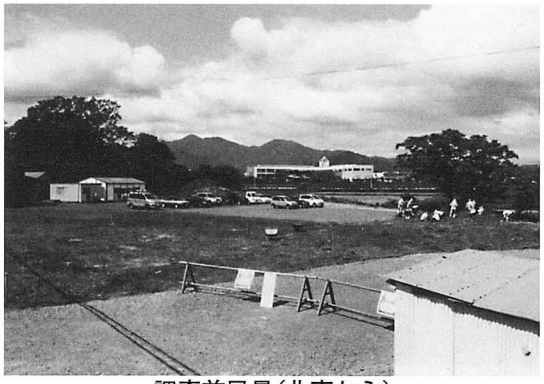
今後、周辺地域の発掘調査が随時進められるものと予想されるが、本年度の第３次・第４次調査区域はもとより、細谷地遺跡を始めとする近隣遺跡での成果も順次照合していくことにより、時代毎における旧地形に沿った遺構分布の特徴が、より明瞭に現れてくるものと考えられる。

＜引用・参考文献＞

田村壮一　1987「陥し穴状遺構の形態と時期について」紀要Ⅶ（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
高橋與右衛門　1989「掘立柱建物跡の間尺とその時代性」紀要Ⅸ（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1994
「矢盛遺跡第１次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第205集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1994
「西田東遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第218集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2001
「石持Ⅰ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第341集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2001
「稲村Ⅱ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第348集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2001
「台太郎遺跡第18次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第369集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2002
「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成13年度）」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第397集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2002
「台太郎遺跡第26次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第416集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2003
「台太郎遺跡第35次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第417集

矢盛遺跡　写真図版

調査前風景（南西から）



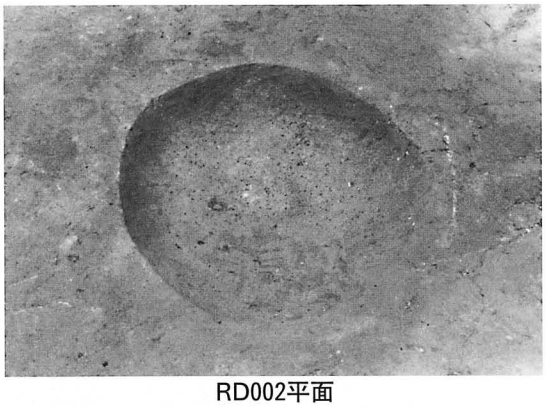
調査前風景（北東から）

草刈り

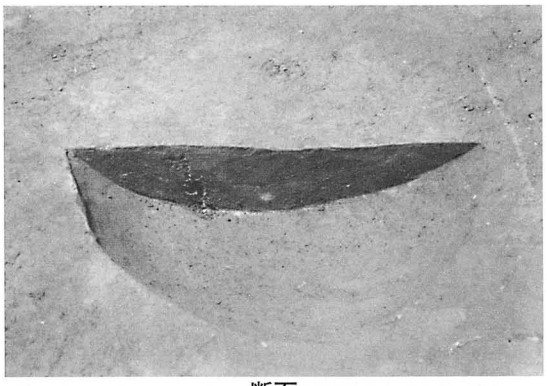
難儀した試掘

基本層序

写真図版１　調査風景・基本層序



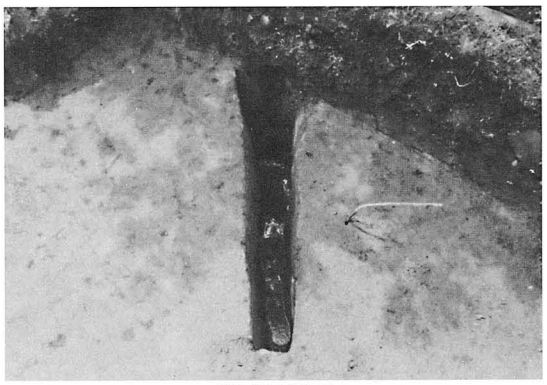
RD002平面



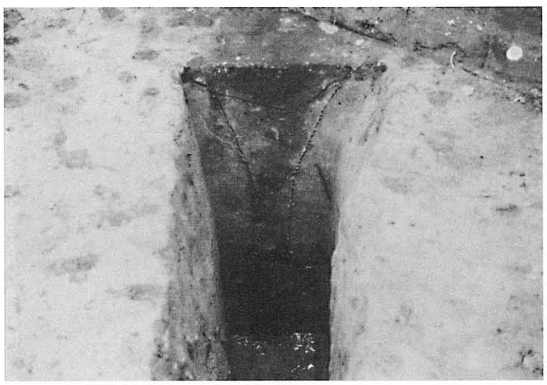
断面

RD004平面

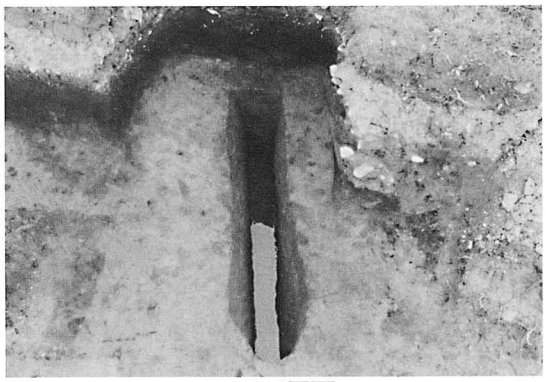
断面



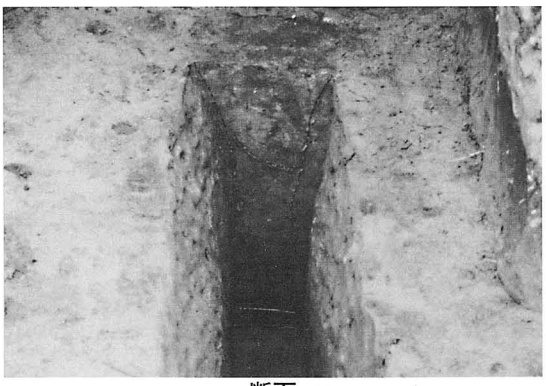
RD011平面



断面

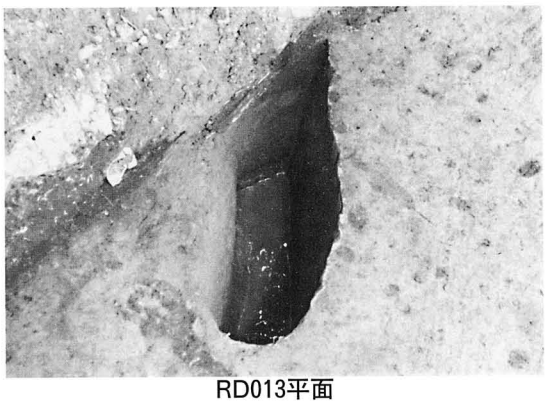


RD012平面

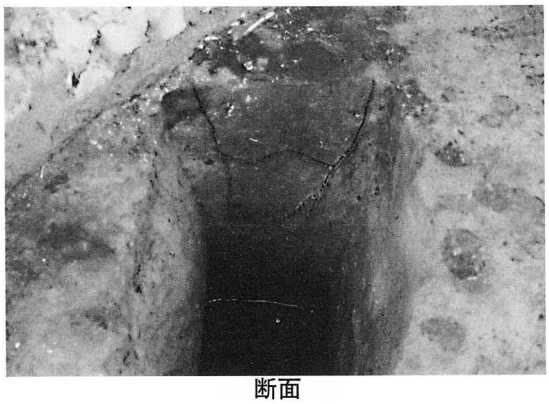


断面

写真図版２　土坑・陥し穴状遺構



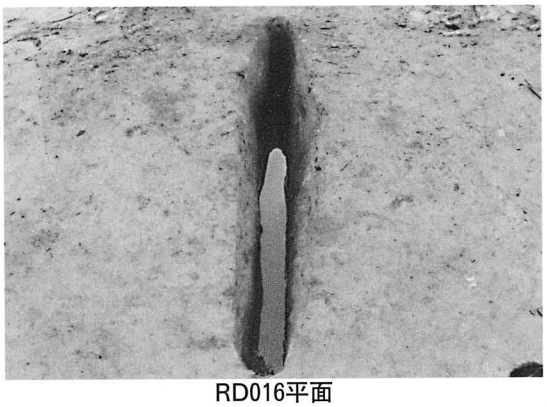
RD013平面



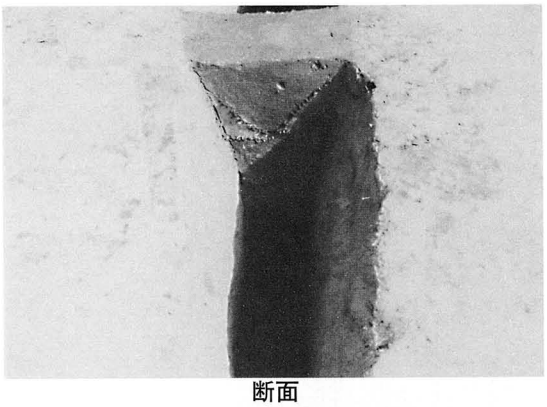
断面

RD014(左)・015(右)平面

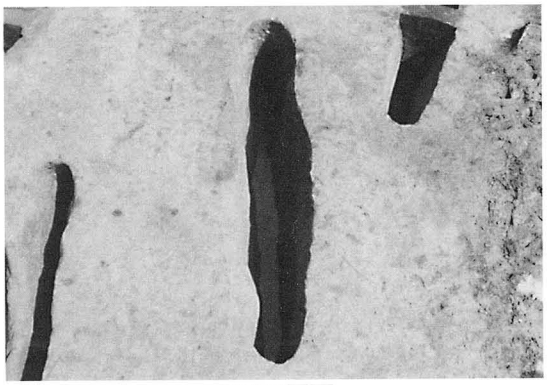
RD014(左)・015(右)断面



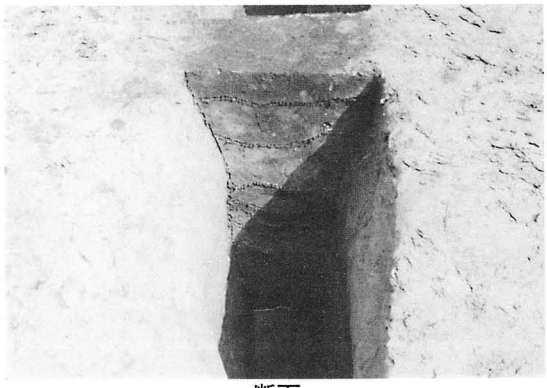
RD016平面



断面

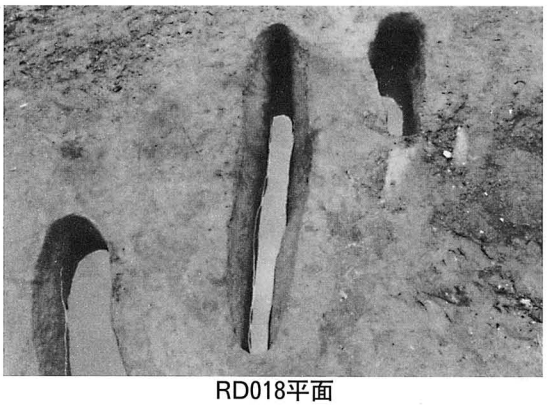


RD017平面



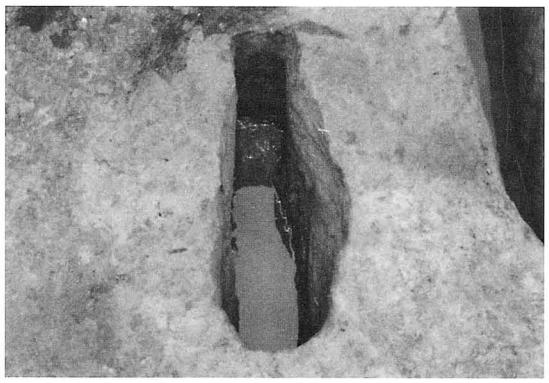
断面

写真図版 3　陥し穴状遺構



RD018平面

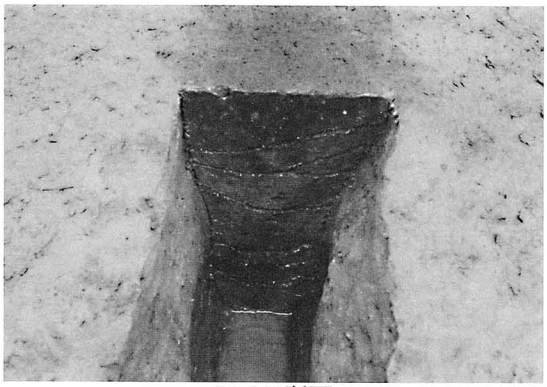
断面



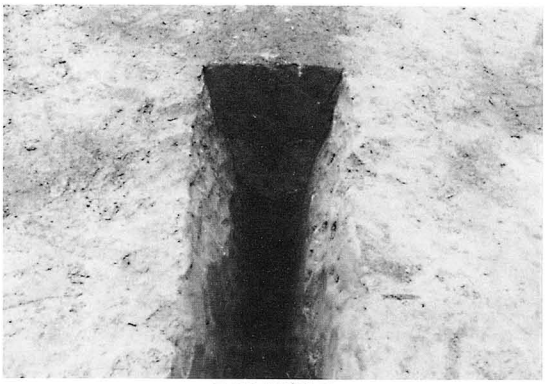
RD019平面

断面

RD020(上)・021(下)平面

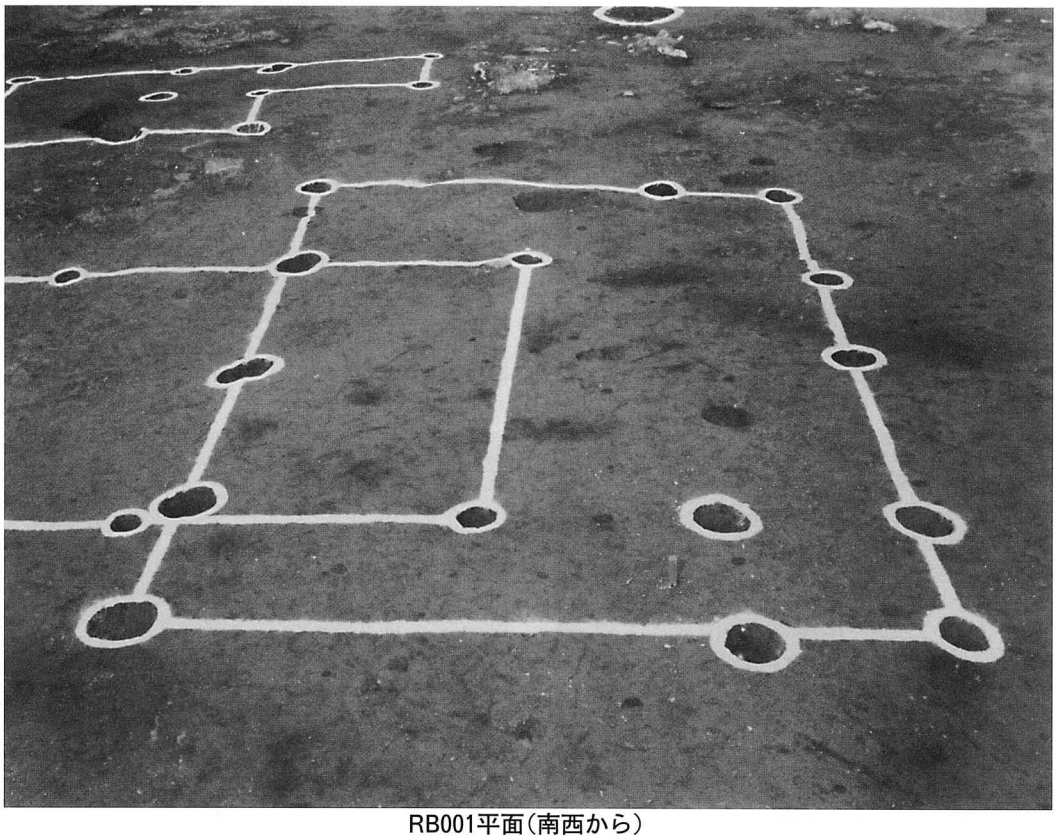


RD020断面

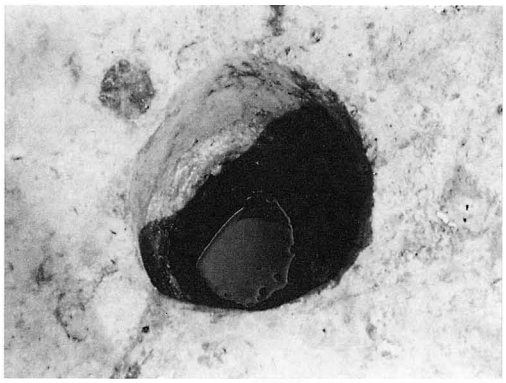


RD021断面

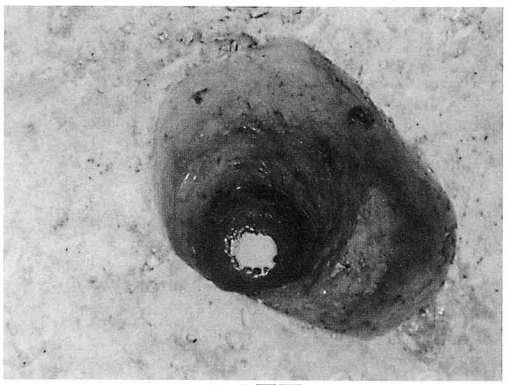
写真図版 4　陥し穴状遺構



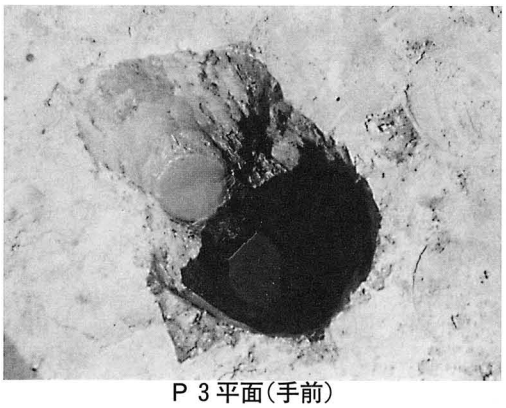
RB001平面（南西から）



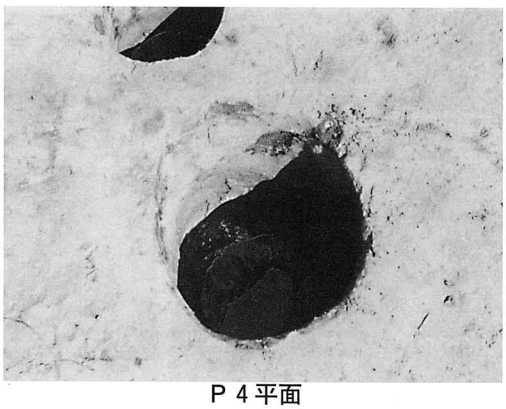
Ｐ１平面



Ｐ２平面

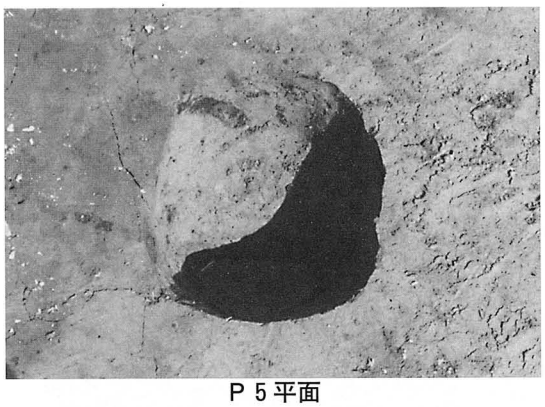


Ｐ３平面（手前）



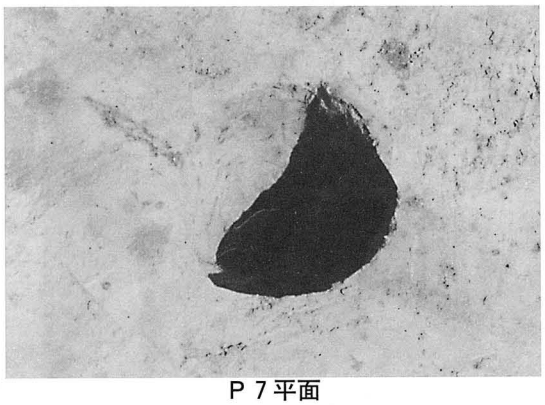
Ｐ４平面

写真図版５　掘立柱建物跡（RB001－①）

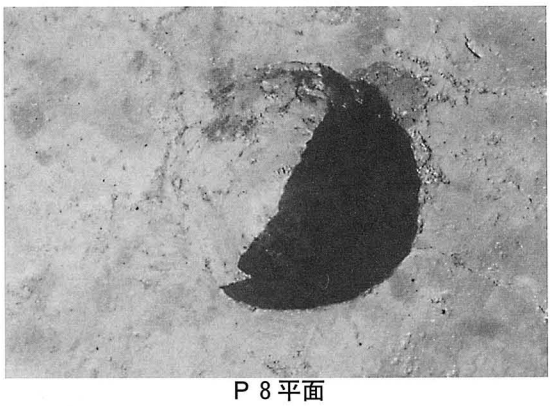


P 5 平面

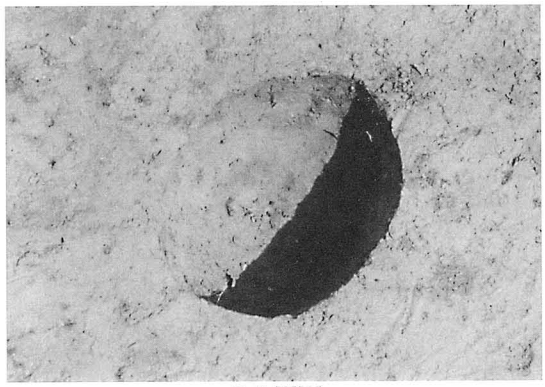
P 6 平面



P 7 平面

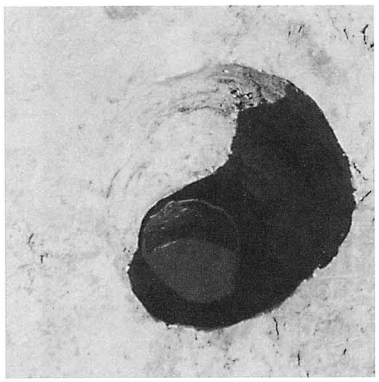


P 8 平面

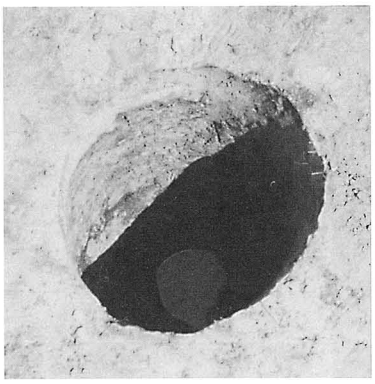


P 9 平面

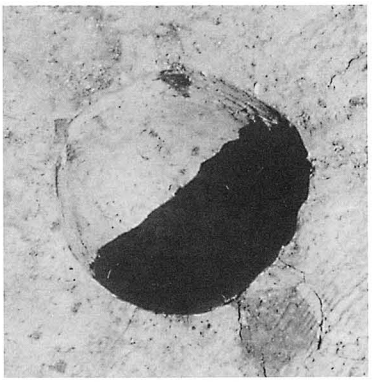
P10平面



P11平面

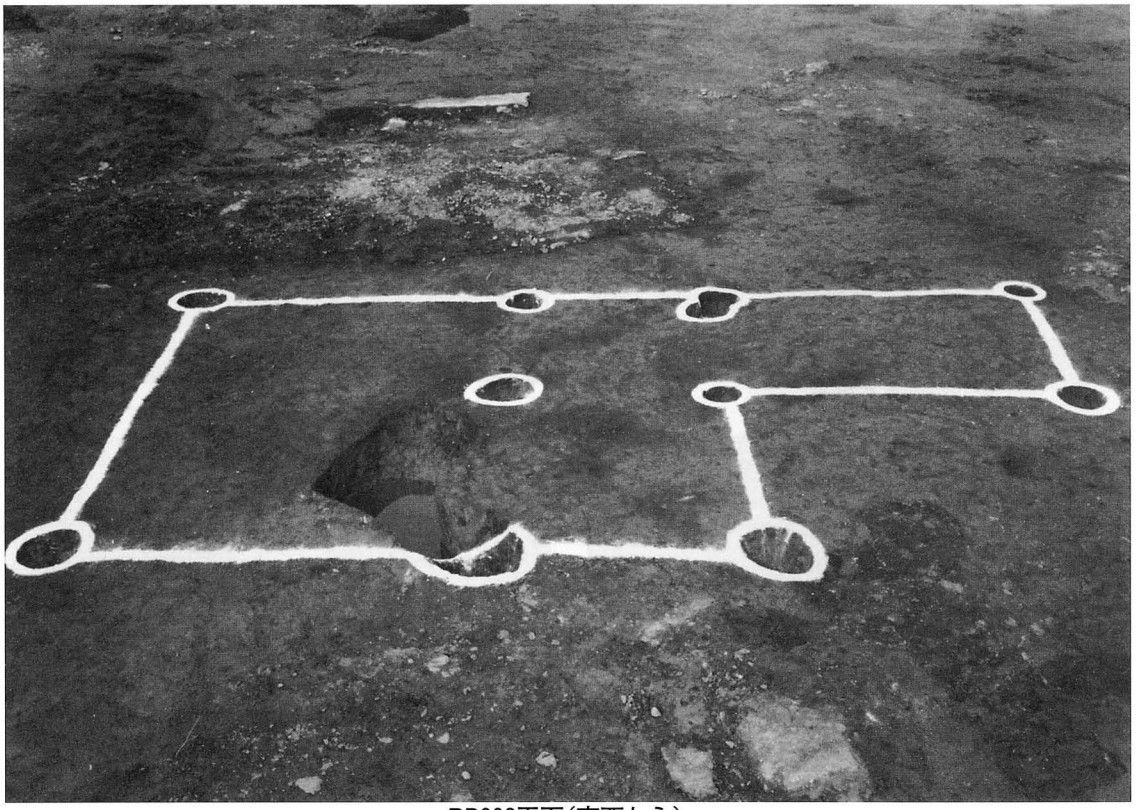


P12平面

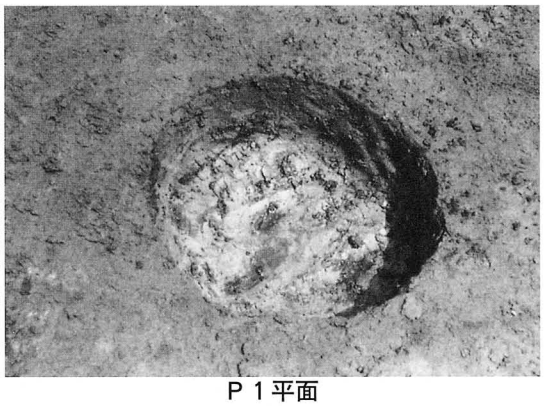


P13平面

写真図版 6　掘立柱建物跡（RB001－②）



RB002平面（南西から）



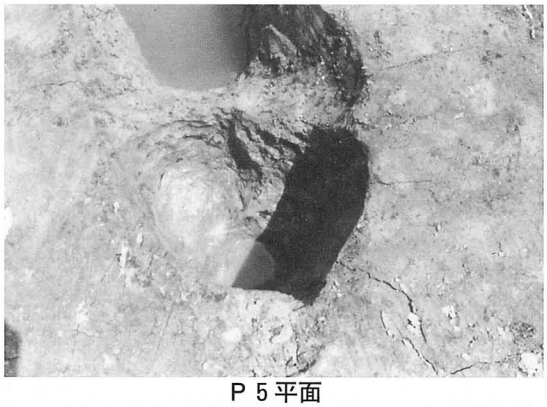
Ｐ１平面

Ｐ２平面

Ｐ３平面

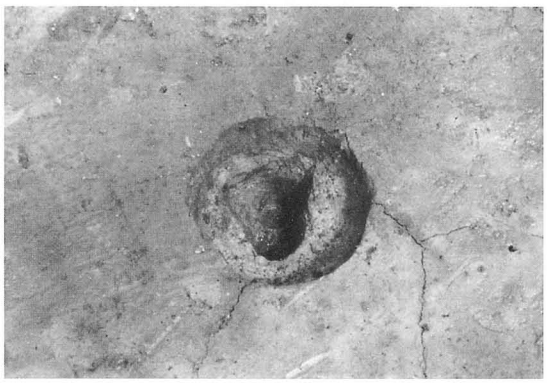
Ｐ４平面

写真図版７　掘立柱建物跡（RB002－①）



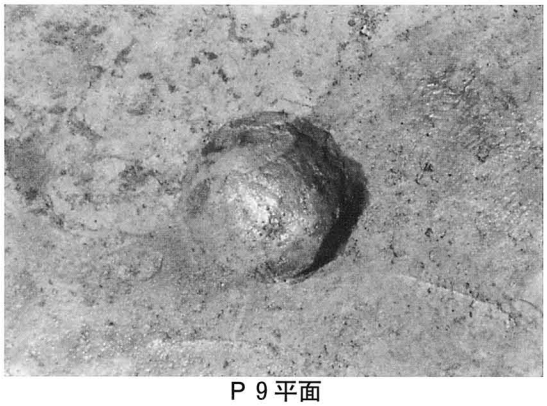
P 5 平面

P 6 平面(右)

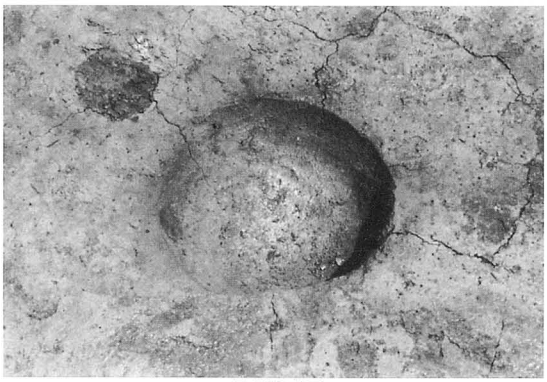


P 7 平面

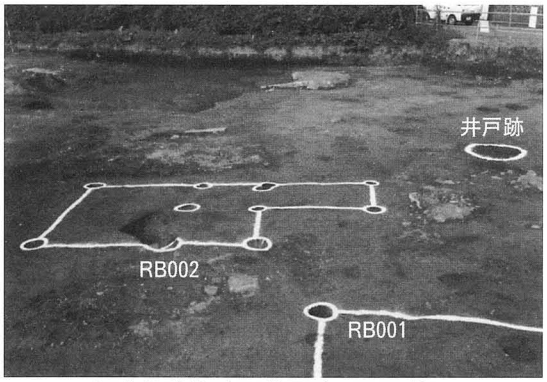
P 8 平面



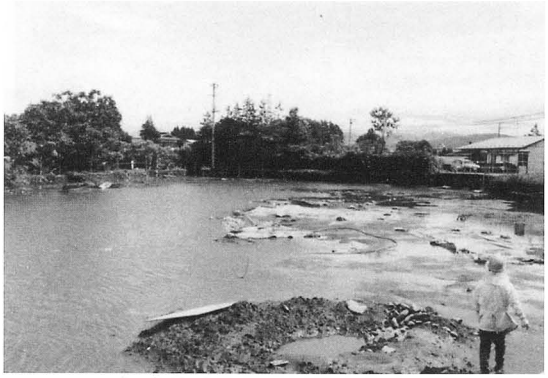
P 9 平面



P10平面

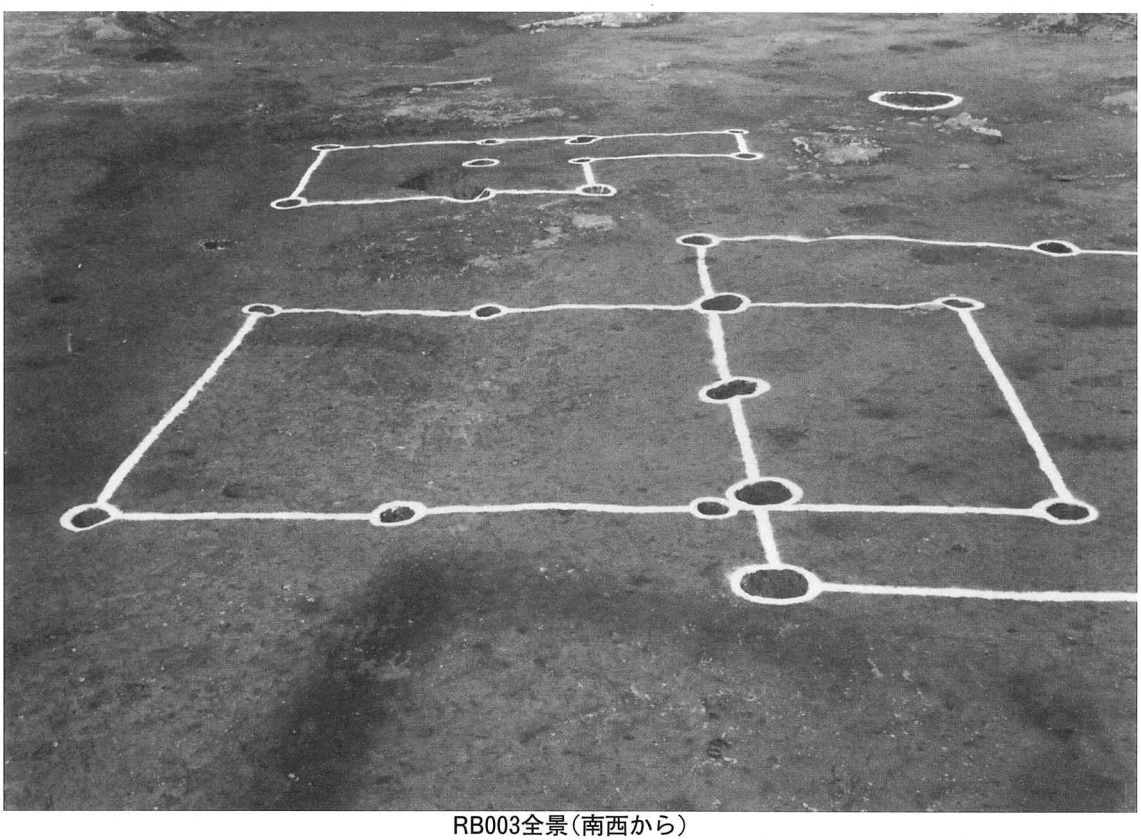


掘立柱建物跡と井戸跡の配置状況



掘立柱建物跡付近の水害状況

写真図版 8　掘立柱建物跡（RB002－②）

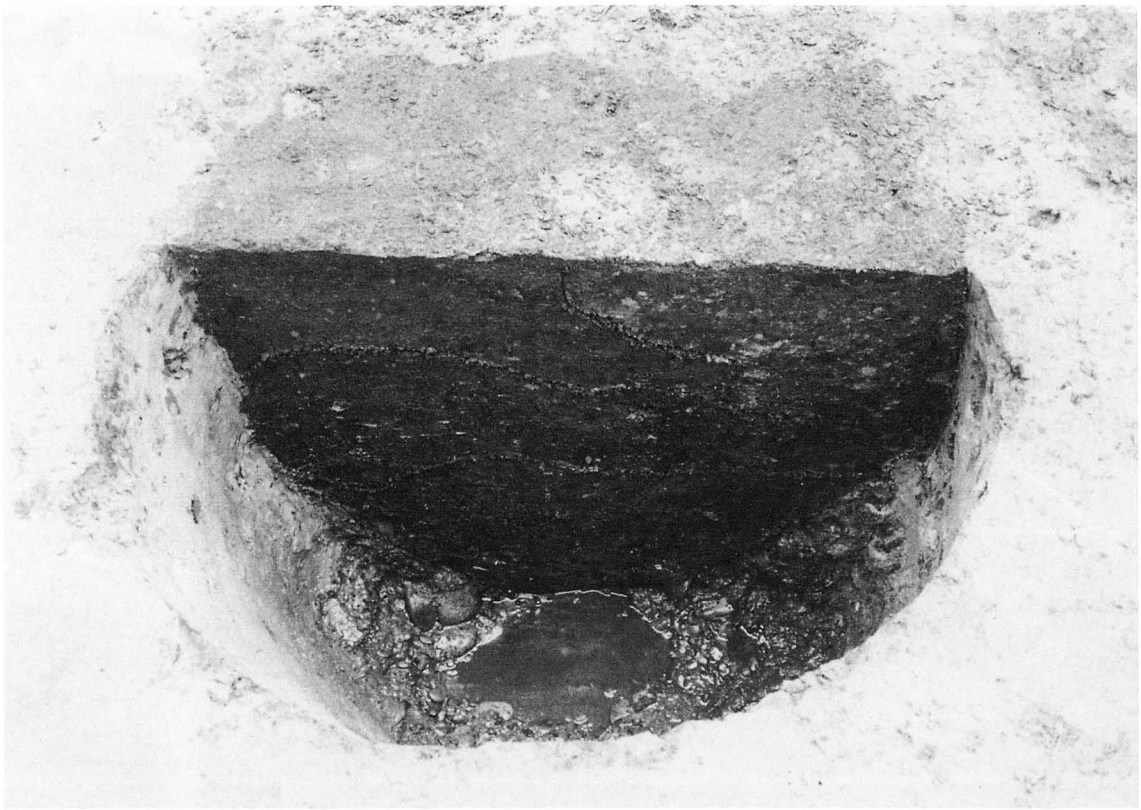


RB003全景（南西から）

RB001～003掘立柱建物跡群全景

写真図版 9　掘立柱建物跡（RB003）及び建物跡群全景

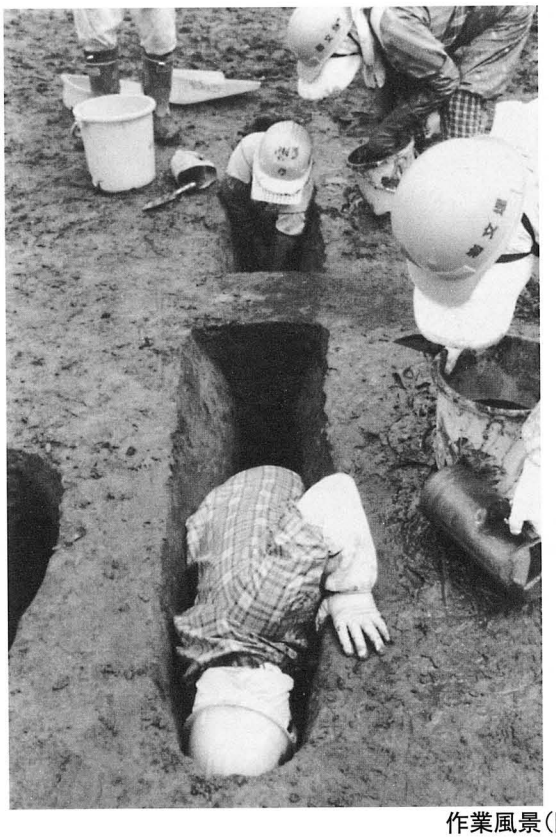
完　掘



断　面

写真図版10　井戸跡（RI001）

旧河道断面



作業風景（井戸跡）

作業風景（陥し穴状遺構）

写真図版11　旧河道・作業風景

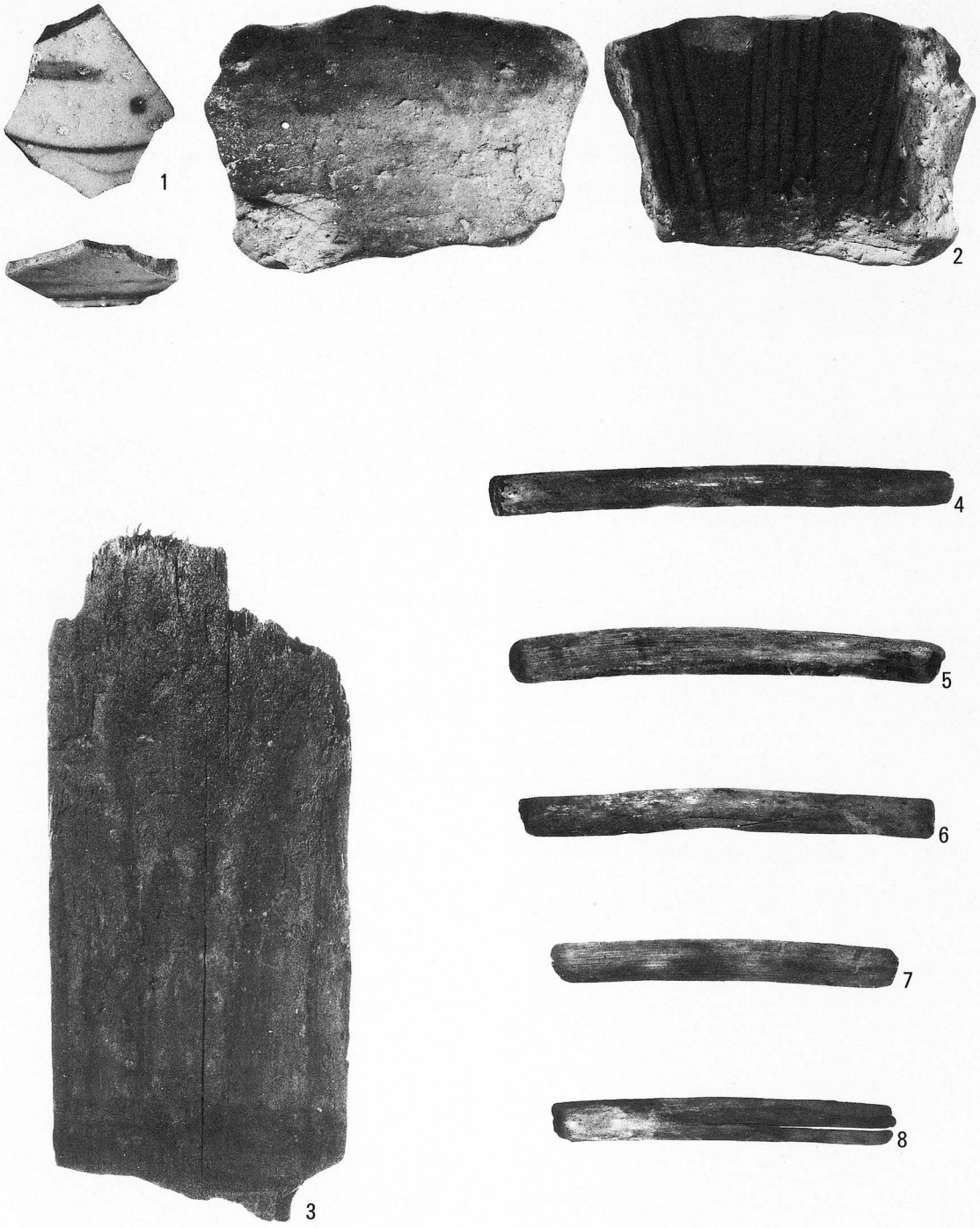
台風６号による水害

被害状況

懸命な復旧作業

完掘全景（南西から）

写真図版12　台風水害・完掘全景



S=1:1.5

写真図版13　出土遺物

熊堂（くまどう）Ｂ遺跡（第14次調査）

Ⅳ　検出された遺構と出土遺物

1．概　要

第14次調査で検出された遺構は、竪穴住居跡が６棟、竪穴状遺構が１棟、土坑が10基、溝が５条である。また、他に北区西側で旧河道が検出されている。なお、北区東では遺構は検出されていない。

出土した遺物は土器と鉄製品である。土器は、奈良・平安時代の土師器が中心で、他に少量の須恵器がある。器種には、坏・高台付坏・甕・大甕が見られる。鉄製品は刀子・釘がある。

2．竪穴住居跡

竪穴住居跡は、北区西と中央区で各１棟、南区で４棟が検出されている。いずれも奈良・平安時代に属するものである。

RA62竪穴住居跡

遺　構（第18・19図、写真図版18・19）

〔位置・重複〕南区東部の６Ｐ10ｈグリッドに位置し、RD106と重複している。覆土の状況から、RA62がRD106に切られていることが見てとれ、RA62が古く、RD106が新しい。

〔平面形・規模〕平面形は、やや隅丸で、ほぼ正方形を呈する。規模は、北西－南東が4.9m、北東－南西が4.3mである。

〔覆土〕レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。黒色土・黒褐色土が主体で、５つの層に細分される。覆土の主体である１・２層には多量の小石が含まれている。

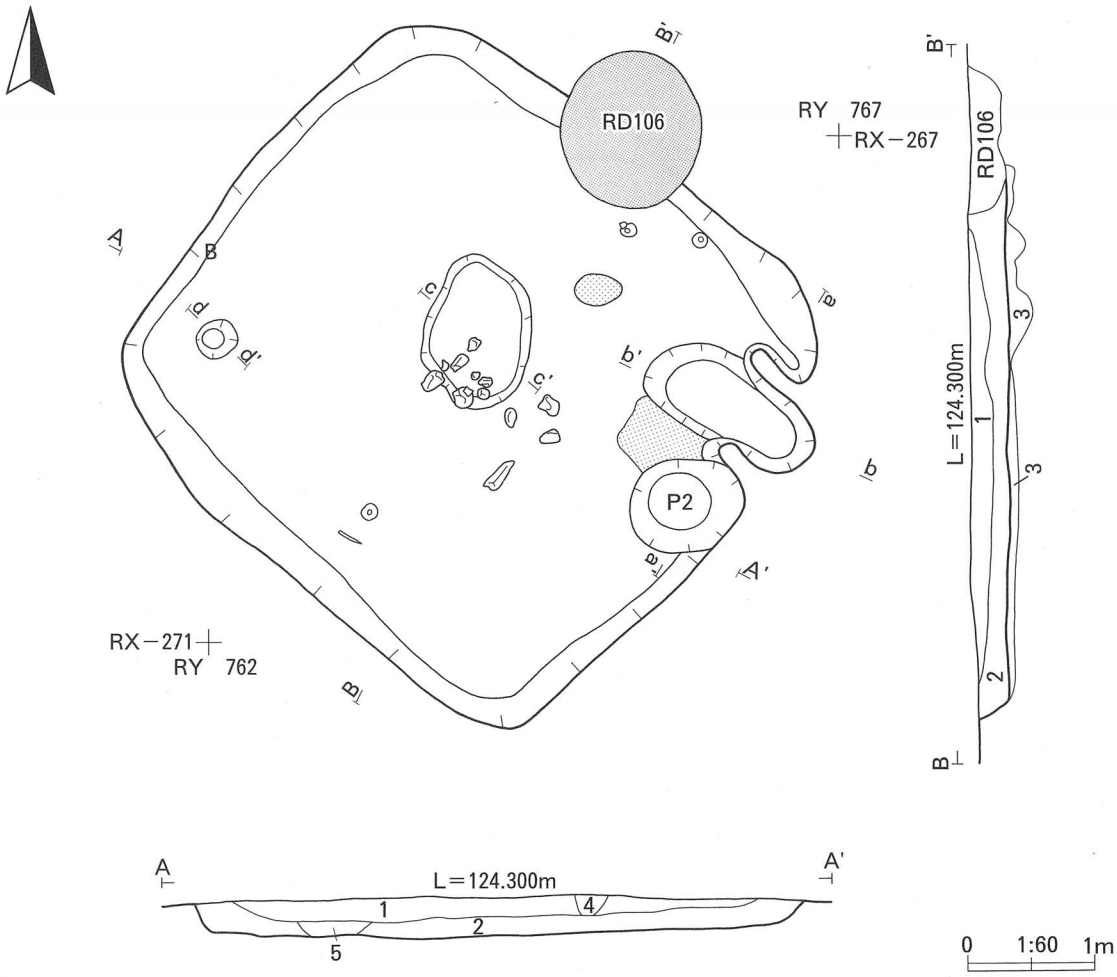
〔壁・床面〕壁は床面から外傾しながら立ち上がり、残存高は20cm前後である。床は、黒褐色土によって貼床が施されているが、それほど固く締められているわけではない。

〔柱穴・ピット〕３基が検出された。Ｐ１は、平面形が1.2×0.9mの楕円形を呈し、深さは約10cmである。底部の中央より南側で長さ５～15cmの石がいくつか検出されている。Ｐ２は直径が90cmの円形を呈し、深さは約10cmである。カマドの右側に接しているという位置からすれば貯蔵穴であろう。Ｐ３は西隅で検出された。位置的には柱穴の可能性もあるが、深さが10cmと浅いことと、対応する柱穴は確認されていない。

〔カマド〕南東壁の東隅に構築されている。天井部は完全に崩壊している。袖は、右袖の一部が残存しているものの、左袖の残りはあまりよくない。燃焼部の規模は0.4×0.6mで、一番深いところで床面より約10cm掘りこまれている。焼土は、燃焼部では検出されず、右袖の西側、掘り込みとＰ２の間で確認された。この焼土は、現地性でないことから、カマド燃焼部からかき出されたものと考えられる。煙道は掘り込み式で、燃焼部から煙出しまでの距離は約20cmとかなり短い。

遺　物（第20・21図、写真図版32・33）

〔出土状況〕床面および覆土から5.7kgの土器が出土している。そのうち20点を図化した。また、床面から１点、覆土上層から１点、計２点の鉄製品が出土している。遺物のほとんどは覆土から出土したもので、床面からの出土はそれほど多くない。



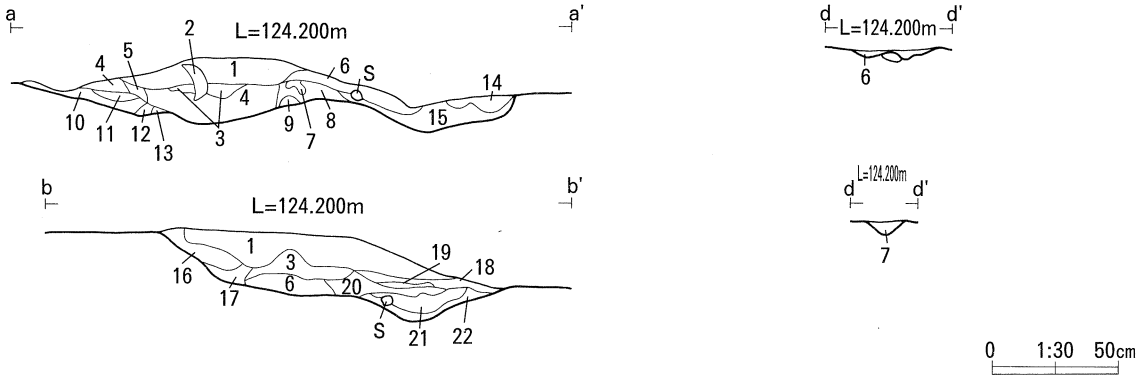
RA62

番号	色調	しまり	粘性	備考
1	10YR1.7/1黒色	やや密	やや弱	小石混入
2	10YR2/1黒色	やや密	やや弱	小石混入
3	10YR2/1黒色	やや密	弱	
4	10YR2/3黒褐色	やや密	やや弱	
5	10YR2/2黒褐色	やや密	やや弱	

RA62カマド

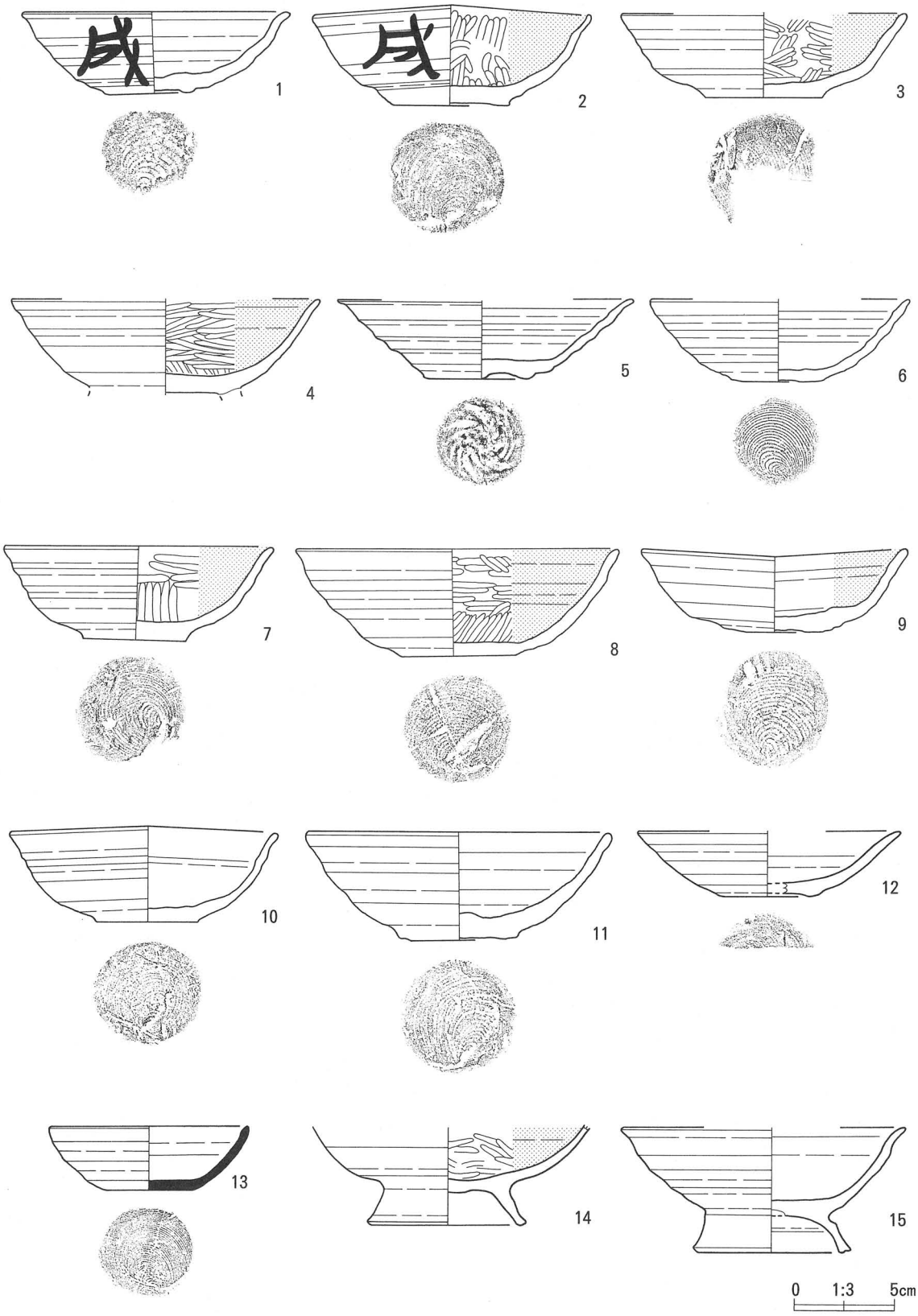
番号	色調	しまり	粘性	番号	色調	しまり	粘性
1	10YR2/2黒褐色	やや疎	弱	12	10YR4/4褐色	やや疎	やや弱
2	10YR4/2灰黄褐色	疎	やや弱	13	10YR4/3暗褐色	やや疎	やや弱
3	2.5YR5/8明赤褐色	やや疎	弱	14	10YR3/2黒褐色	やや疎	やや弱
4	10YR4/3にぶい黄褐色	やや疎	弱	15	10YR2/3黒褐色	やや疎	やや弱
5	10YR3/1黒褐色	やや疎	やや弱	16	10YR4/4褐色土	疎	弱
6	10YR2/3黒褐色	やや疎	やや弱	17	10YR2/3黒褐色	疎	弱
7	10YR3/3暗褐色	疎	やや弱	18	10YR2/1黒色	やや密	弱
8	10YR5/6黄褐色	密	やや弱	19	10YR4/6褐色	やや密	やや弱
9	10YR3/1黒褐色	やや疎	やや弱	20	10YR3/1黒褐色	疎	弱
10	10YR5/6黄褐色	やや疎	やや弱	21	10YR3/4暗褐色	密	弱
11	10YR3/4暗褐色	やや疎	やや弱	22	10YR3/3暗褐色	疎	弱

第18図　RA62（1）

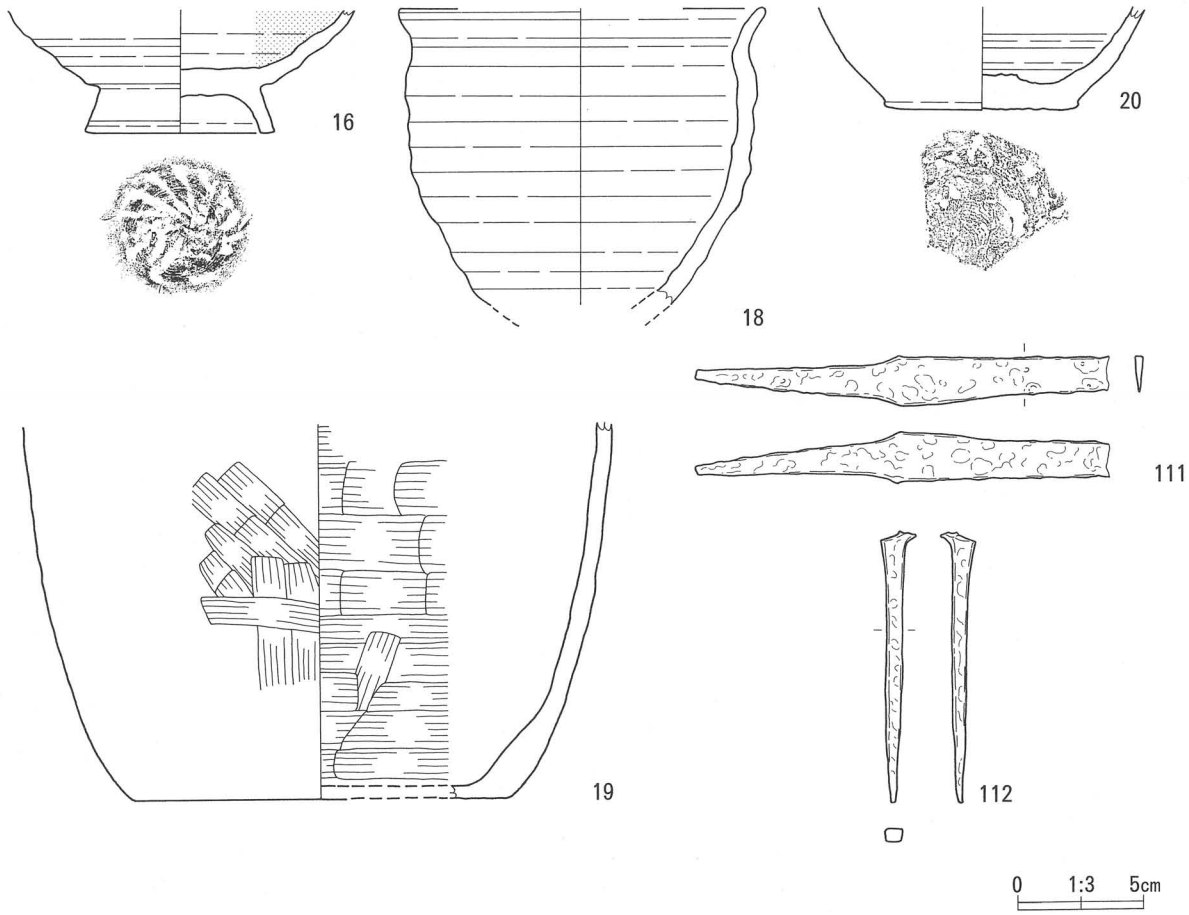


第19図　RA62（2）

〔土器〕1～3・6～12は土師器坏である。1・2は覆土下層から出土したもので、ともに胎土に1mm程の石英粒と金雲母が含まれている。1はロクロを用いて調整されているが、かなりゆがんだ形になっている。2は内面に黒色処理が施されている。また、両者とも体部外面に正位にて「成」と記されている。筆跡はともに同じである。5・6も覆土下層から出土したもの。5は口縁がやや外反し、体部には稜線が明瞭に認められる。6は底径が4.2cmと他の坏よりも小さく、また器高も4.2cmと低いが、口径は13.1cmと他のものとほとんど差がなく、口が大きく開いている点が特徴である。7はP2の覆土上層から出土したもの。内面には黒色処理が施されているが、一部剥落している。8・9・10は覆土下層から出土したもの。9は、胎土に1mm程の石英粒と金雲母が含まれていることと、色調が近い点で1と酷似する。10は、体部中央から口縁部にかけて3条の凹部が見られ、口縁は凹部の上からやや外反している。内・外両面ともに全体的に煤と推測される汚れが付着している。また、外面の一部が剥落しているが、剥落面には前述の汚れが付着している。11の胎土は密で、手に取った感触も重量感に富む。また、色調は明褐色とやや明るめである。外面には全体にわたって黒い煤状のものが付着しており、内面にも口縁部に限って見られる。13は、須恵器坏である。口径10.1cm、底径4.4cm、器高3.3cmと小ぶりである。底部内面に火だすきが見られる。4・5・14～16は、土師器高台付坏である。高台はいずれも後からの貼り付けである。4の高台は失われている。1mm程の石英粒を含むものの、胎土は密で、焼成も良好である。内面はヘラミガキによる調整がほぼ全面に認められるが、現状では赤色を呈している。これは、口唇部に黒色の部分が見られること、ヘラミガキによる器面調整が念入りに行われていることから、もとは黒色処理が施されたものが褪色したものないしは黒色処理に失敗したものと考えられる。16の底部内面には剥落している部分が多いが黒色処理の痕跡が、外面には放射状痕跡が、それぞれ確認される。18～20は土師器甕である。20以外はカマド燃焼部およびその付近から出土した破片が接合したものである。18は、底部と一部の体部・口縁部が欠損している長胴甕である。頸部に段は見られず、直立気味に短く立ち上がっている。残存部の器面調整は、内面がロクロナデ、外面は体部の上半と口縁部のみがロクロナデを施されている。胎土の色調は明るく、明赤褐色を呈している。



第20図　RA62 出土遺物（1）



第21図　RA62 出土遺物（２）

〔鉄製品〕111は刀子である。刀部の先端が欠損しており、現存長16.3cmである。うち、7.8cmが柄部となる。最大幅は2.0cm、厚さは、棟部が0.3～0.5cm、刃部が0.1cm以下である。柄部には柄木と推定される木質は観察されず、柄木を固定するための目釘や金具も見られない。保存処理後の重量は27.5ｇである。112は釘である。ほぼ完存しており、長さは10.8cm、身の最大幅は1.2cmである。頭頂部は、先端を短く直角に折り曲げて作り出されているもので、いわゆる折釘と呼ばれるものである。身の下半はやや反っており、使用されたものと推測される。保存処理後の重量は16.2ｇ。

時　期　床面から出土した遺物から、平安時代９世紀後半～10世紀前半に位置づけられる。

ＲＡ63 竪穴住居跡

遺　構（第22・23図、写真図版20）

〔位置・重複〕南区東部の６Ｐ14ｉグリッドに位置する。他の遺構との重複はないが、西隅が攪乱を受けている。

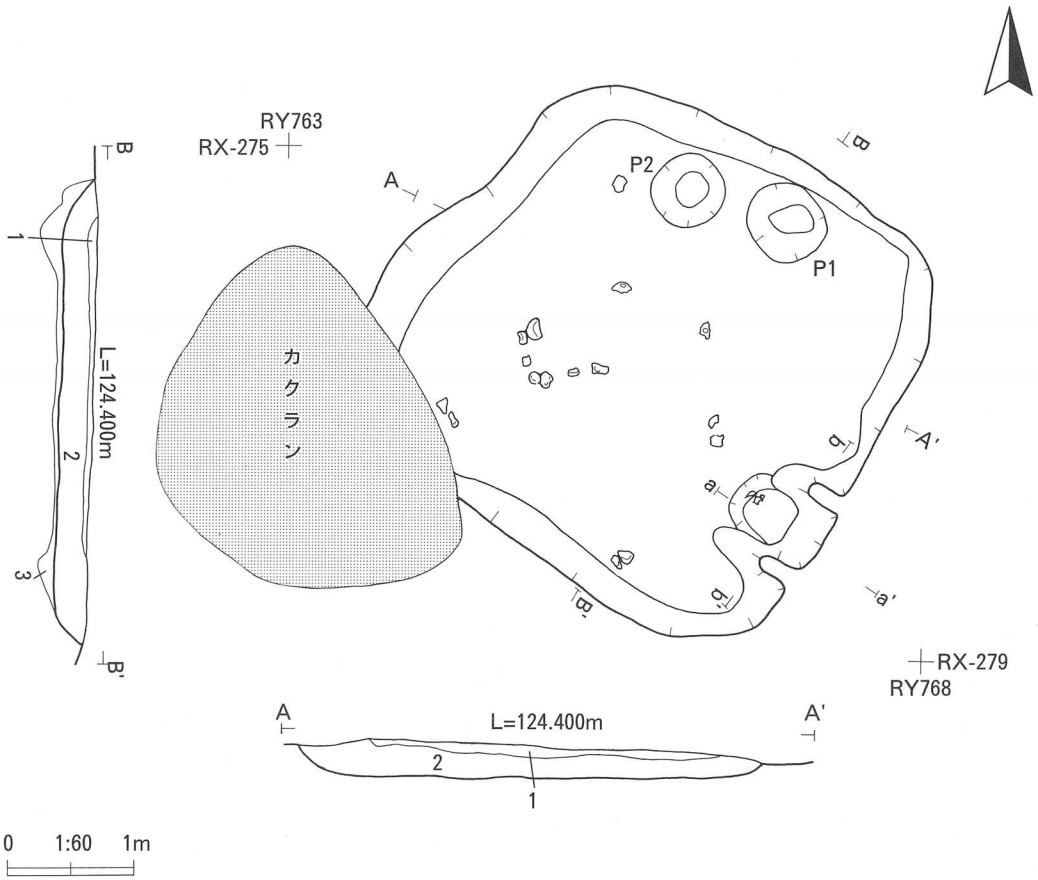
〔平面形・規模〕隅丸で、北西壁の南側がやや張り出し気味なのを除けば、ほぼ正方形を呈する。規模は北西－南東・北東－南西ともに4.0ｍである。

〔覆土〕レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。ただ、覆土の約80％は２層の黒褐色土で、短時間に埋没した状況も想定でき、人為的に埋め戻された可能性も残されている。この２層には小礫が多数混入している。

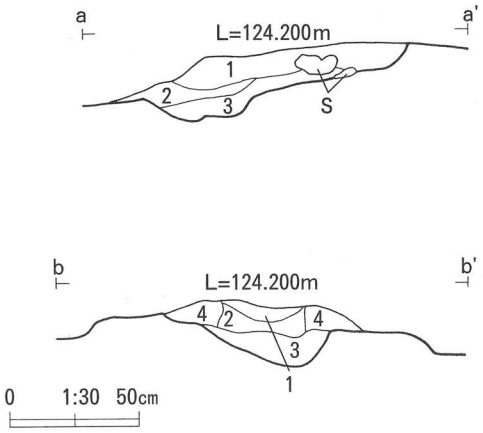
〔壁・床面〕壁は床面から緩やかに外傾しながら立ち上がり、残存高は30cm前後である。床は、黒色土によって貼床が施されている。

〔柱穴・ピット〕貼床を除去した後、北東の壁際で２基検出された。平面形はＰ１・Ｐ２ともに円形である。規模はＰ１が直径65cm、Ｐ２が直径60cmで、深さはともに約10cmである。柱穴と判断できるようなピットは検出されなかった。

〔カマド〕南東壁の中央よりやや南に構築されている。天井部は完全に崩壊している。袖は暗褐色土をつき固めて構築したものと考えられるが、芯材と考えられる礫や甕は出土していない。燃焼部の規模は0.4×0.5mであるが、焼土は検出されなかった。煙道は掘り込み式であるが、煙出しはほとんど壁際に位置しており、燃焼部からの距離はかなり短い。



第22図　RA63（１）



RA63

番号	色調	しまり	粘性	
1	10YR2/1黒色	やや疎	弱	
2	10YR2/2黒褐色	やや密	やや弱	小石を多く含む
3	10YR1.7/1黒色	やや密	弱	

RA63カマド

番号	色調	しまり	粘性
1	10YR1.7/1黒色	疎	やや弱
2	10YR2/1黒色	やや密	やや弱
3	10YR2/3黒褐色	疎	やや弱
4	10YR3/4暗褐色	やや密	弱

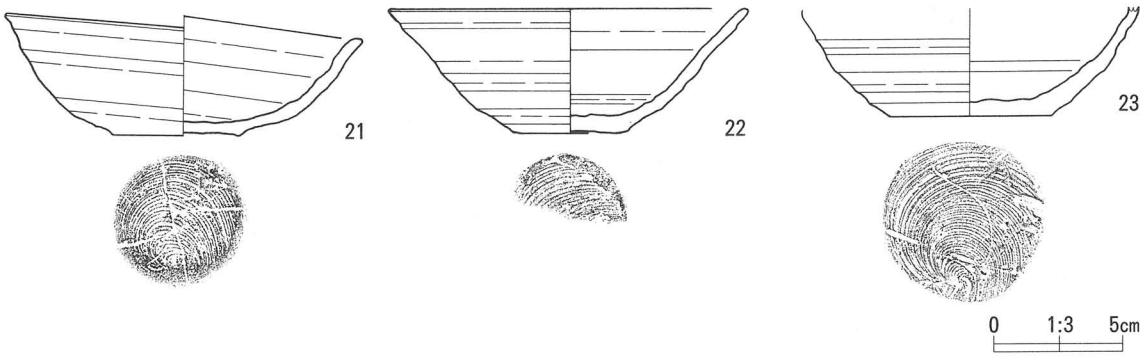
第23図　RA63（1）

遺　物（第24・25図、写真図版33）

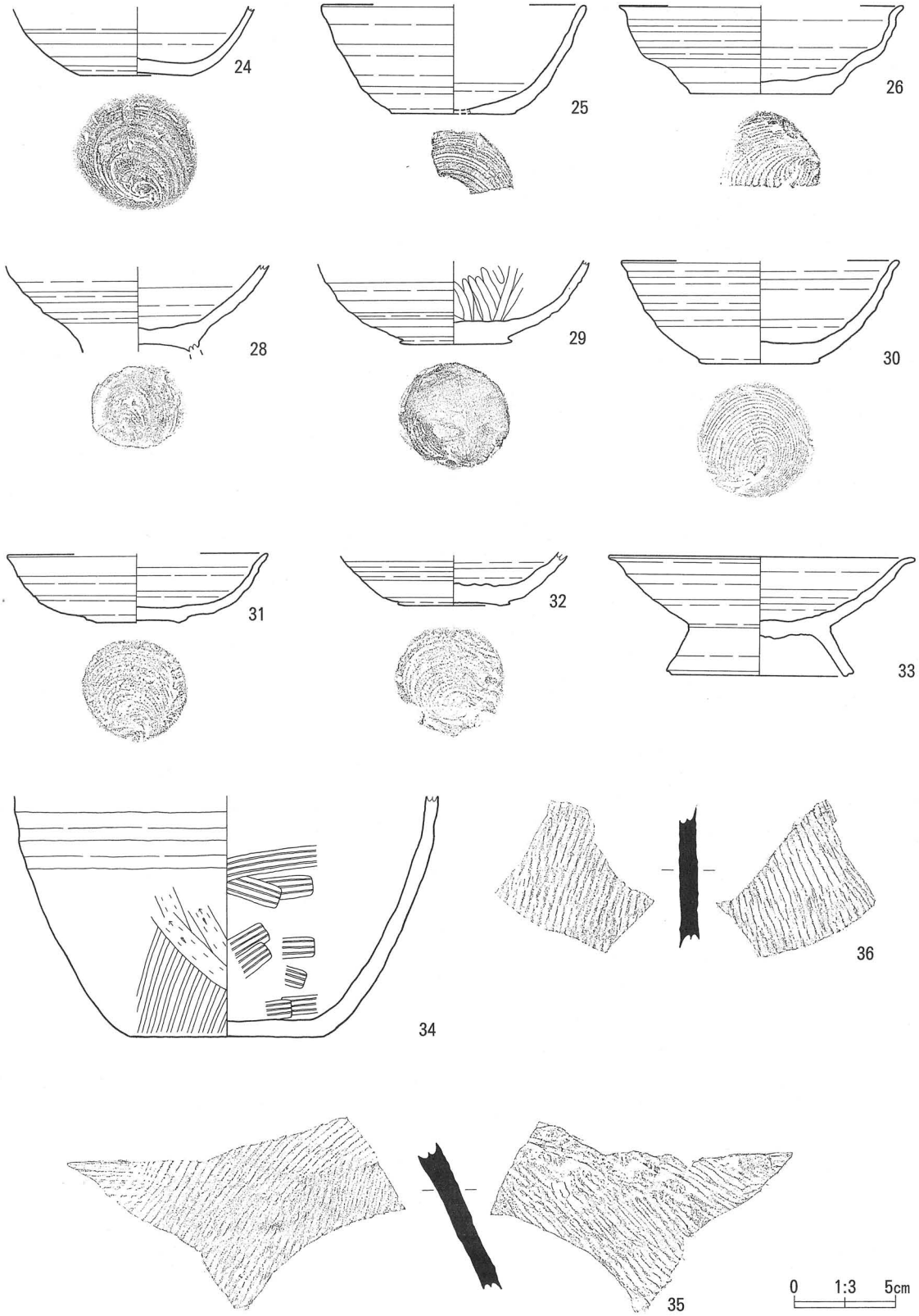
〔出土状況〕15.1kgの土器が出土しており、そのうち16点を図化した。床面から出土した破片と覆土上層から出土した破片が接合した32と覆土下層から出土した36以外はすべて覆土上層からのものである。

〔土器〕21～26・29～32は土師器坏である。23は、精製された胎土が使用され、焼成も良好なものである。26は、外反した後内湾しつつ立ち上がり、口縁はつまみ出されるような形できつく外反している。体部には明瞭な稜線が認められる。焼成は良好で、硬くしまって焼き上げられている。胎土は、明赤褐色と明るい色調である。29も23と同様に、精製された胎土が使用され、焼成も良好なものである。内面は全面にわたってヘラミガキによる器面調整が行われ、底部外面は回転糸切りによって切り離された後、再調整されている。30の胎土は密で、硬くしまって焼き上げられている。底部・体部の外面に煤と考えられる黒色の付着物が見られる。28・33は土師器高台付坏である。高台はともに後から貼り付けられたものである。28の高台はほとんどが失われているが、高台が貼り付けられた部分には摩滅の跡が確認でき、高台がはずれた（もしくははがされた）後も利用されていたと考えられる。外面には稜線がはっきりと表現されており、一部煤と考えられる黒色の付着物が見られる。この付着物は一部の破片では観察されないこと、割れ口にも観察できることから破損した後に付着したものである。33の高台は全周の６分の１が残存し、形状はハの字状を呈している。

時　期　床面から出土した遺物から、平安時代10世紀前半ごろに位置づけられる。



第24図　RA63 出土遺物（1）



第25図　RA63 出土遺物（2）

RA64 竪穴住居跡

遺　構（第26・27図、写真図版21）

〔位置・重複〕北区中央の４O25ｙグリッドに位置する。遺構面検出の際、誤って重機で遺構の一部を削平してしまったため、北半は失われている。Ｐ１は、RA64の覆土を切っているので、RA64が埋没した後、掘りこまれたもので、RA64が古く、Ｐ１が新しい。

〔平面形・規模〕上述の事情で削平されているため、平面形・規模は不明である。ただ、残存部分から、平面形はやや隅丸の方形、規模は北西－南東が５m、北東－南西が5.5mと推測される。

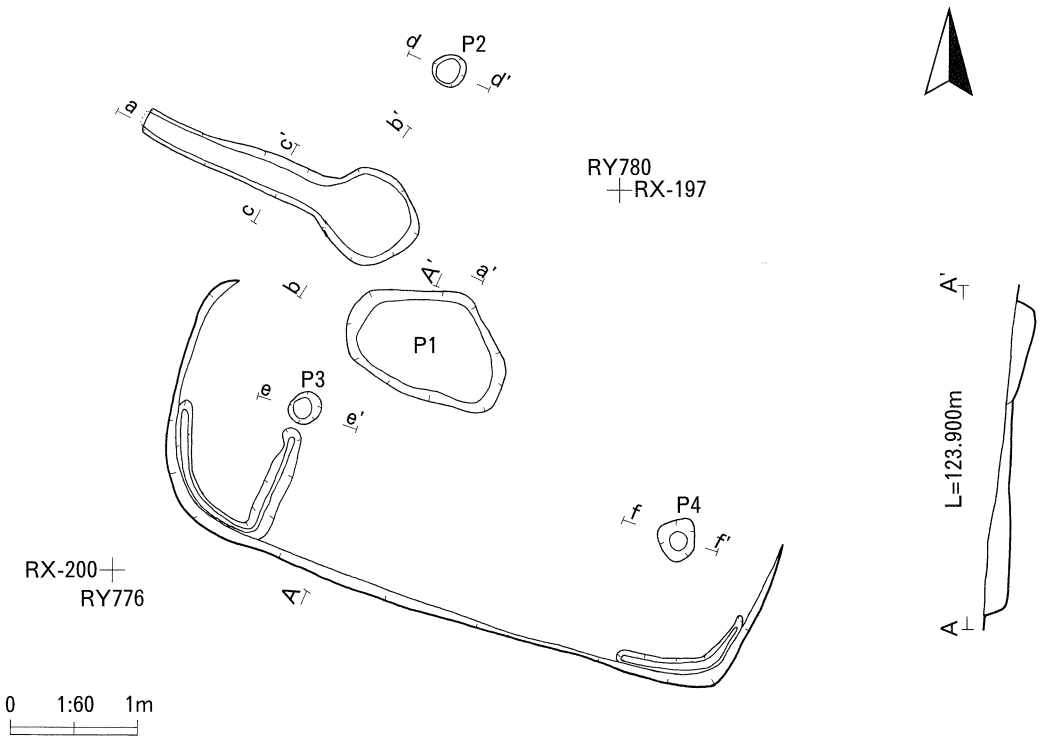
〔覆土〕削平されているため、自然堆積か、人為的堆積かは不明である。

〔壁・床面〕壁は床面から外傾しながら立ち上がり、残存高は約25cmである。貼床は確認されなかった。床面には全体的に礫が多く見られる。

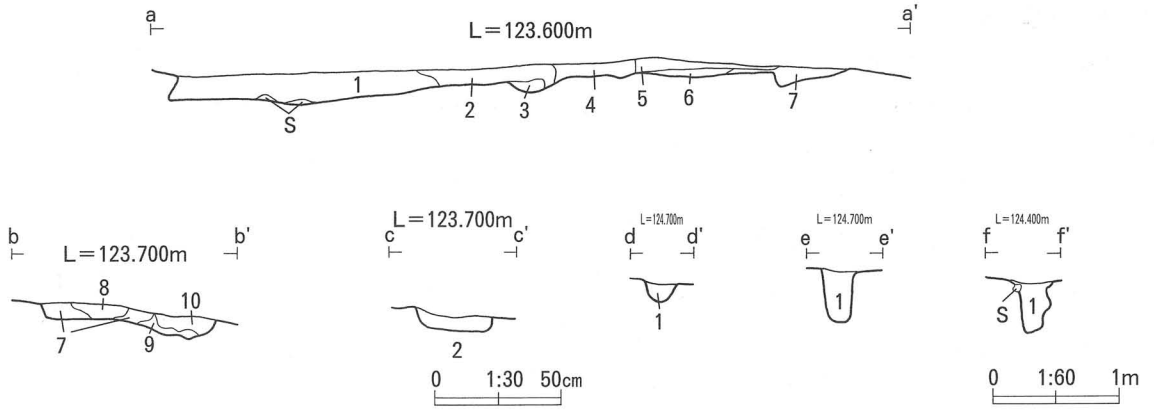
〔柱穴・ピット〕４基検出した。Ｐ１は、平面形が1.4×0.9mの楕円形を呈し、深さは約15cmである。前述のようにRA64に伴うものではない。Ｐ２～Ｐ４は、それぞれ直径が約20cmの円形を呈している。深さは、Ｐ２が約20cm、Ｐ３・Ｐ４がともに約40cmである。ただ、底面の標高は順に123.0m、123.2m、123.1mとほぼ同じであることから、同時に存在していたと推測される。このことと、Ｐ３・Ｐ４がそれぞれ西隅と東隅に位置していることから、Ｐ２～Ｐ４はRA64の柱穴と考えられる。

〔その他の施設〕東隅と西隅の壁際に溝が巡っている。幅は10～20cm、深さは５～10cmである。東隅のものは、壁からＰ３に向かって延びているが、その部分は間仕切りにともなう溝と考えられる。

〔カマド〕削平のため天井部及び袖の残存状況は悪いが、焼土が約３cmの厚さで堆積しており、その部分をカマドと判断した。北西壁のほぼ中央と推定される位置に構築されている。煙道は燃焼部から煙出しまではほぼ水平で、規模は0.3×1.5mである。掘り込み式か刳り貫き式かは不明だが、後者の可能性が高い。



第26図　RA64



RA64

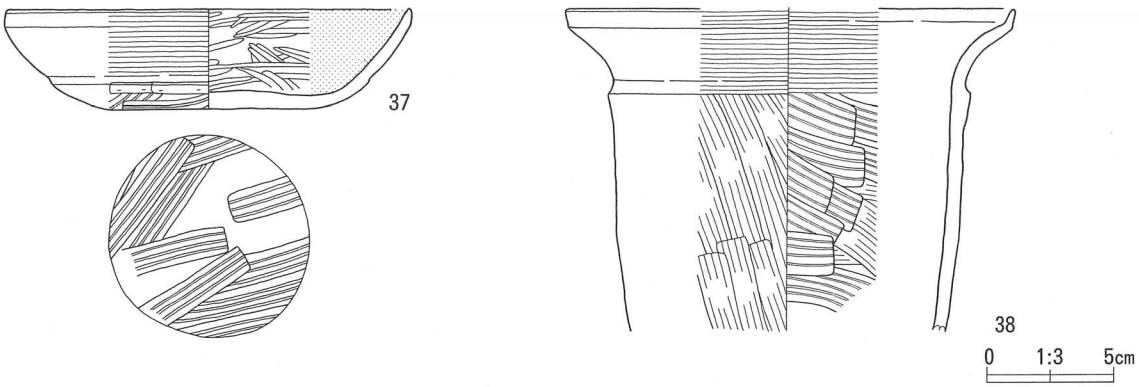
番号	色調	しまり	粘性
1	10YR2/1黒色	やや疎	やや弱
2	10YR4/3にぶい黄褐色	やや密	やや弱

RA64ピット

番号	色調	しまり	粘性
1	10YR1.7/1黒色	疎	やや弱

RA64カマド

番号	色調	しまり	粘性	
1	10YR1.7/1黒色	疎	やや弱	
2	10YR2/3黒褐色	やや密	やや弱	
3	10YR5/8黄褐色	やや密	やや弱	
4	10YR5/4にぶい黄褐色	やや密	やや弱	
5	10YR2/3黒褐色	やや密	やや弱	
6	5YR4/6赤褐色	やや密	弱	焼土
7	10YR4/6褐色	疎	やや弱	
8	10YR5/6黄褐色	やや疎	やや弱	
9	10YR3/4暗褐色	やや疎	やや弱	
10	10YR4/6褐色	やや疎	弱	



第27図　RA64（2）、RA64出土遺物

遺　物（第27図、写真図版34）

〔出土状況〕床面から0.7kgの土器が出土しており、そのうち2点を図化した。

〔土器〕37は非ロクロ調整の土師器坏である。体部はヘラミガキの後ヨコナデが施され、段が見られる。底部は全面にハケメによる調整がなされており、ほぼ平底である。内面には黒色処理が施されている。38は土師器長胴甕である。欠損している底部は不明だが、体部の器面調整は内面がハケメ、外面がヘラナデである。口縁部は外反しつつ立ち上がるが、直立して端部に至る。

時　期　床面から出土した土器から奈良時代8世紀後半に位置づけられる。

RA65竪穴住居跡

遺　構（第28図、写真図版22）

〔位置・重複〕南区西部の６Ｏ８ｘグリッドに位置し、RG97溝と重複している。RA65がRG97を切っており、RG97が古く、RA65が新しい。また、北西と南側で攪乱を受けている。

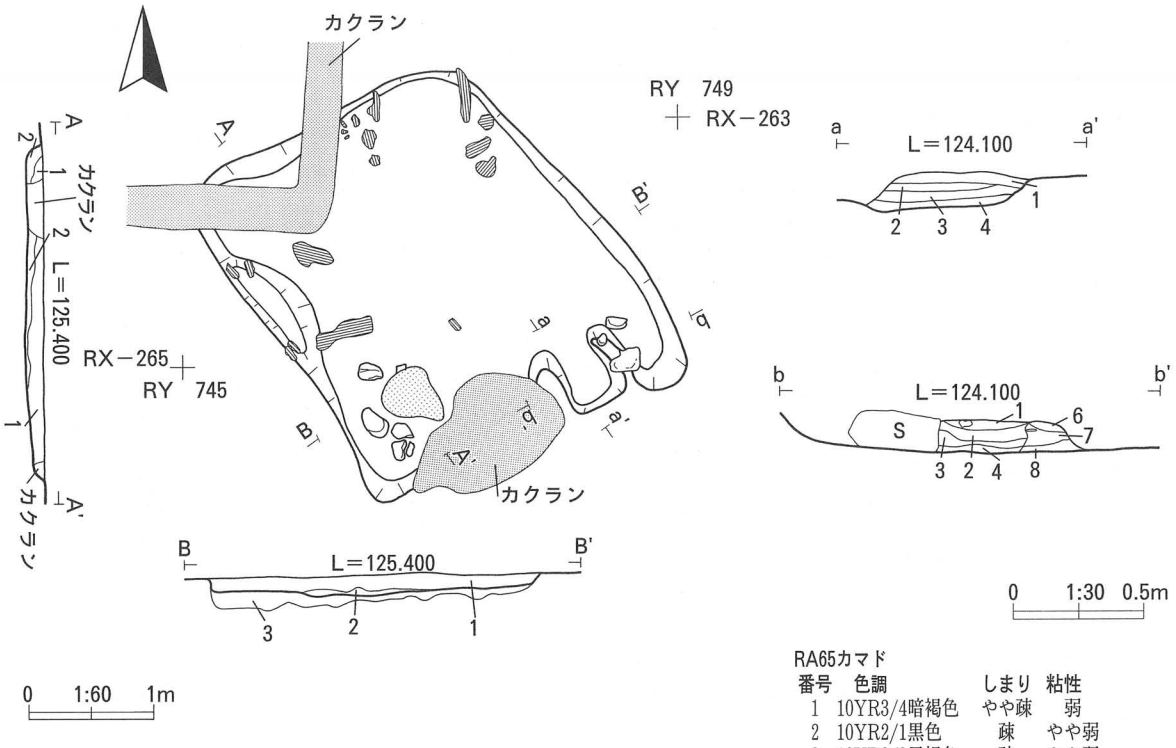
〔規模・平面形〕平面形は、西隅がやや外にふくらむなど、ややゆがみが見られるが、方形を呈する。規模は、北西－南東が3.2m、北東－南西が2.8mである。

〔覆土〕一部攪乱を受けている。ほぼレンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。２層の黒色土には多量の炭化材が含まれている。

〔壁・床面〕壁は直立気味に立ち上がり、残存高は約15cmである。床は、暗褐色土によって貼床がなされている。南隅に焼土が検出されたが、現地性のものである。

〔柱穴・ピット〕柱穴やその他のピットは検出されていない。

〔カマド〕南東壁の東隅寄りに構築されている。天井部は崩壊している。袖は、右袖の一部が攪乱により破壊されている。袖土から甕（43）の破片が出土していることから、袖は土器（の破片）を芯材として構築されたと考えられる。燃焼部の規模は0.3×0.5mで、床面より５cmほど掘りこまれている。燃焼部では焼土は確認されなかった。



RA65
番号	色調	しまり	粘性	
1	10YR2/2黒褐色	やや密	弱	
2	10YR1.7/1黒色	疎	弱	炭化材を多量に含む
3	10YR3/3暗褐色	やや密	やや弱	

RA65カマド
番号	色調	しまり	粘性
1	10YR3/4暗褐色	やや疎	弱
2	10YR2/1黒色	疎	やや弱
3	10YR2/3黒褐色	疎	やや弱
4	10YR3/3暗褐色	密	やや弱
5	10YR3/4暗褐色	やや密	やや弱
6	10YR3/4黒褐色	やや密	やや弱
7	10YR3/4褐色	密	やや弱

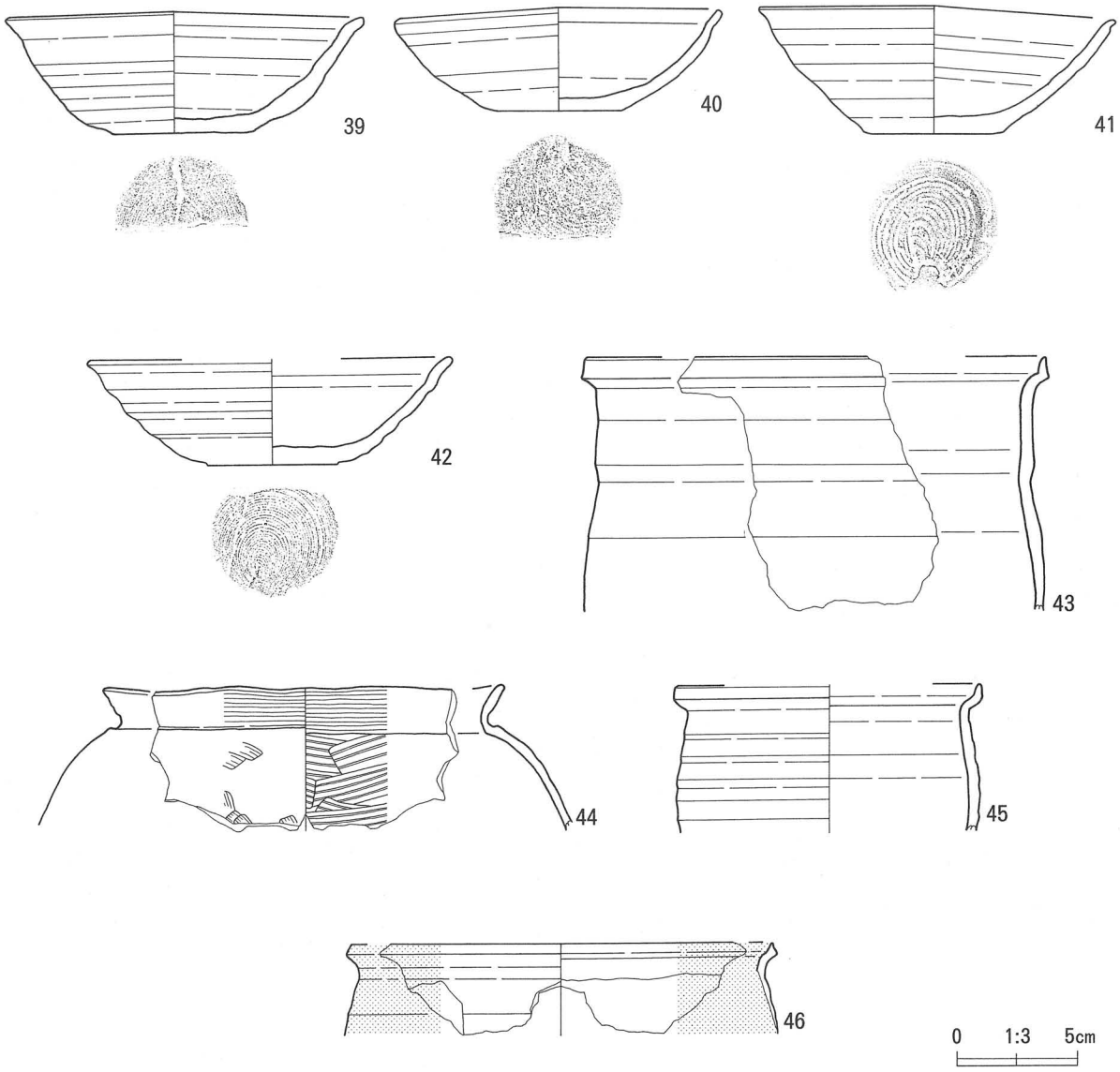
第28図　RA65

遺　物（第29図、写真図版34）

〔出土状況〕覆土から1.6kgの土器が出土しており、そのうち８点を図化した。出土した土器のうち大部分は２層からのものである。

〔土器〕39～42は土師器坏である。41は、体部が底部から直線的に外傾しながら立ち上がり、稜線がかすかに表現されている。焼成は良好である。42の胎土は１～２mm程の石英を含むが、密である。また、色調も橙色と明るめである。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部に至りやや外反する。43～46は土師器甕である。いずれも長胴甕と推測される。

時　期　床面から出土した遺物から、平安時代９世紀中頃～後半に位置づけられる。



第29図　RA65出土遺物

ＲＡ66竪穴住居跡

遺　構（第30図、写真図版23）

〔位置関係〕６Ｏ10ｖグリッドに位置し、北東にRA65が隣接している。RG97・RG98と重複し、RA66はこれらを切っている。したがって、RA66が新しく、RG97・RG98が古い。

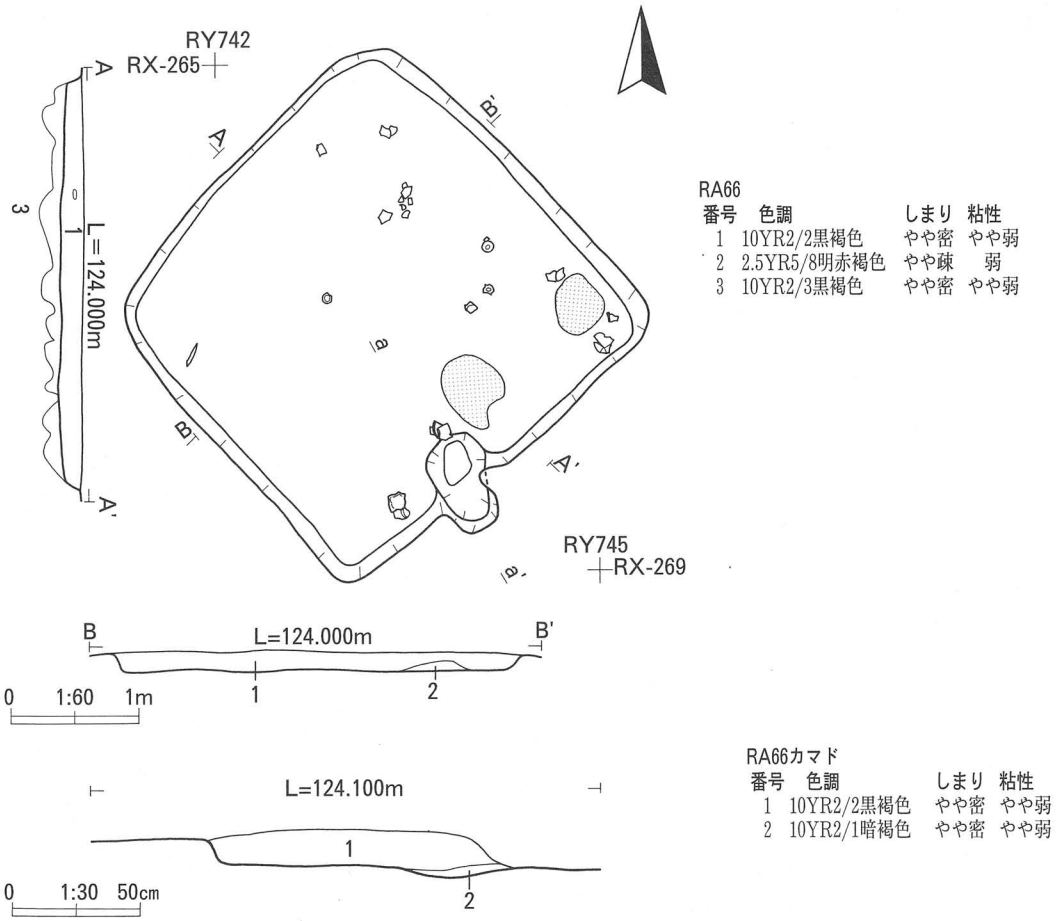
〔平面形・規模〕平面形は、西隅にややゆがみが見られるものの、北西－南東・北東－南西ともに3.4mの正方形を呈する。

〔覆土〕２つの層に分かれるが、２層は異地性の焼土で、実質の覆土は１層の黒褐色土のみである。短期間に埋没したか、あるいは人為的に埋め戻されたものと考えられる。

〔壁・床面〕ほぼ直立して立ち上がり、残存高は約10cmである。床は黒色土によって貼床が施されており、やや固くつき固められている。

〔柱穴・ピット〕柱穴や他のピットは検出されていない。

〔カマド〕南東壁の中央よりやや南側に構築されている。天井部は崩壊しており、また袖も完全に失われている。カマド部分と推測される箇所の埋土は１層の黒褐色土が主体で、これは住居部の覆土と同じである。このことと、袖までが完全に崩壊していることから、ＲＡ66のカマドは意図的に破壊されたものと推測される。燃焼部は0.2×0.5mで、床面より５cmほど掘りこまれている。燃焼部に焼土は確認できなかったが、そこより左手前に異地性の焼土があり、これはカマド燃焼部の焼土をかき出したものである可能性もある。煙道は掘り込み式で、煙出しまでの距離は燃焼部から50cmである。



RA66

番号	色調	しまり	粘性
1	10YR2/2黒褐色	やや密	やや弱
2	2.5YR5/8明赤褐色	やや疎	弱
3	10YR2/3黒褐色	やや密	やや弱

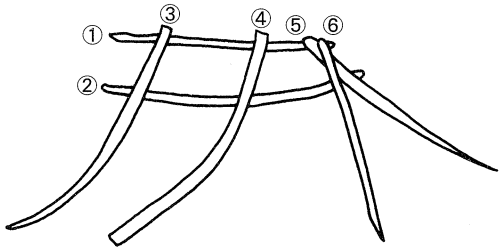
RA66カマド

番号	色調	しまり	粘性
1	10YR2/2黒褐色	やや密	やや弱
2	10YR2/1暗褐色	やや密	やや弱

第30図　RA66

遺　物（第32・33図、写真図版35・36）

〔出土状況〕床面・覆土から5.5kgの土器が出土しており、そのうち21点を図化した。また、南西壁の西隅よりの覆土上層から鉄製品が１点出土している。

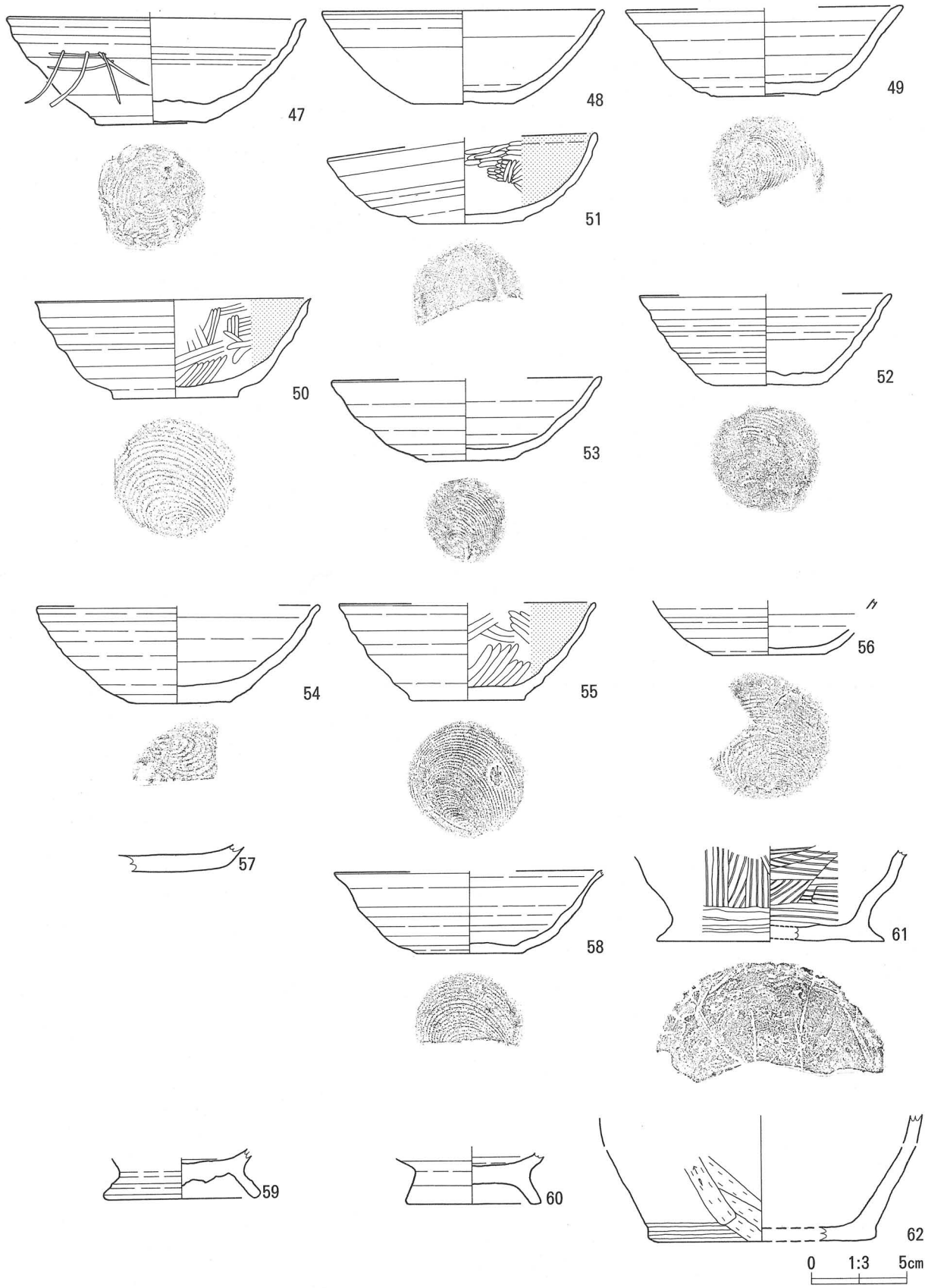


第31図　RA66出土刻書土器筆順

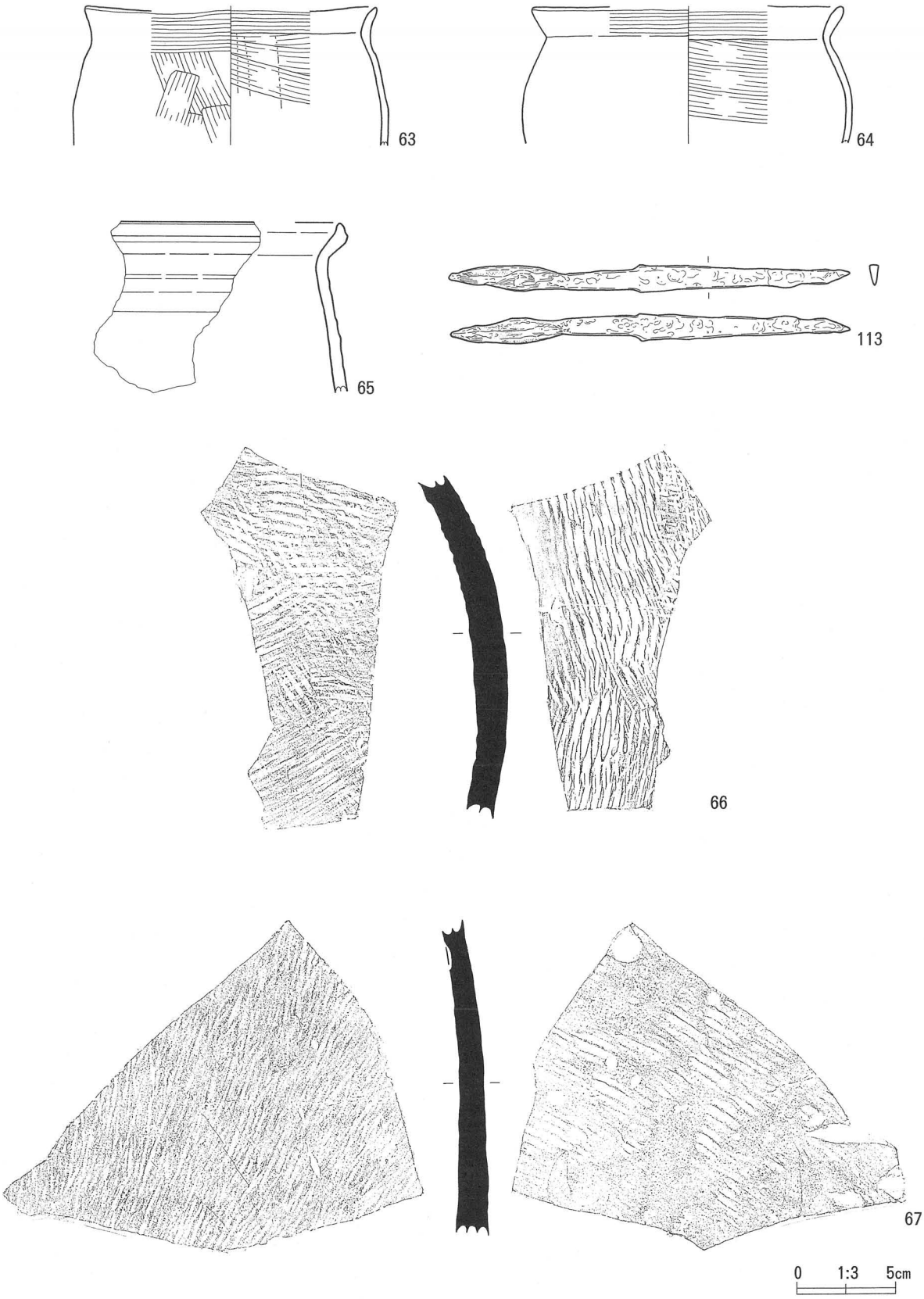
〔土器〕47～56・58は土師器坏である。47は、西隅の覆土下層から出土したもの。底部は回転糸切りによって切り離された後、再調整が施されている。体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がるが、口縁でわずかに外反して端部に至る。体部には焼成の際に生じたであろう黒斑がみられる。また、体部外面に正位で「丞」と刻まれている。刻書は、凹部の様相と、凹部に前述の黒斑がかかっていることから、焼成前のものと考えられる。筆順は、第31図に示したとおりである。50は、浅黄橙色と白みがかった密な胎土で、内面に黒色処理が施されている。体部は、底部からいったん直立した後、直線的に外傾しながら端部に至る。55は床面直上から出土した底部の破片とRE11の埋土上層から出土した体部の破片が接合したものである。胎土や焼成が50と類似している。また、底部から体部への移行も同様である。ただし、55の方は体部がやや内湾している。59・60は土師器高台付坏である。高台はともに後からの貼り付けである。59の高台は、底部の状態から、以下のように貼り付けられたと推定される。まず、坏をロクロの上に伏せ、高台を底部に置く。次に、高台と底部を密着させるため、底部周辺を削り出し、高台に貼り付けたのであろう。また、59は、高台を上にする形で、床面で検出された。ただ、高台の大部分と底部は貼床まで達していたことから、人為的に埋められたものと考えられる。ただし、居住している時なのか、住居を廃棄する時なのか、その時点は不明とせざるを得ない。また、色調は、本遺跡出土土師器のほとんどが黄褐色ないしは黄橙色であるのと対照的に、赤褐色である。57・61～65は土師器甕である。57は、甕の底部の破片である。いわゆる砂底土器と称されているものである。砂は底部外面の全体にわたるが、中心よりも周辺部分により多く付着している。ただ、底部の断面は周辺が盛り上がっているわけではなく、むしろ逆に中心部分が盛り上がっている。砂粒の大きさは非常に細かく１mm以下のものがほとんどである。２～３mmの粒が見えるが、これは砂が付着した時のものでなく、胎土に含まれている石英である。内面はヘラナデによる調整がなされている。

〔鉄製品〕112は刀子である。出土時には３片にわかれていたが、すべて接合し、柄から切っ先まで完存する。長さは20.5cmで、うち9.5cmが柄部となる。最大幅は1.4cm、厚さは、棟部が２～３mm、刃部は１mm以下である。柄部には柄木と推定される木質が残存しているが、それを固定するための目釘や金具は見られない。保存処理後の重量は23.7ｇである。

時　期　出土した遺物から、平安時代10世紀前半に属すると考えられる。



第32図　RA66 出土遺物（1）



第33図　RA66 出土遺物（2）

RA68竪穴住居跡

遺　構（第34・35図、写真図版24・25）

〔位置関係〕中央区南部の６００ｕグリッドに位置しており、重複する遺構はない。

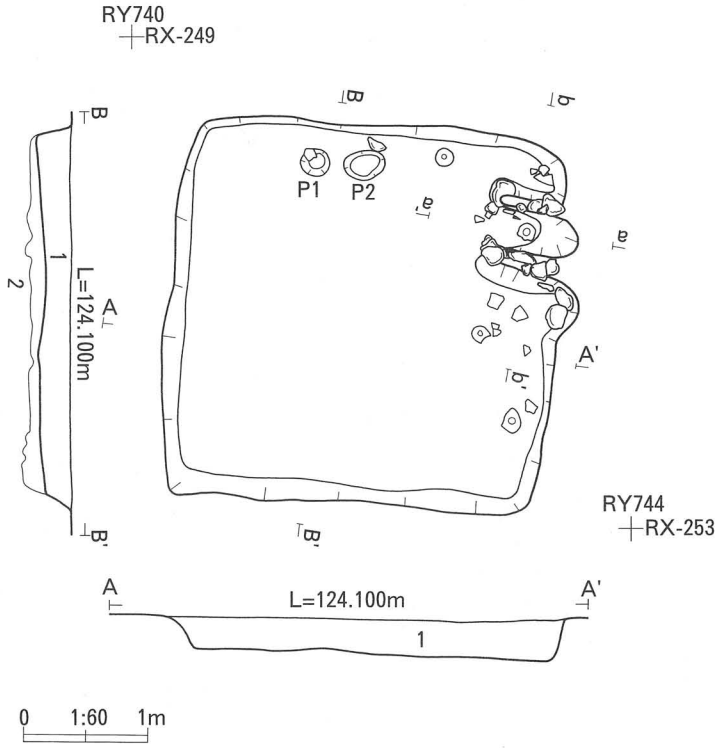
〔平面形・規模〕平面形はあまりゆがみがない正方形で、規模は、東－西3.2m、南－北3.1mである。

〔覆土〕観察された覆土は黒色土の１層のみであることから、RA68は人為的に埋め戻されたものと推測される。

〔壁・床面〕北壁が直立気味に立ち上がるが、他の壁はやや外傾しながら立ち上がっている。残存高は30cm前後である。床は、暗褐色土によって貼床が施されている。

〔柱穴・ピット〕北壁際の中央にＰ１とＰ２が東西に並ぶ形で検出された。Ｐ１は0.2×0.3mの楕円形を呈し、深さは15cm前後である。Ｐ２は直径0.2mの円形を呈し、深さは20cm前後である。いずれも、検出位置から柱穴とは考えにくい。また、他に柱穴と推定しうるピットは検出されていない。

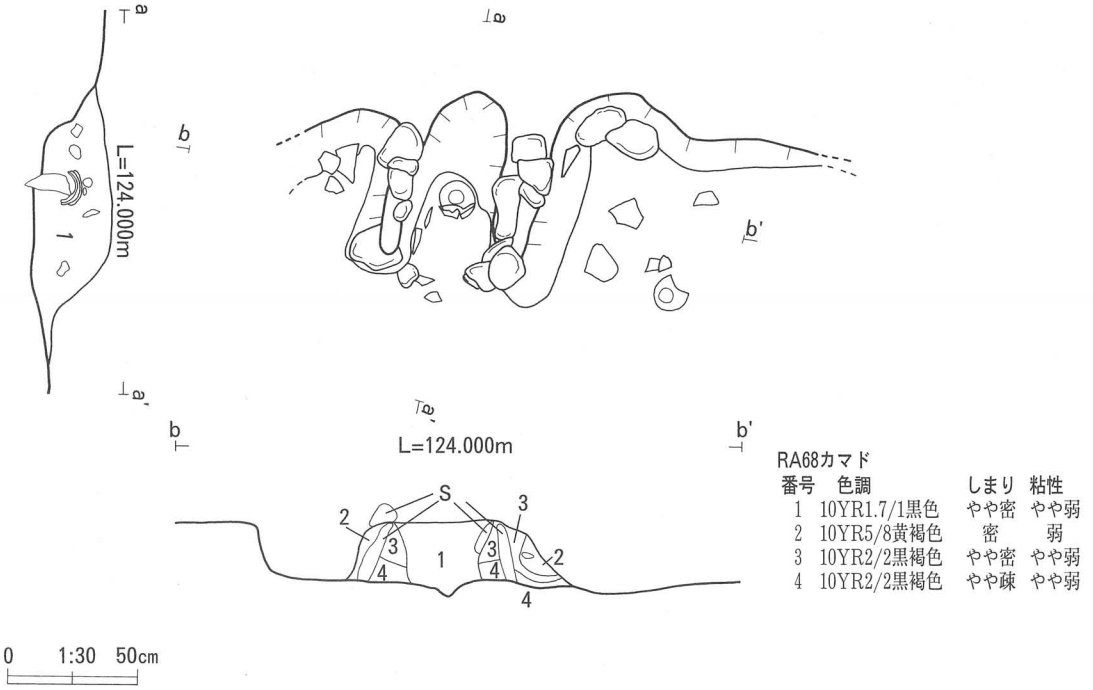
〔カマド〕東壁の中央より北側に構築されている。袖は、左右とも幅５～７cm、長さ25cmの平坦な河原石を芯材とし、その周りに黄褐色土と黒褐色土をつき固めて構築されている。天井部は崩壊しているが、袖部の芯材の検出状況から、同じように平らな石を芯材にしていたものと推測される。袖に乗る形で検出された10～20cm大の石も同様に天井部あるいは袖部の芯材として機能していたものと推測される。燃焼部の規模は、0.35×0.3mで、床面より５cmほど掘り下げられている。燃焼部には焼土は確認できなかったが、17.1×15.4×9.2cmの石が検出された。この石の上には３点の土師器坏が重ねられる形で出土している。石には被熱痕が観察されることから、支脚と推測される。この石の上から出土した３点の坏は高さを調節するために置かれたものと推測される。また、支脚は燃焼部底面に突き刺さる形で検出されていることから、原位置を保っていると考えられる。煙道は掘り込み式で、燃焼部より20cmで煙出しに達する。



RA68

番号	色調	しまり	粘性
1	10YR1.7/1黒色	やや密	やや弱
2	10YR3/4暗褐色	やや密	やや弱

第34図　RA68



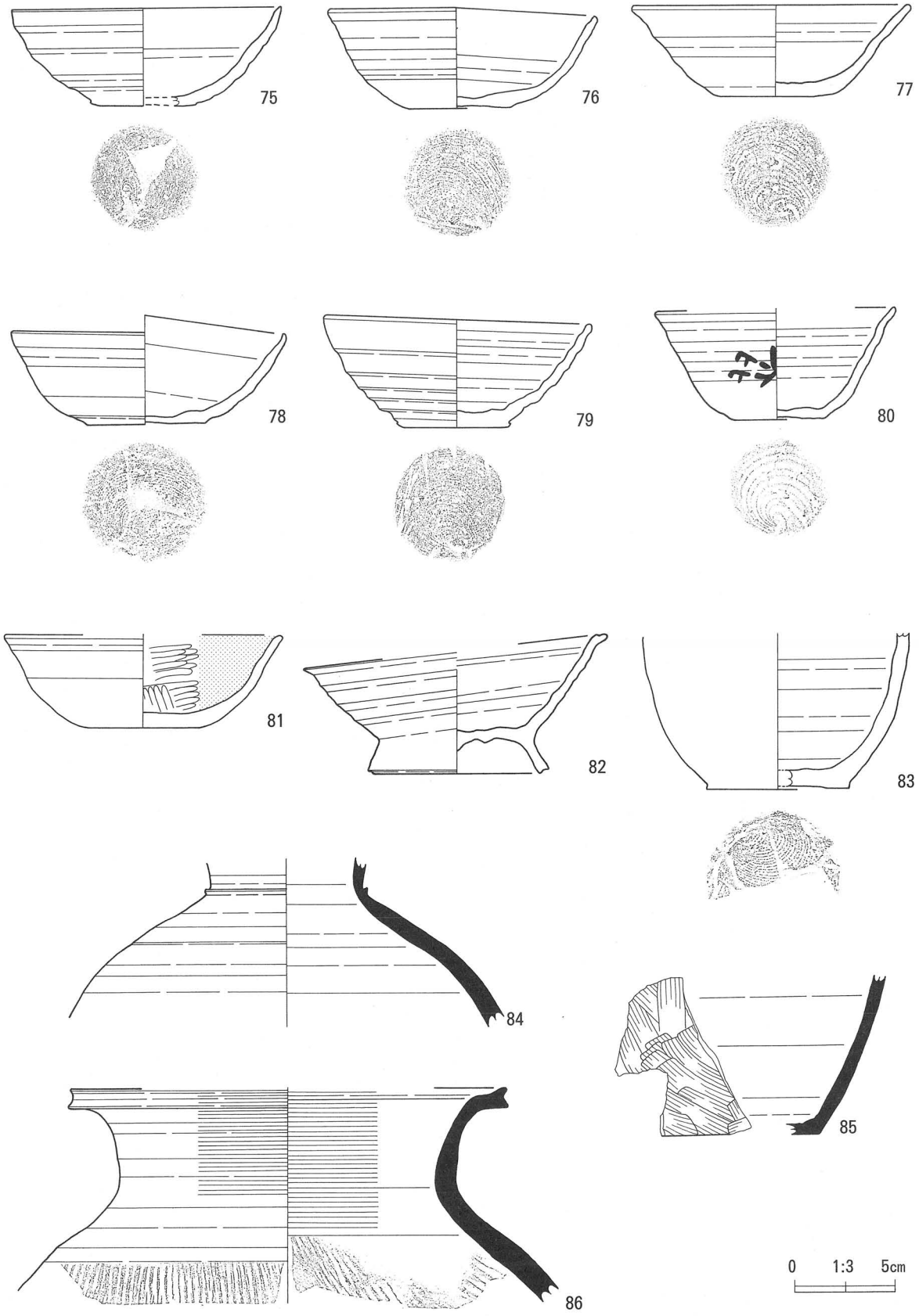
第35図　RA68カマド

遺　物（第36・37図、写真図版37）

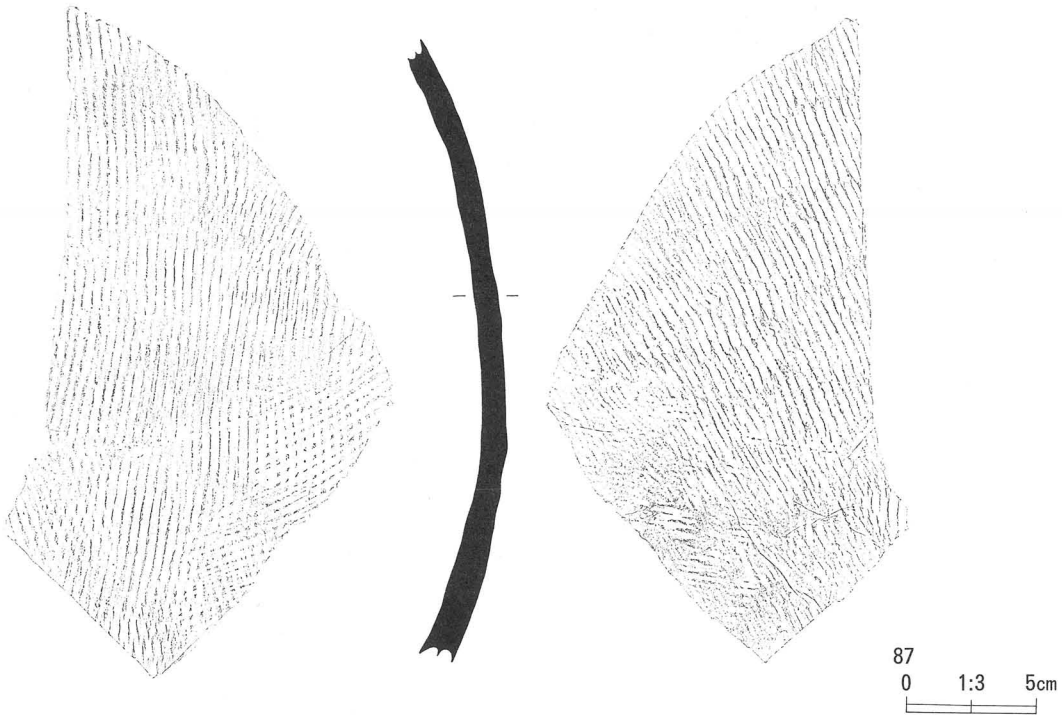
〔出土状況〕床面および覆土から3.1kgの土器が出土している。そのうち13点を図化した。遺物は、覆土の上層～下層・床面から出土しているが、平面的にはほとんどがカマド周辺からのものである。

〔土器〕75～81は土師器坏である。75は埋土下層から出土したもの。底部中央と口縁部がわずかに欠損しているだけで、ほぼ完形である。口縁の内外両面に煤がわずかに付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。76は埋土中層から出土したもの。口縁部をわずかに欠くのみで、ほぼ完形である。胎土は、多量の石英粒を含みやや粗いが、焼成は良好で、硬質感がある。口縁部内面と体部の一部分に煤と推測される黒色の付着物が見られる。77は、埋土下層から出土したもの。体部は底部から直線的に外傾しながら立ち上がり、口縁部でやや外反して端部に至る。78～80の３点はカマドの燃焼部から出土したものである。支脚石の上に伏せた状態で３枚が重ねられていた。78が一番上で80が一番下である。78はロクロを使用して調整されているが、全体的にゆがみが著しい。79の体部には稜線が明瞭に見てとれる。80は体部外面に横位にて文字が記されているが、汚れが付着していることと墨の残りが悪いため、いかなる文字が記されていたかは不明である。82は、床面直上から出土した体部の破片と埋土上層から出土した底部が接合した土師器高台付坏である。高台は後からの貼り付けである。83は、土師器の小形甕である。底部は回転糸切りによって切り離されている。内面・外面ともに調整はロクロナデである。85は須恵器の破片である。底部から体部の下半がわずかに残存するのみだが、器種は甕と推測される。体部の外面にヘラナデ、内面にはロクロナデによる調整が観察される。86は、床面から出土した須恵器大甕である。口縁部から体部上半にかけての破片であるが、復元推定口径は約21cmである。体部には内面・外面ともにタタキメによる調整が見られる。直立する頸部から外反しながら端部に至る。口縁部の断面はＹ字状を呈する。

時　期　出土した遺物から、平安時代９世紀中頃に位置づけられる。



第36図　RA68 出土遺物（1）



第37図　RA68出土遺物（２）

３．竪穴状遺構

南区西部で１棟検出された。時期は平安時代に属するものと推測される。

RE11 竪穴状遺構

遺　構（第38図、写真図版26）

〔位置関係〕６Ｏ９ｕグリッドに位置する。北にRG８、南にRG７が走っている。なお、遺構の西の一部は第15次調査区にふくまれる。

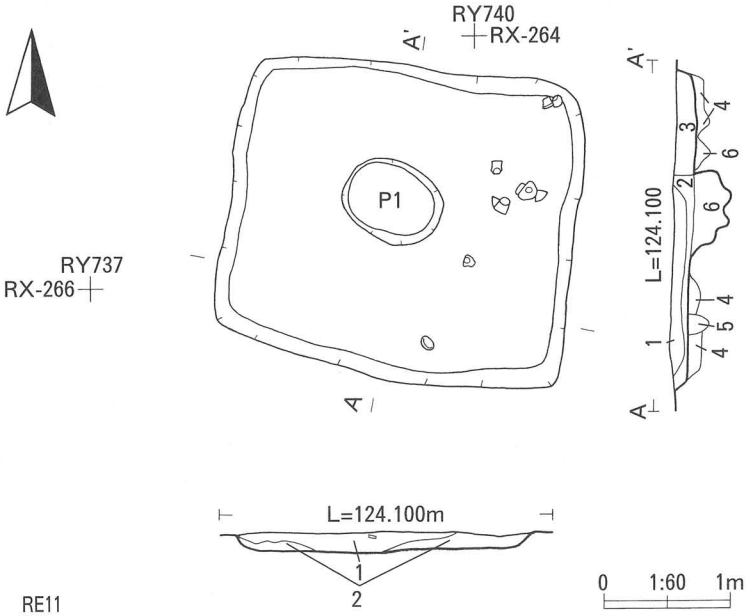
〔平面形・規模〕平面形は方形を呈する。規模は、東－西2.7m、南－北2.5mである。

〔覆土〕覆土は黒褐色土を主体とし、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。ただし、南北断面図に示されているように、遺構の北半では黒褐色土の２層を切る形で黒色土が確認できる。この黒色土は、RE11の外には広がらないことから、遺構とは判断しなかった。この３層は、RE11がほぼ埋没しかかった時に何らかの理由で掘り起こされた後に再堆積した層と考えられる。

〔壁・床面〕壁は直立気味に立ち上がり、残存高は約15cmである。床は黒褐色土によって貼床が施されている。

〔柱穴・ピット〕Ｐ１は、RE11の中央部に位置し、0.6×0.9mの楕円形を呈する。深さは床面より約30cmであるが、底面は波打っており平らではない。貼床を掘りこむ形で構築されているが、RE11の覆土は切られていないので、同時に機能していたものと考えられる。現時点で、その性格については不明とせざるを得ない。

〔カマド〕検出後、検出面に微量の焼土粒が確認できたことから、東壁の北寄りにカマドが構築されていることを予想して、覆土の掘り下げを行ったが、結果として天井や袖はもちろん、燃焼部と推測しうるものはなく、床面まで達した。カマドが破壊されたとも考えられるが、構築された痕跡すらないことから、本遺構にはもともとカマドが構築されなかったと判断し、遺構名も検出時点のRA67竪穴住居跡を変更して、RE11竪穴状遺構と変更した。



RE11

番号	色調	しまり	粘性
1	10YR2/3黒褐色	疎	やや弱
2	10YR2/2黒褐色	疎	やや弱
3	10YR2/1黒色	やや疎	やや弱
4	10YR2/3黒褐色	疎	やや弱
5	10YR1.7/1黒色	疎	やや弱
6	10YR3/2黒褐色	やや疎	やや弱

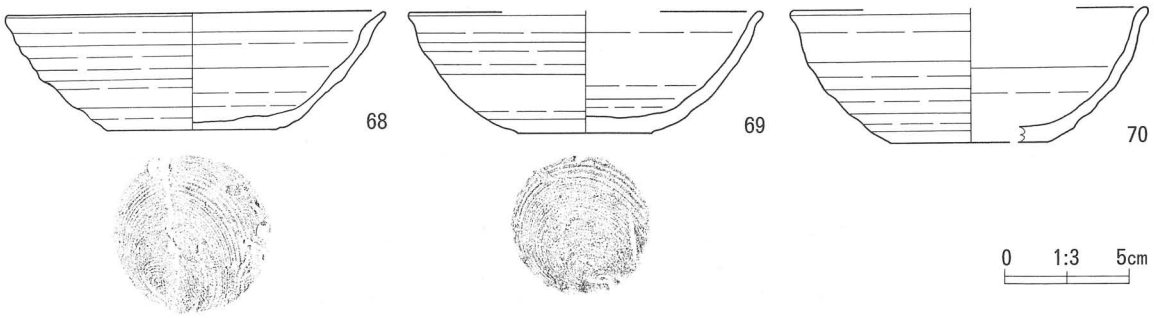
第38図　RE11

遺　物（第39・40図、写真図版38）

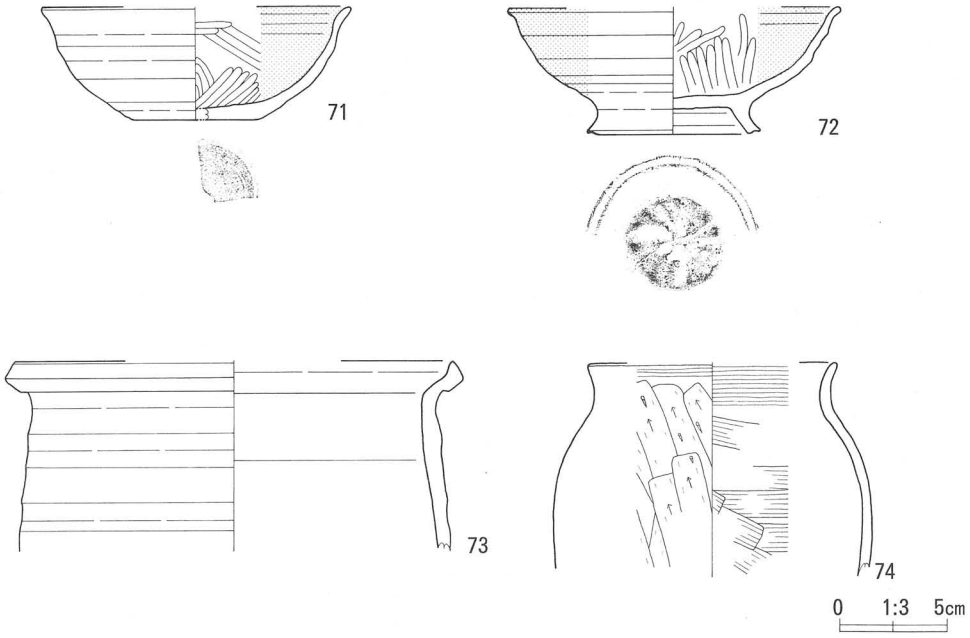
〔出土状況〕3.6kgの土器が、おもに覆土上層から出土している。そのうち7点を図化した。

〔土器〕68・69は覆土上層から出土した土師器坏で、ともにロクロを用いて調整されている。また、胎土や焼成の具合が類似している。68は、体部が緩やかに内湾しながら立ち上がり、稜線が明瞭に認められる。69は、体部がゆるやかに内湾しながら立ち上がることは68と共通するが、口縁部でやや外反して端部に至っている点が異なっている。72は、埋土上層から出土した土師器高台付坏で、内外両面とも黒色処理が施されている。高台は後からの貼り付けで、放射状痕跡が確認できる。さらに、その上にはロクロナデ調整も確認できる。体部は緩やかに内湾しながら立ち上がるが、口縁部付近で外反している。

時　期　出土した遺物から、平安時代9世紀後半～10世紀前半に位置づけられる。



第39図　RE11 出土遺物（1）



第40図　RE11 出土遺物（２）

４．土　坑

土坑は最終的に10基を登録した。北区に２基、南区に８基が位置する。時期については、不明なものが５基あるが、他は出土遺物や重複する遺構との切り合い関係から、奈良時代もしくは平安時代に属するものと推測される。

RD105 土坑（第41図、写真図版29）

遺　構　南区東部の６Ｐ５ｇグリッドに位置し、他の遺構との重複はない。平面形はゆがみのある楕円形である。規模は、2.1×1.6ｍで、深さは約20cmである。壁は、南壁が直立気味に、北壁がゆるやかに立ち上がる。覆土の堆積はレンズ状を呈しており、自然堆積と考えられる。底面はほぼ平坦であるが、小石が多く見られる。

遺　物　出土していない。

時　期　遺物の出土がなく、時期は不明である。

RD106 土坑（第41図、写真図版29）

遺　構　南区東部の６Ｐ６ｉグリッドに位置し、RA62と重複している。覆土の状況から、RA62を切っており、RD106が新しく、RA62が古い。平面形は楕円形である。規模は、0.9×0.7ｍで、深さは約40cmである。壁はゆるやかに外傾しながら立ち上がる。覆土の堆積はレンズ状を呈しており、自然堆積と考えられる。底面は、中央部分がやや高くなっているが、ほぼ平坦である。

遺　物　98は土師器坏で、底部のみの破片である。胎土は精製されたものが用いられており、焼成も良好である。底部は回転糸切りによって切り離されており、再調整はなされていない。

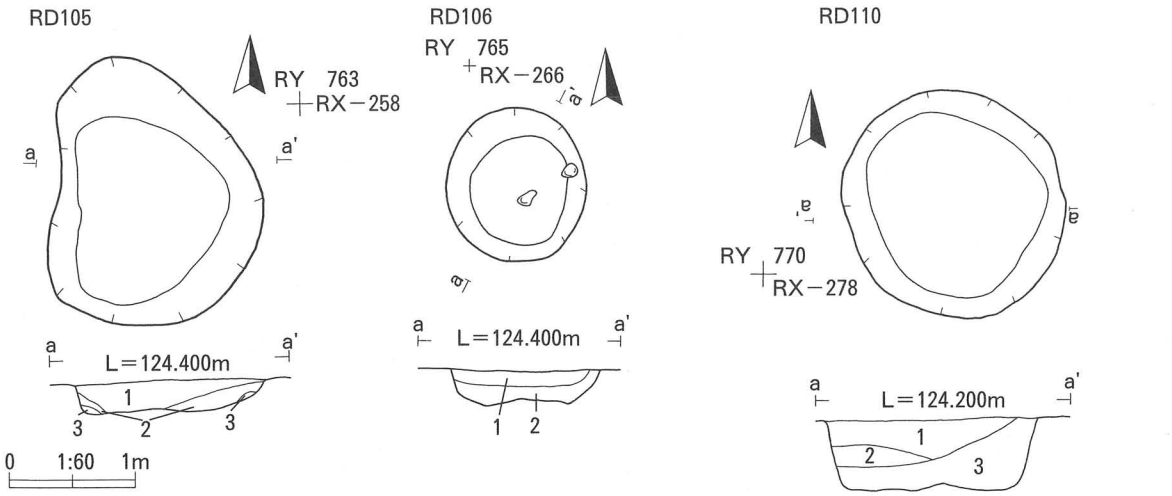
時　期　遺構の切り合い関係から平安時代10世紀前半以降に位置づけられる。

RD110 土坑（第41図、写真図版29）

遺　構　南区東部の６Ｐ15１グリッドに位置し、他の遺構との重複はない。平面形はほぼ円形を呈する。規模は、直径1.8m、深さ0.5mである。壁は直立気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、小石が多く見られる。覆土は３つの層に分けられ、堆積状況から自然堆積と考えられる。

遺　物　99は１層から出土した土師器甕の破片で、器面の所々に煤と推測される黒色の付着物が見られる。100も土師器甕の破片である。頸部からほとんど外反せずに直立気味に立ち上がり、端部に至る。橙色を呈する胎土は密で、焼成も良好である。

時　期　出土した遺物がいずれも破片であるため断定はできないが、８世紀代に位置づけられる。



RD105

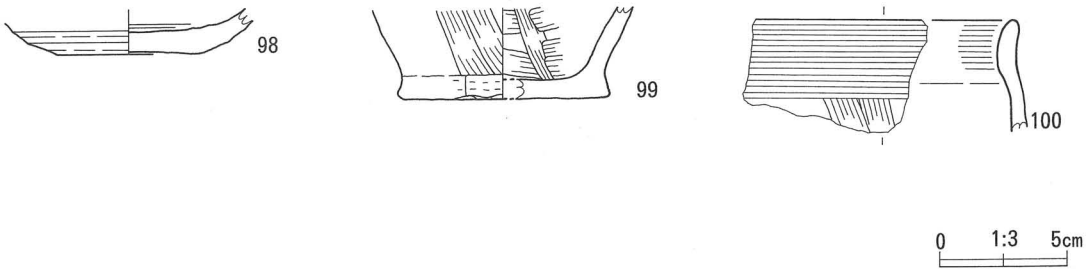
番号	色調	しまり	粘性	
1	10YR2/2黒褐色	密	やや弱	褐色土が10%混入
2	10YR3/2黒褐色	やや密	やや弱	
3	10YR3/3暗褐色	密	弱	

RD106

番号	色調	しまり	粘性
1	10YR2/1黒色	やや密	やや弱
2	10YR2/2黒色	やや密	やや弱

RD110

番号	色調	しまり	粘性	
1	10YR2/1黒色	やや疎	やや弱	小石混入
2	10YR3/1黒褐色	やや疎	やや弱	黒色土５％混入
3	10YR3/3暗褐色	密	弱	１層より大きめの石が混入



第41図　RD105・106・110、RD106・110 出土遺物

RD113 土坑（第42図、写真図版30）

遺　構　南区西部の６Ｏ10ｘグリッドに位置し、RA65の東隅とRA66の南東隅に接している。平面形は楕円形を呈する。規模は、0.9×0.7ｍで、深さは約20cmである。壁は、南側がいったん直立した後にゆるやかに外傾しながら立ち上がっているのに対し、北側は直立している。底面はほぼ平坦である。覆土は４つの層にわけられるが、自然堆積ではないようである。

遺　物　出土していない。

時　期　遺物の出土はなく、時期は不明である

RD114 土坑（第42図、写真図版30）

遺　構　南区西部の６Ｏ10ｔグリッドに位置し、RD115と接している。平面形は、中央部がやや凹んでいる楕円形である。規模は、1.6×0.6ｍで、深さは約20cmである。壁はゆるやかに外傾しながら立ち上がり、底面には凹凸が見られる。覆土は南側が一部攪乱を受けているものの、ほぼレンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

遺　物　出土していない。

時　期　遺物の出土はなく、時期は不明である。

RD115 土坑（第42図、写真図版30）

遺　構　南区西部の６Ｏ11ｔグリッドに位置し、RD114と接している。重複している遺構はない。平面形は、中央部が凹んでいる楕円形を呈している。規模は、1.2×0.6ｍで、深さは約20cmである。壁はゆるやかに外傾しながら立ち上がっている。底面は、中央部が盛り上がっており、凸状となっている。覆土は東側が一部攪乱を受けているが、３つの層がほぼレンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

遺　物　出土していない。

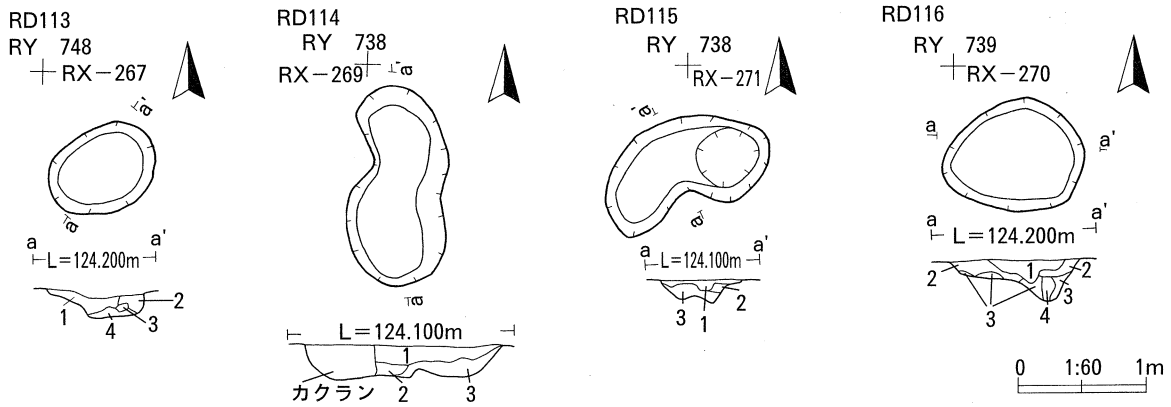
時　期　遺物の出土がなく、時期は不明である。

RD116 土坑（第42図、写真図版30）

遺　構　南区西部の６Ｏ11ｕグリッドに位置し、RG97と重複している。平面形はほぼ円形を呈している。規模は、1.1×0.9ｍで、深さは約30cmである。壁はゆるやかに外傾しながら立ち上がっている。底面は、凸凹状である。覆土はほぼレンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

遺　物　出土していない。

時　期　遺物の出土はないが、奈良時代８世紀前半に機能していたRG98を切っているので、それ以降に位置づけられる。



RD113

番号	色調	しまり	粘性
1	10YR3/2黒褐色	密	やや強
2	10YR4/4褐色	疎	やや弱
3	10YR2/1黒色	疎	やや強
4	10YR4/6褐色	疎	やや弱

RD114

番号	色調	しまり	粘性
1	10YR3/3暗褐色	やや密	やや弱
2	10YR2/1黒色	疎	弱
3	10YR6/8明黄褐色	疎	やや弱

RD115

番号	色調	しまり	粘性
1	10YR2/2黒褐色	やや疎	やや弱
2	10YR4/3にぶい黄褐色	やや疎	やや弱
3	10YR2/1黄褐色	やや疎	やや弱

RD116

番号	色調	しまり	粘性	
1	10YR3/1黒褐色	やや密	やや弱	
2	10YR3/3暗褐色	密	弱	黄褐色土１％混入
3	10YR5/8黄褐色	やや密	弱	
4	10YR3/4暗褐色	疎	弱	

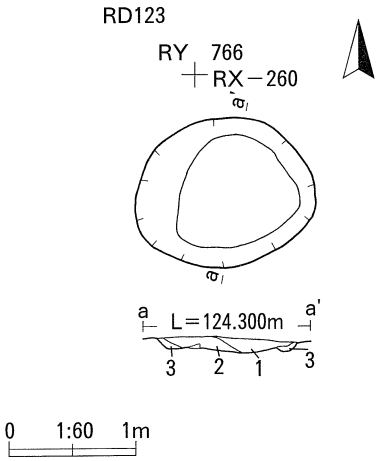
第42図　RD113・114・115・116・123

RD123 土坑（第43図、写真図版30）

遺　構　南区東部の６Ｐ６ｉグリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形は、楕円形気味の円形である。規模は、1.5×1.2mで、深さは約10cmである。壁は直立気味に立ち上がり、底部は石があるもののほぼ平坦である。覆土はレンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

遺　物　出土していない。

時　期　時代を特定できる遺物の出土がなく、時期は不明である。



RD123

番号	色調	しまり	粘性
1	10YR2/2黒褐色	やや疎	やや弱
2	10YR3/4暗褐色	やや疎	やや弱
3	10YR2/1黒色	やや密	やや弱

第43図　RD123

RD125 土坑（第44図、写真図版31）

遺　構　北区中央の５Ｐ２ｃに位置し、RD126 と近接する。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈している。規模は、1.1×0.7ｍで、深さは約20cmである。壁は、北東側が直立するのに対し、南西側はゆるやかに外傾しながら立ち上がっている。覆土は黒褐色土の単層で、人為的に埋め戻された可能性がある。

遺　物　出土していない。

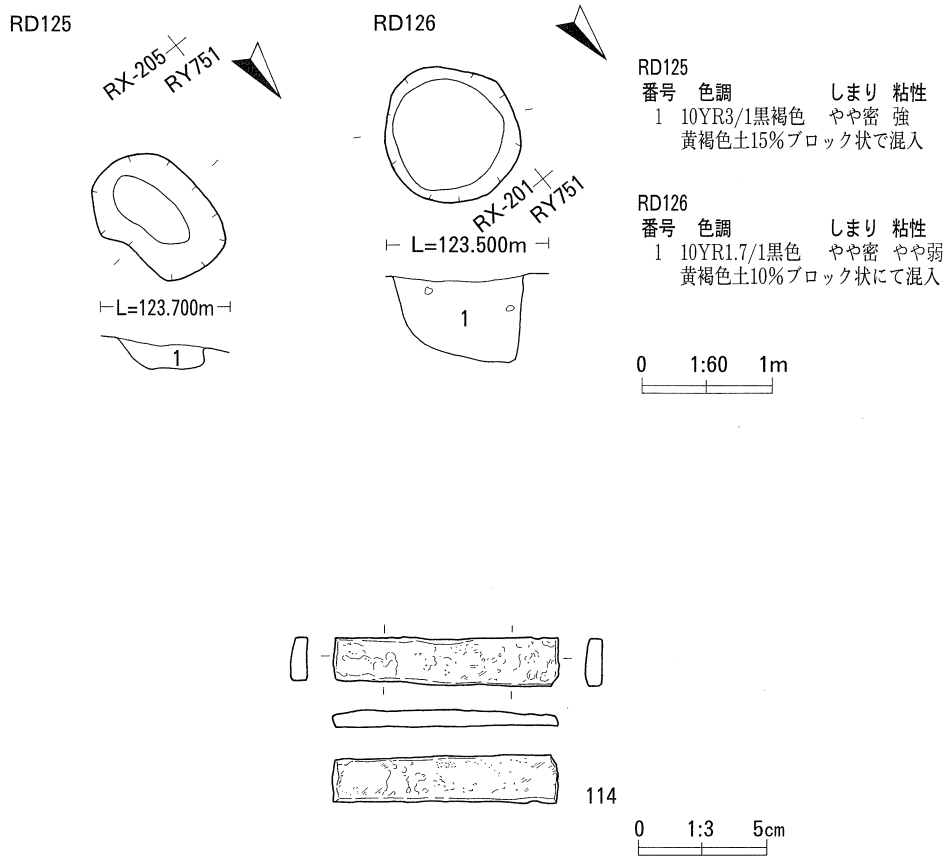
時　期　遺物の出土がなく、不明である。

RD126 土坑（第44図、写真図版31）

遺　構　北区中央の５Ｐ３ｃに位置し、RD125 と近接する。重複する遺構はなく、平面形は円形である。規模は、直径が1.1ｍで、深さは約60cmである。壁は直立しており、底面は、東側が低くなっており、傾斜している。覆土は黒色土の単層で、RD125 同様、人為的に埋め戻された可能性がある。

遺　物　114は鉄製品である。8.9×1.9×0.7cmと薄い延べ板状を呈している。何に用いられたものかは不明である。重量は32.2ｇ。他に、図化していないが、器種不明の土師器の破片が１点出土している。

時　期　時期を特定しうる遺物は出土していないため不明である。



第44図　RD125・126、RD126 出土遺物

5．溝跡

南区西部で6条が検出された。いずれも調査区外まで延びるものである。

RG 7 溝跡（第45図、写真図版27）

遺　構

〔位置・重複〕並行して調査が行われた第15次調査区から延びてきたものである。第15次調査区でも調査区外の西に延びている。間に未調査部分があるため接続は確認できていないが、方向から第1次調査で検出されたRG 7に続くものと考え、RG 7とした。同じように第1次調査区・第15次調査区で検出されたRG 8・RG 9と平行しており、RG 7が最も南を走っている。東端でRG98と重複している。RG98を切っており、RG98が古く、RG 7が新しい。

〔規模・方向〕第14次調査区分だけで、長さ0.9mを測る。幅は、開口部で0.3m、底面で0.1mである。深さは、一番深いところで約16cmで、南東に向かうにしたがってゆるやかに立ち上がる。方向は北西－南東だが、第15次調査区との調査区境付近で約45°南に折れ、第15次調査区では西－東方向に走っている。

〔覆土〕2つの層に分けられる。ほぼ水平に堆積しているが、自然堆積と考えられる。

〔壁・底面〕壁は、外傾しながらゆるやかに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、断面形はU字形を呈している。

遺　物　出土していない。

時　期　奈良時代8世紀後半には埋没していたRG97を切っており、それ以降に構築されたと考えられる。

RG 8 溝跡（第45・46図、写真図版27・29・38）

遺　構

〔位置・重複〕RG 7と同様に、並行して調査が行われた第15次調査区から延びてきたものである。第15次調査区でも調査区外の西に延びている。間に未調査部分があるため接続は確認できないが、方向から第1次調査で検出されたRG 8に続くものと考え、RG 8とした。同じように第1次調査区・第15次調査区で検出されたRG 7・RG 9と平行しており、RG 8が中央を走っている。RG97・RG98・RG101と重複している。覆土の堆積状況から、RG97・RG98・RG101を切っており、RG 8が新しい。

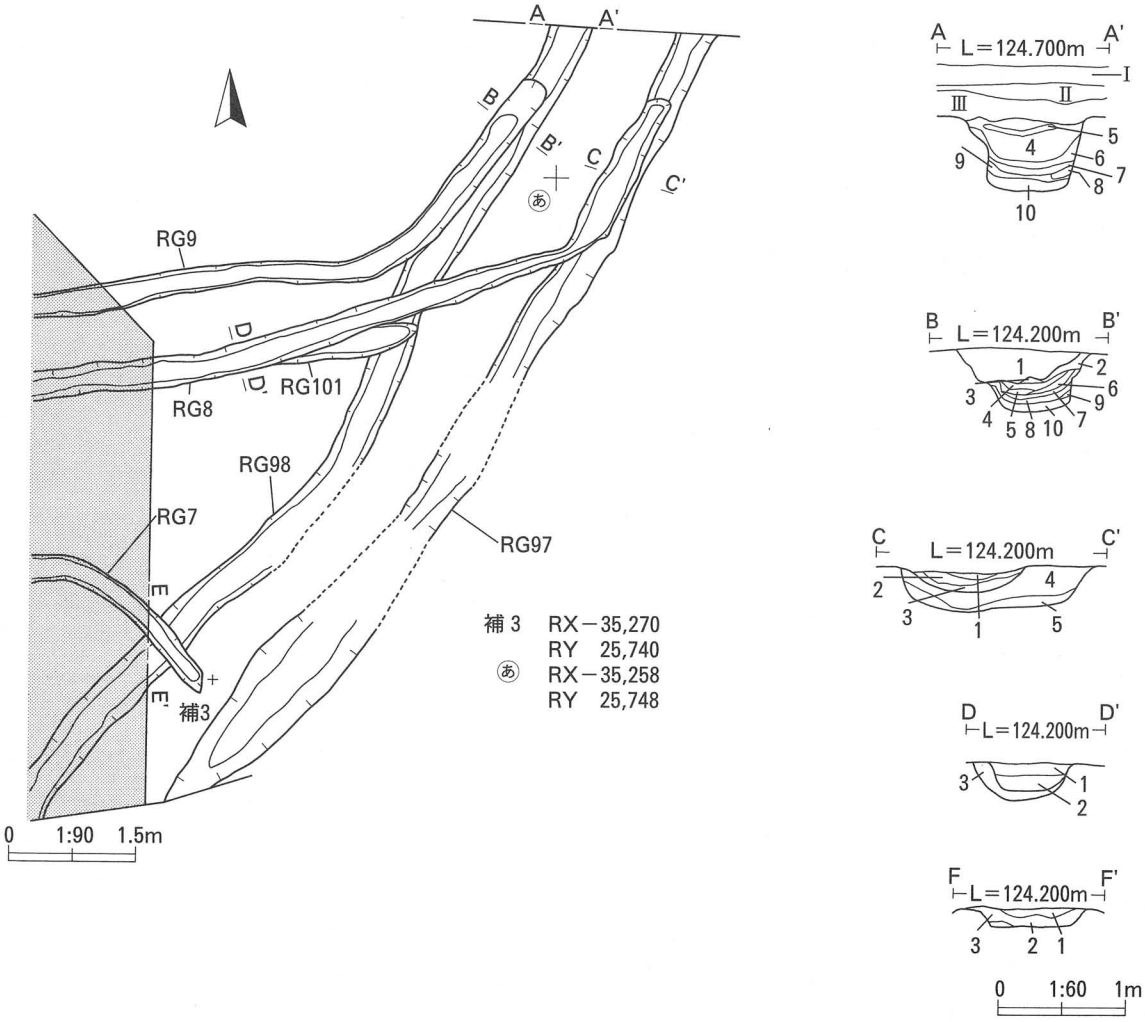
〔規模・方向〕第14次調査区分だけで、長さ8.1mを測る。幅は、開口部で0.4m、底面で0.3m、深さは約15～20cmである。方向は、第15次調査区では西－東に走っているが、RG98の手前でわずかに北に折れた後、RG97と重複する部分でさらに折れて北に向かっている。

〔覆土〕2つの層にわけられる。ほぼ水平に堆積しているが、自然堆積と考えられる。

〔壁・底面〕壁は、外傾しながらゆるやかに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、断面形はU字形を呈している。

遺　物　土師器が0.5kg出土しており、うち6点を図化した。93以外はすべて埋土上層から出土したものである。88～93は土師器坏である。90は、体部が内湾しながら立ち上がりるが、上半で外反して口縁に至る。91は精製した胎土が使用されており、焼成も良好である。体部～底部の外面に煤と考えられる黒色の付着物が見られる。93の内面は黒色処理を施されている。非ロクロ調整で、底部はほぼ平底である。

時　期　奈良時代8世紀後半には埋没していたRG97を切っていることと出土遺物から平安時代9世紀後半に位置づけられる。



RG98（A-A'）

番号	色調	しまり	粘性	
Ⅰ	10YR2/1黒色	密	やや弱	表土
Ⅱ	10YR3/1黒褐色	密	やや弱	表土
Ⅲ	10YR2/2黒褐色	やや密	やや弱	表土
4	10YR3/3黒褐色	やや密	やや弱	
5	10YR3/1黒褐色	やや密	やや弱	
6	10YR3/1黒褐色	やや密	弱	
7	10YR3/1黒褐色	やや密	弱	
8	10YR3/1黒褐色	疎	弱	
9	10YR3/1にぶい黄褐色	やや疎	弱	
10	10YR2/1黒色	やや密	弱	

RG 9・98（B-B'）

番号	色調	しまり	粘性	
1	10YR3/1黒褐色	密	やや弱	RG 9の覆土
2	10YR2/1黒色	密	弱	RG 9の覆土
3	10YR3/2黒褐色	やや密	弱	RG 9の覆土
5	10YR2/2黒褐色	やや密	やや弱	RG98の覆土
6	10YR6/6明黄褐色	やや密	弱	RG98の覆土
7	10YR2/1黒色	やや密	弱	RG98の覆土
8	10YR3/3暗褐色	疎	弱	RG98の覆土
9	10YR4/3にぶい黄褐色	やや疎	弱	RG98の覆土
10	10YR2/1黒色	やや密	弱	RG98の覆土

RG97（C-C'）

番号	色調	しまり	粘性	
1	10YR2/2灰黄褐色土	やや密	弱	RG 8の覆土
2	10YR3/3暗褐色	やや密	弱	RG 8の覆土
3	10YR3/2黒褐色	やや密	弱	RG 8の覆土
4	10YR2/2黒褐色	やや密	やや弱	RG97の覆土
5	10YR3/2黒褐色	やや密	やや弱	RG97の覆土

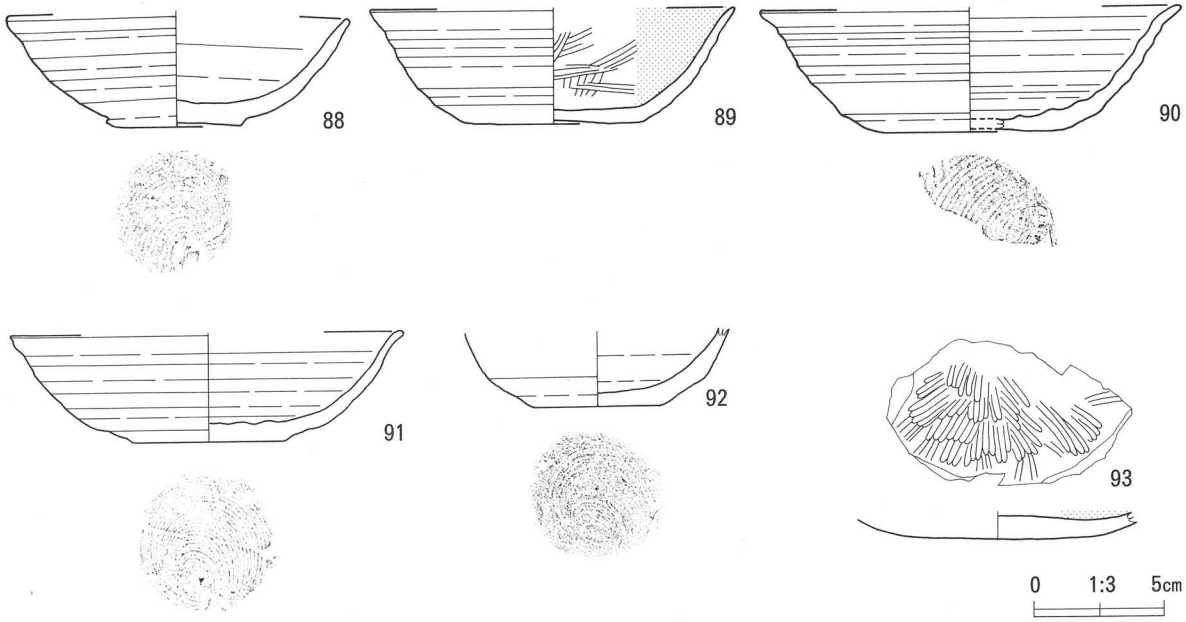
RG 8・101（D-D'）

番号	色調	しまり	粘性	
1	10YR4/2灰黄褐色	やや密	弱	RG 8の覆土
2	10YR3/3暗褐色	やや密	弱	RG 8の覆土
3	10YR3/2黒褐色	やや密	弱	RG101の覆土

RG 7（E-E'）

番号	色調	しまり	粘性
1	10YR2/3黒褐色	やや密	弱
2	10YR2/2黒褐色	やや疎	弱
3	10YR2/3黒褐色	やや疎	弱

第45図　RG 7・8・9・97・98・101



第46図　RG 8 出土遺物

RG 9 溝跡（第45図、写真図版27）

遺　構

〔位置・重複〕RG 7 ・RG 8 と同様に、並行して調査が行われた第15次調査区から延びてきたものである。15次調査区でも調査区外の西に延びている。間に未調査部分があるため接続は確認できないが、方向から第１次調査で検出されたRG 9 に続くものと考え、RG 9 とした。同じように第１次調査区・第15次調査区で検出されたRG 7 ・RG 8 と平行しており、RG 9 が一番北を走っている。RG98と重複しており、覆土の堆積状況からRG 9 がRG98を切っている状況が確認でき、RG 8 が新しく、RG98が古い。

〔規模・方向〕第14次調査区だけで、長さ4.9mを測る。幅は、開口部で0.3m、底面で0.25m、深さは約15cmである。方向は、第15次調査区では西－東に走っているが、RG98の手前で北東に折れている。

〔覆土〕３つの層にわけられる。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

〔壁・底面〕壁は、ややきつく外傾しながら立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、断面形はＵ字形を呈している。

遺　物　出土していない。

時　期　奈良時代８世紀後半には埋没していたRG97を切っているので、それ以降に構築されたと考えられる。

RG97 溝跡（第45・47図、写真図版28・39）

遺　構

〔位置・重複〕北は調査区外から延び、南も調査区外へ続く。ただし、調査区境手前で底面が立ち上がりはじめているので、それほど長くは延びていないと考えられる。RG 8 ・RA65・RA66 と重複している。覆土の堆積状況から RG 9 が RG97 を切っている状況が確認でき、RG 8 が新しく、RG97 が古い。また、RA65・RA66 にも切られており、RA65・RA66 が新しく、RG97 が新しい。

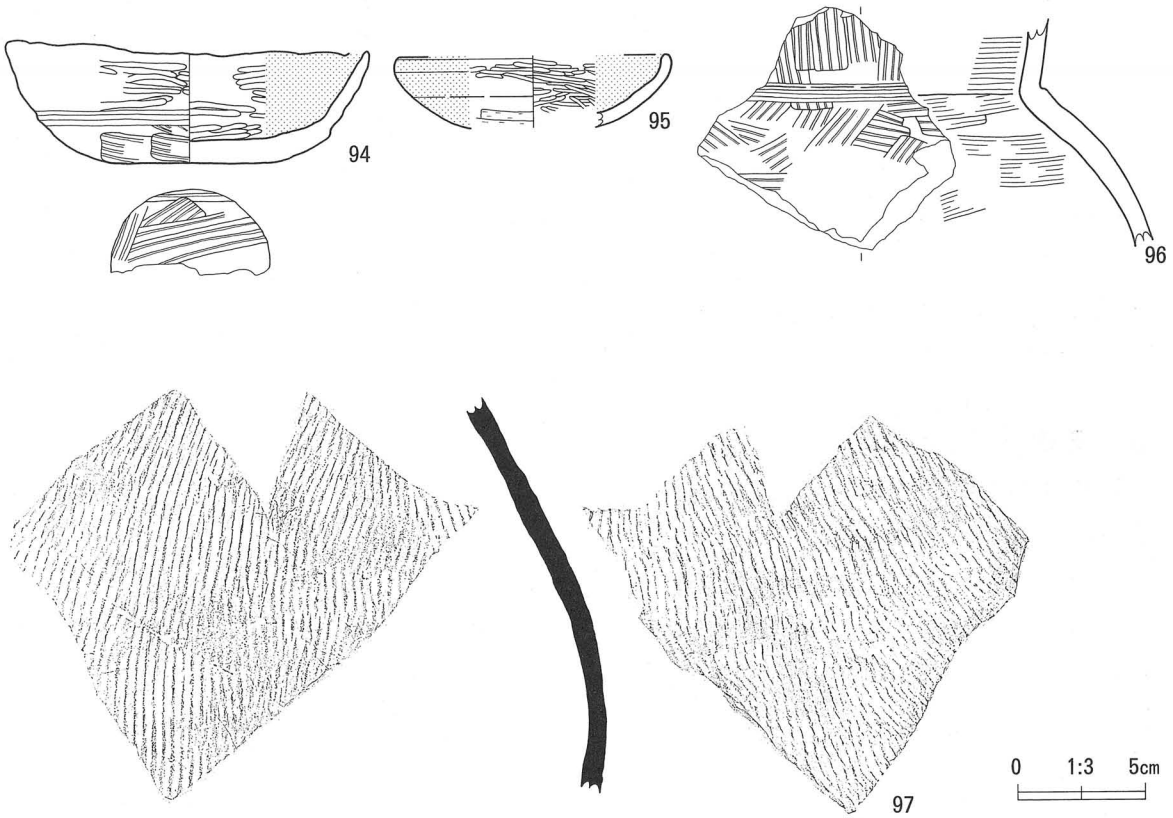
〔規模・方向〕第14次調査区だけで、長さ10.6mを測る。幅は、開口部で0.4～0.9m、底面は0.2～0.5m、深さは約75cmである。方向は、RG98 と平行しつつ北東－南西に走っている。

〔覆土〕 3 つの層にわけられる。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

〔壁・底面〕壁は、ややきつく外傾しながら立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、断面形はU字形を呈している。

遺　物　土器が2.1kg出土しており、そのうち 4 点を図化した。94・95は土師器坏である。94は調整にロクロが使用されていないもの。内面は黒色処理が施されている。外面は、底部がハケメによる器面調整が施されており、体部には段が見られ、ほぼ平底である。焼成は良好とは言い難いが、かなり密な胎土が使用されており、重量感に富む。96は土師器甕の破片である。非ロクロ調整の球胴甕と推測される。97は須恵器大甕の破片である。

時　期　出土した遺物と遺構の重複関係から、奈良時代 8 世紀後半に属すると考えられる。



第47図　RG97出土遺物

RG98 溝跡（第45図、写真図版28）

遺　構

〔位置・重複〕北は調査区外から延び、南も調査区外へ続く。RG 7 ・RG 8 ・RG 9 ・RG101・RA66 と重複している。覆土の堆積状況から RG 9 が RG98 を切っている状況が確認でき、RG 9 が新しく、RG98 が古い。また、RG 7 ・RG 8 ・RG101・RA66 にも切られており、RG 7 ・RG 8 ・RG101・RA66 が新しく、RG98 が古い。

〔規模・方向〕第14次調査区だけで、長さ11.2mを測る。幅は、開口部で0.4～0.6m、底面は0.3～0.4m、深さは約90cmである。方向は、RG97 と平行しつつ北東－南西に走っている。

〔覆土〕 8 つの層にわけられる。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

〔壁・底面〕壁は直立する。底面はほぼ平坦で、断面形はU字形を呈する。

遺　物　土師器が0.1kg出土しているが、破片のためいずれも図化していない。

時　期　時期を特定しうる遺物は出土していないが、平安時代10世紀前半に位置づけられる RA66 に切られており、それ以前に構築されていたと考えられる。

RG101 溝跡（第45図、写真図版27・29）

遺　構

〔位置・重複〕 6Ｏ5ｕグリッドに位置し、RG 8 ・RG98と重複している。覆土の堆積状況から、RG 8 が RG101 を切っている状況が確認でき、RG 8 が新しく、RG101 が古い。また、RG98 を切っており、 3 つの遺構の新旧関係は RG98 → RG101 → RG 8 となる。

〔規模・方向〕ほとんど RG 8 と重複しているので、長さは1.5mが残存するのみである。幅は、開口部が0.3m、底面が0.2m、深さは約40cmである。方向は西－東に走っていたと推測される。

〔覆土〕 1 つの層が確認されるのみで、堆積は自然堆積なのか人為的に埋め戻されたのかは不明である。

〔壁・底面〕壁はゆるやかに外傾しながらたちあがり、底面はほぼ平坦である。

遺　物　出土していない。

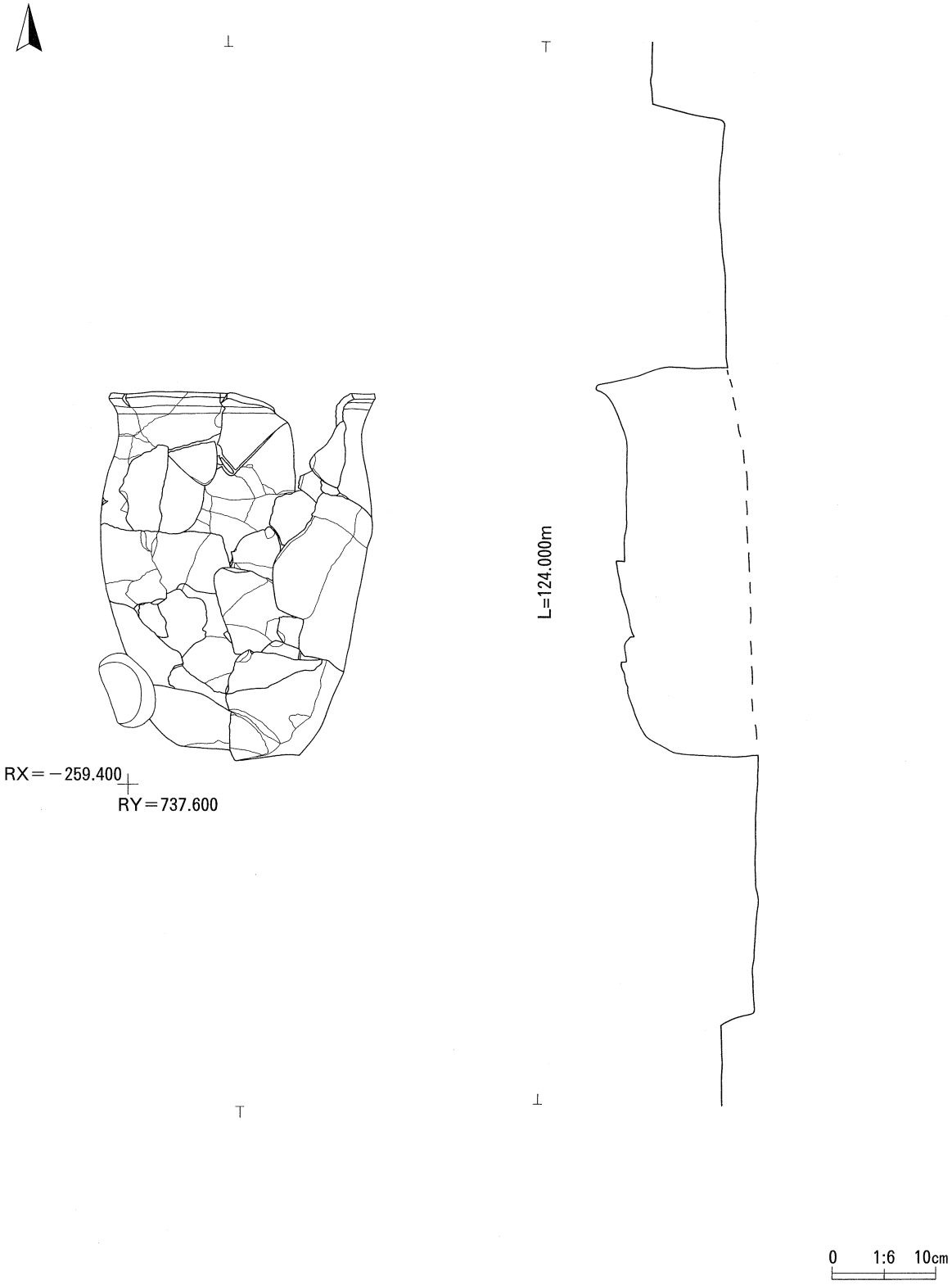
時　期　時期を特定しうる遺物は出土していないが、平安時代 9 世紀後半に位置づけられるRG 8 に切られていることから、それ以前に構築されたものと考えられる。

6．その他の遺構

RZ12土器埋設遺構

遺　構（第48図、写真図版31）

６Ｏ０ｐグリッドに位置する。南区の表土を重機により除去した後、人力にて掘り下げた際に検出されたものである。土師器甕が口を北に向け、つぶれて横倒しの状態で出土した。後述の刻書は下向きだった。甕の周囲に掘り込みがあることを予想して、さらに掘り下げたが、明確な堀方は検出されなかった。ただ、周囲は黒褐色土がシミ状に広がっており、浅い掘り込みがあった可能性がある。このことと、109には刻書が施されていることから、何らかの所作が行われた跡と考え、それに関する遺構と判断した。

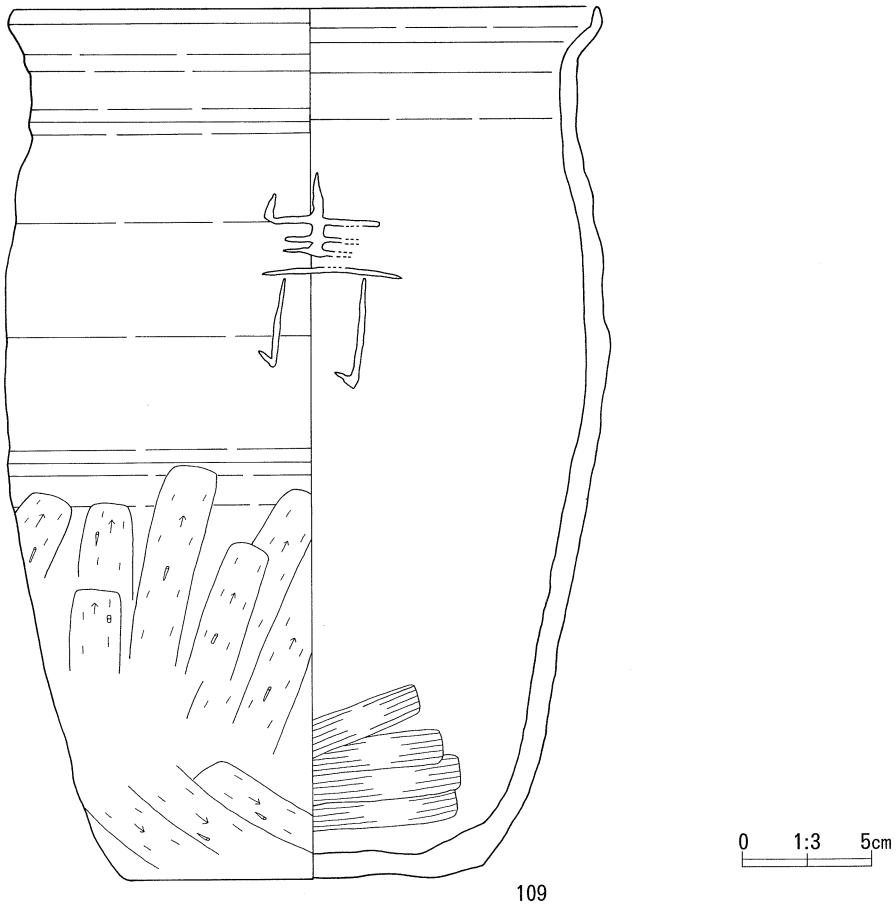


第48図　RZ12

遺　物（第49図、写真図版14・39）

109は土師器甕である。ロクロを用いて調整されており、体部の下半にはヘラケズリによる器面調整が施されている。口径23.0cm、胴部最大径23.4cm、底径14.2cmと、寸胴である。口縁は、体部からほぼ直立気味に立ち上がり、外反した後、わずかに中心に向かってつまみ出されている。外面・内面ともに煤などの付着物が見られないことから、甕として使用されたものではないと考えられる。また、体部外面に正位にて「生万」と刻まれている。刻書は凹部の観察から焼成後に施されたものと判断される。

時　期　後述するとおり109が9世紀末～10世紀初頭に編年されることから、当該期に属すると考えられる。

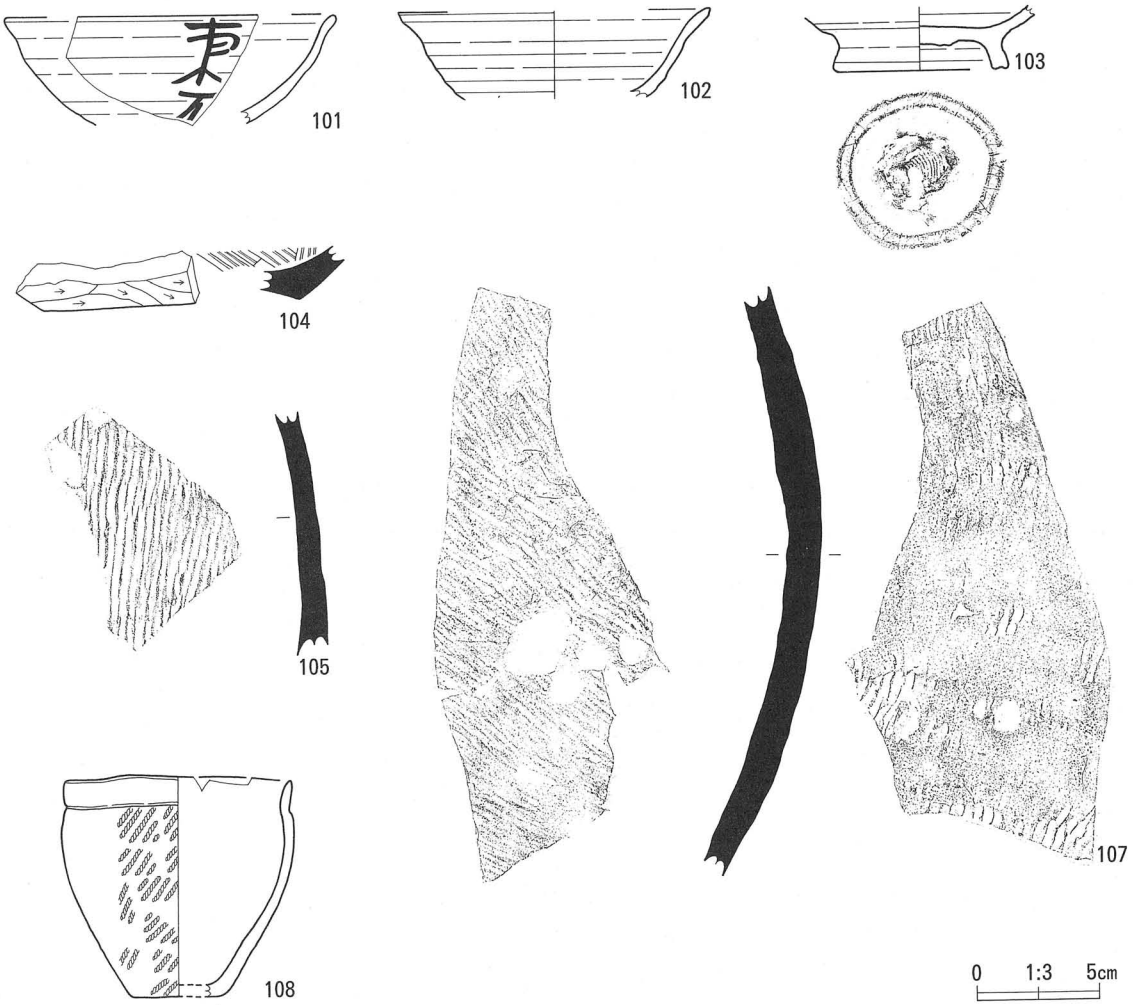


第49図　RZ12出土遺物

7．遺構外出土遺物（第50図・写真図版39）

〔出土状況〕表土除去前の試掘トレンチ及び遺構検出面から縄文土器（0.7kg）と土師器（5.8kg）・須恵器（0.6kg）が出土している。図示していないが、他に剥片石器が出土している。これらの石器は、縄文土器が出土していること、縄文時代の遺跡である熊堂Ａ遺跡が隣接していることから、縄文時代晩期に属するものと考えられる。

〔土器〕101・102は、土師器坏の口縁部の破片である。ともにロクロを用いて調整されており、内面・外面ともにロクロナデ以外の器面調整は認められない。また、精製された胎土が使用され、焼成も良好である。101の体部外面には正位にて「東□」と記されている。102の体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり、やや外反した後、端部に至る。103は、土師器高台付坏である。底部中央に回転糸切り痕がわずかに確認され、その周辺はその部分より凹んでいることから、高台は後から貼り付けられたものと考えられる。104は須恵器の破片である。底部の一部が残存するだけで、器種は不明である。外面はヘラケズリ、内面はハケメの器面調整が確認できる。焼成は良好である。108は縄文土器の小形甕である。隣接する熊堂Ａ遺跡でも同様なものが出土していることから、晩期のものと考えられる。



第50図　遺物外出土遺物

Ⅶ　まとめ

1．遺構

（1）竪穴住居跡

検出状況・重複関係　検出はⅢ層の下位とⅣ層の上位で行った。残存壁高からすれば、後世の削平などにより、本来の構築面よりは低い位置で検出していると考えられる。ただし、Ⅲ層の上位やⅡ層では奈良・平安時代の遺構は検出していない。検出した6棟については、ほぼその全形を調査しているが、竪穴住居同士の切り合い関係はなかった。ただし、奈良時代と考えられる北区のRA64は別にして、平安時代のRA62とRA63、RA65とRA66とは隣接しており、同時に存在していたとは考えにくい。少なくともRA62とRA63、RA65とRA66の間には時間差があったと想定すべきであろう。

平面形・規模・主軸　一部削平されたRA64以外すべて隅丸方形を呈している。その中でもゆがみのあまりないもの（RA62・RA66）と一部ゆがみがあるもの（RA63・RA65）とに分かれる。規模は、軸長を乗じたものをおおまかな床面積とした場合、RA62は21.1㎡、RA63は16.0㎡、RA64は推定27.5㎡、RA65は9.0㎡、RA66は11.6㎡、RA68は10.0㎡である。おおむね中形（RA62・RA63）ないしは小形（RA65・RA66・RA68）に分類される（規模の分類については八木1998・西野1998を参考にした）。従来、現在の北上盆地北部の古代集落は、7～8世紀代では大形住居のまわりに中・小形住居が配されるという構造をとっていたが、志波城・徳丹城などのいわゆる城柵官衙が造営された平安時代になると住居が小形・均一化する傾向が指摘されている（西野1998）。今次調査で検出された竪穴住居跡は中形ないしは小形に分類され、大形のものは奈良時代のRA64の1棟である。狭い範囲における調査の成果であるが、上の西野の指摘を確認し得たといえるだろう。主軸方向は、RA64が北西である他は、すべて南東ないしは東である。奈良時代に属する住居が北西方向、平安時代に属する住居が南東方向と主軸を揃えているようである。これについても、同じ事が従来から指摘されており（西野1998）、これまでの熊堂B遺跡で検出された竪穴住居跡でも同様の傾向が認められる。

壁　残存する壁高は10～30cmで、程度の差はあると考えられるが、いずれも後世の削平を受けているいると考えられる。壁は直立するものと外傾するものとにわかれるが、外傾するといってもやや傾斜する程度で、ほぼ直立しているといってもよい。壁際に溝がめぐっているものはRA64のみで、他の住居跡には確認されていない。RA64は奈良時代に属し、他は平安時代のものであることから、今次調査に限ってみれば壁溝は奈良時代に属する住居のみに構築されていたようである。

床面　RA64以外の住居跡では貼床が見られた。貼床が施されたもののうち、地山に小礫が多く含まれる地区のRA62・RA63では浅く掘り込んでから、その他の住居跡は深く掘り込んでから厚く貼床が施されている。

柱穴　RA65・RA66以外では床面に小ピットが確認された。RA64の3つの小ピットはその配置や深さがほぼそろっていることから、これらには上屋を支える柱穴が据えられていたものと考えられる。それ以外のRA62・RA63・RA68で検出されたピットは、RA64の3つの小ピットのように規則的に配置されているわけではないことから、柱穴が据えられていたとは考えにくい。ただし、特にRA62・RA63が位置する場所には地山に小礫が多く含まれ、床面を検出した時点で小礫が露頭するような状況だった。このことから、床面精査時に柱穴となるようなピットを見落としていた可能性もある。けれども、これらの住居はほとんどが

小形に属すことから、上屋も大規模なものでなく重量もそれほどあったとは考えにくく、浅い掘り込みに柱を立てるだけで間に合わせたことも想定される。これらの住居跡で柱穴が検出されなかったのはそうしたことに起因しているとも考えられる（(財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2002aでは床面積20㎡を境として、それ以上に広い住居に柱穴を見い出せる傾向にある、としている（p74))。

カマド　検出された6棟ですべて確認された。それぞれには作り替えの痕跡はなく、1棟につき1基ずつ検出されている。削平により袖および天井の様相がわからないRA64以外のカマドについては、天井部はすべて崩落している。袖部については、破壊されているRA66以外は残りが悪いものの残存している。

（2）土坑

合計10基が検出されている。少量の土器・鉄製品が出土しているが、土坑の性格を決定するようなものはみられない。いずれの覆土も自然堆積の状況を呈しており、人為的に埋め戻されたものはない。また、配置も他の遺構と有機的に関連しているわけではないようである。以上のことからこれらの土坑の性格は現時点では不明とせざるを得ない。

（3）溝

合計6条が検出されている。遺物は、数点の土器以外ほとんど出土していない。RG7・8・9は第15次調査区からのびているもので、当区では東西に並走しているが、第14次調査区においてRG7・8が北に、RG9が南に屈曲している。これら3条からは遺物が多く出土しているわけでもなく、竪穴住居跡などの遺構と有機的に配置されているのではないようである。したがって、その性格については不明である。

RG97・98は調査区を南北に走る溝で、出土した土器から奈良時代のものと考えられる。いずれもしっかりと掘りこまれているが、水が流れた痕跡は確認されなかった。第15次調査区ではこの溝から離れ、溝と同じ奈良時代の竪穴住居跡が検出されている。同時期に存在していたとすれば、これら2条の溝は集落内部を区画する機能を有していた可能性も考えられる。

2．遺　物

（1）土器

第14次調査において出土した土器は、土師器（坏・高台付坏・甕)、須恵器（大甕・壺）である。そのうち土師器の坏と甕とが大部分を占める。図化した個体数は、土師器坏が60点、同高台付坏11点、同甕が21点、須恵器坏が1点、同壺が1点、同大甕が9点（ただし、破片数である)、器形不明の須恵器が2点、縄文土器が1点、合計106点である。ほとんどが竪穴住居跡の覆土から出土したもので、土坑や溝から出土したものはそれほど多くない。また、竪穴住居跡の床面から出土したものもそれほど多いわけではない。

ここでは出土した土器ののうち、比較的数量の多い坏と甕について分類を行う。まず、器面調整にロクロが使用されているか否かを基準に、使用していないものをⅠ群、使用しているものをⅡ群と大別した。次にそれぞれの群の中で器形に基づいて中分類を行なった。さらに、全体的形態や細部の形状よって細かく分類した。その際、八木光則氏による志波城跡出土土器の分類（八木1981)、同じく盛岡市周辺遺跡出土土器の分類（八木1993)、伊藤博幸氏による岩手・宮城両県出土土師器の分類（伊藤1989・1990)、羽柴直人氏による土師器甕の分類（羽柴2000）を参考にしている。

Ⅰ群；ロクロを使用していないもの。土師器の坏（A）と甕（B）にわけられる。

ⅠAは、底部の形状によって次の2つに分けた。

a；丸底と平底の中間のもの

b；平底のもの

ＩＢは、頸部から口縁部にかけての形状から次の２つに分類した。

a；口縁部が外反し、頸部に段が見られるもの

b；口縁部は外反するが、１ほどきつくなく、直立気味のもの

Ⅱ群；ロクロを使用しているもの。土師器の坏（A）と甕（B）の他、須恵器（C）がある。

ⅡＡは、体部の立ち上がり方と口縁の形態によって次の４つにわけられる。

a；底部から直線的に外傾して立ち上がるもの

b；底部から内湾しながら立ち上がるもの

c；底部から内湾しながら立ち上がり、口縁が外反するもの

d；底部からいったん直立気味に立ち上がった後、内湾しながら立ち上がるもの

ⅡＢは、頸部から口縁部にかけての形状によって次の４つにわけられる。

a；口縁部が外反しするもの

b；口縁部が外反した後、端部が上方に直立気味につまみ出されているもの

ＩＡに分類されるものは、37と94である。ともに体部外面のみに段を有しており、底部はハケメによる器面調整が見られる点で共通する。ただ、94が体部の内外両面に念入りにヘラミガキが施されているのに対し、37はヨコナデである点で異なる。また、37は完全に平底となっているが、94は完全に平底化しておらず、丸底の名残が見られる。八木氏の分類にあてはめれば、37はＤ群、94はＣ群に相当すると考えられる。

ＩＢには６点が属する。そのうち、38・44・96がａに、63・64・74がｂに細分される。ａには長胴甕・球胴甕があるが、ｂには球胴甕はなく、長胴甕のみである。体部の調整はほとんどがヘラナデ・ハケメによるもので、ヘラミガキによる調整は見られない。

ⅡＡに分類されるものが最も多く、47点である。ａの特徴を有するものは５点である。また、注意される点として、これらはすべて黒色処理が施されていないことがあげられる。これがⅡＡａ群の特質なのか、それとも偶然なのかは、にわかに判断できない。今後類例の増加を待って検討が加えられるべきであろう。ｂ・ｃの特徴を持つものがこの群の中心で、それぞれ22点・17点である。いずれも、口径の大小、器高の高低、内湾の程度の差によってさらに細分され、時期差を示している可能性がある。底部の切り離しはすべて回転糸切りによってなされており、静止糸切り・ヘラ切りのものは１点もない。切り離し後に再調整が施されているものも29・47の２点のみである。黒色処理が施されているものは11点で、全体の23％を占めている。ｄとしたものは３点と最も少ない。いずれも内面に黒色処理が施されており、この点でⅡＡａと対照的である。これについても、ⅡＡａ同様、引き続き検討されるべき事柄である。

ⅡＢには６点が分類される。口縁部が単に外反するⅡＢａは18の１点で、43・45・46・65・73・109がⅡＢｂとなる。器面調整は、ほぼ完形の109の外面がロクロ調整→ヘラケズリ、内面がヘラナデによる調整を施されている。他は口縁部の破片であるため不明であるが、おそらく109と同様の調整を施されていたものと考えられる。

（2）鉄製品

第14次調査において、鉄製品は4点出土した。すべて遺構から出土したもので、3点は竪穴住居跡（RA62・66）、1点は土坑（RD126）からである。器種は刀子と釘である。前者はいわば万能的な工具で、数はそれほど多くないが、1つの集落遺跡から数点程度出土することはまれではなく、周辺の台太郎遺跡・野子A遺跡からも出土している。RD126出土の鉄製品は延べ板状を呈しているが、用途は不明である。

3．墨書土器

第14次調査では6点の墨書土器が出土している。文字が記された対象はすべて土師器で、須恵器には見られない。器形別では甕が1点の他はすべて坏である。文字の定着方法としては、墨書が4点、刻書が2点である。刻書は、焼成前と焼成後のものが1点ずつである。6点という数は、調査対象面積を考慮すれば、岩手県内の集落遺跡としては多い方といえよう。のみならず、墨書、焼成前刻書（いわゆるヘラ書き）、焼成後刻書と、すべての文字定着方法が見られる。

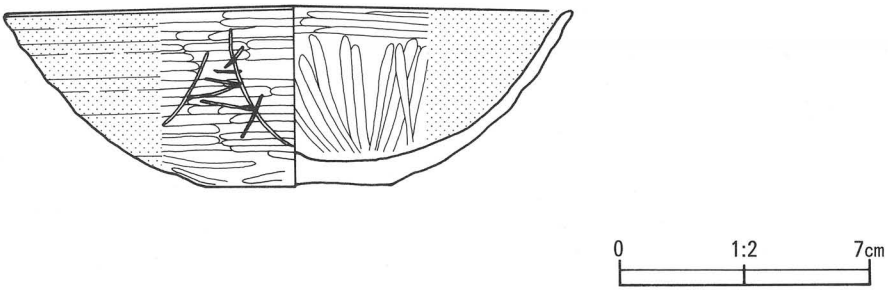
（1）RA62出土墨書土器

1号土器

釈　文　　成

墨書の特徴　土師器坏の体部外面に正位にて記されている。肉太の筆で、運筆も1画1画しっかりと記されている。形は整っているとはいえないが、稚拙な印象は受けず、文字をある程度使いこなしていた者の手によると考えられる。運筆では2画目に特徴がある。すなわち、1画目の始筆の位置からではなく、それよりやや高いところから筆を入れている（特徴1）。また、4画目も、1画目と爪のように交差するのではなく、爪と止められた所を通っている（特徴2）。さらに、6画目の点が、左上からではなく、やや右上から筆を入れていることも特徴的である（特徴3）。

墨書の内容　成という1文字から、その意味することは不明とせざるを得ない。ただし、同じ「成」字が記された土器が第4次調査区から出土している（第51図　なお、第4次発掘調査報告書所載の実測図には文字部分に一部誤りがあると思われるので、再実測して掲載した）。内外両面に黒色処理が施された坏の体部外面に正位にて記されたものである。刻書で記されたものだが、刻書部分は黒色処理が剥落していることから、焼成後のものと判断される。注意すべきは、その書体で、上に記した1号土器の特徴1～3を備えていることである。また、第4次調査区出土のものは、1号土器よりやや遡るものと考えられる。このことは、熊堂B遺跡に展開していた集落で、ある一定期間、同じ文字が土器に記され続けていたことを示していよう。



第51図　熊堂B遺跡第4次調査出土刻書土器

2号土器

釈　文　　成

墨書の特徴　1号土器と同様に、土師器坏の体部外面に正位にて、肉太の筆でしっかりと記されている。また、特徴1～3も備えていることから、同筆としてさしつかえないと考える。

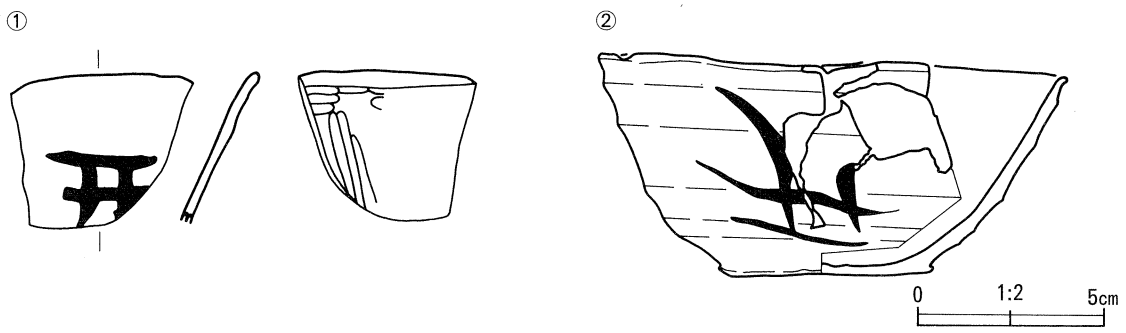
墨書の内容　1号土器と同様、その意味するところは不明とせざるを得ない。ただ、2号土器は、1号土器と同じ土師器坏だが、内面に黒色処理が施されている点で異なる。このことは、RA62に居住していた人物は土器に文字を記す場合、ある特定の特徴をもったものにではなく、手近のものですませていたことを窺わせる。

（2）RA66出土刻書土器

釈　文　　卌

刻書の特徴　土師器坏の体部外面に正位にて卌と記されている。凹部の様相と刻書に黒斑がかかっていることから、焼成前にヘラ状の工具で刻まれたものと考えられる。筆順は第28図の通りだが、第3・4画の下半の凹部の断面が⌊⌋ではなく、＼／と左側が浅く、右側が深いことから、この土器に刻書を施した人物は右手にヘラ状の工具をもって卌と刻んだものと推測される。

刻書の内容　卌は記号であろう。同様なものは他に知られないが、類似するものに爪がある。この鳥居のような記号が記されたものに、遠野市高瀬Ⅰ遺跡出土土器（第52図①）と北海道千歳市美々8遺跡出土土器（第52図②）がある。これらの記号と本事例とが有機的に関連しているかどうかは不明だが、類例として掲出しておき、後考にまちたい。



第52図　「爪」と記された墨書土器

（3）ＲＡ68出土墨書土器

釈　文　　□□

墨書の特徴　土師器坏の体部外面に横位にて記されている。カマドの支脚に使用されていたからであろう、煤の付着が所々に見られるため、いかなる文字が記されているか、またその特徴も不明である。

墨書の内容　記されている文字を判読できないため、その内容は不明である。ただし、次のことは注意される。前述のように本資料はカマドの支脚石の上に3枚重ねられた土器の2枚目として出土していることから、支脚の高さを調整するために使用されていたことになる。すなわち、文字が記されたのは、本資料が支脚に転用される前であろう。通常、墨書土器は破砕された状態で出土することが多いことから、祭祀的行為

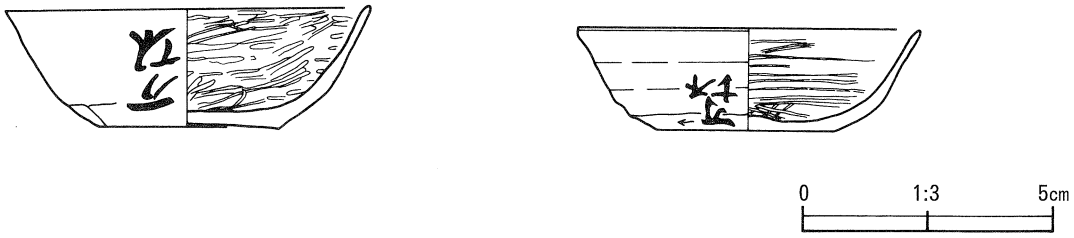
に用いられた後、意図的に割られて廃棄されると考えられている。けれども、本資料は、文字が記された後も廃棄されず、他の用途に転用されることがあり得たことを示している。今後、墨書土器として機能した直後に意図的に廃棄されたのか、他に転用された後に廃棄されたのか、見極めるためにその出土状況を厳密に把握しておく必要があろう。

（4）RZ12土器埋設遺構出土刻書土器

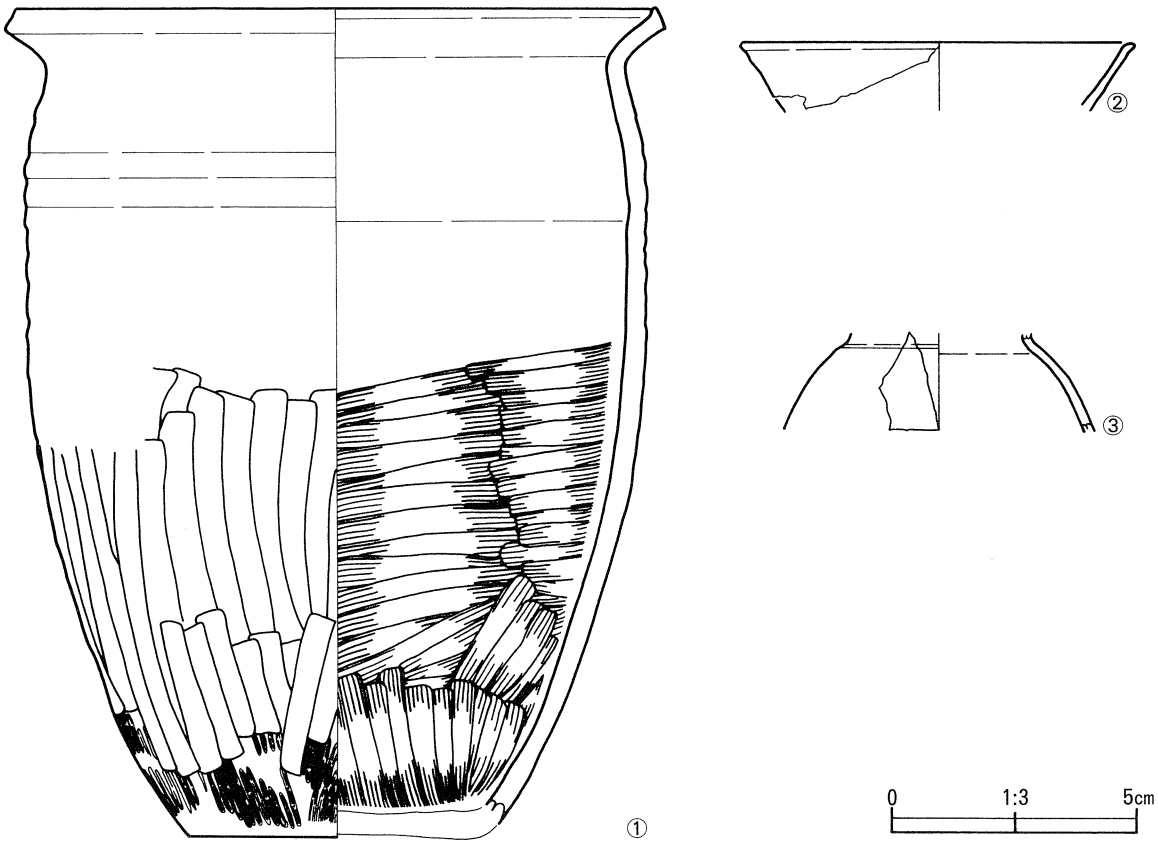
釈　文　生万

刻書の特徴　土師器甕の体部外面に正位にて記されている。凹部の様相から焼成後、釘状のもので刻まれたものと考えられる。丁と刻まれた2字目に若干問題がある。通常、万の3画目は2画目の途中から┐と記されるが、本資料の場合、1画目の右半からまっすぐ下に引かれ、最後にはねている。このままでは万と読み難いが、茨城県つくば市中原遺跡出土墨書土器の事例から「万」と判読した（第53図）。中原遺跡では「万坏」と記された墨書土器が十数点出土しているが、なかには他の「万坏」と記されたものを参照しなければ、「万坏」と判読できないものもある。これは、文字を使いこなせない者がその形のみを記憶して土器に記した場合、いかに判読すべきか苦しむような字形となるのである。つまり、本資料の2字目は文字を使いこなせない者が「万」と記そうとしたものであると考えられるのである。

刻書の内容　「生万」という2文字が意味するところについては、その出土状況を踏まえておく必要がある。前述のように、本資料は、竪穴住居跡や土坑・溝など、明確な堀方を伴わず、遺構検出面にて単独で出土したものである。ただし、掘方が明確でなかったのは、事実記載の項でも述べたように、浅く地面を掘りこんで109を設置した後、ただちに埋め戻されたか、あるいは短時間のうちに埋没したためと考えられる。また、本資料は破片が接合した完形品だが、第44図からも明らかなように、検出時においても原形をほぼ保っていた。つまり、109は何らかの所作がなされた原位置を動いていないものと考えられる。問題はその所作だが、土器の出土状況からは不明とせざるを得ない。また、刻まれた文字の内容からも、「生」も「万」も土器によく記される文字であることから、やはり具体的には不明である。さらに、「万」の字体から文字を使いこなしていた者が記したわけではないことと、ことから、なかば記号として意識されたものが記されたのであって、特に意味が付与されていたわけではないことを強調しておく。なお、時期については、109と類似する形態の土師器甕が盛岡市志波城跡SI442から出土している（第54図①）。109の口縁の方が直立気味だが類似しており、口径と底径の比率が約2：1と109と同じである。また、器面調整も同様である。志波城跡SI442からは黒笹90号窯式の緑釉陶器の破片が出土しており（第54図②・③）、9世紀第4四半期から10世紀初頭の年代観が与えられている。109の年代も同じような時期と考えて大過ないものと考えられ、9世紀末～10世紀初頭のものとしておきたい。



第53図　つくば市中原遺跡出土「万坏」墨書土器



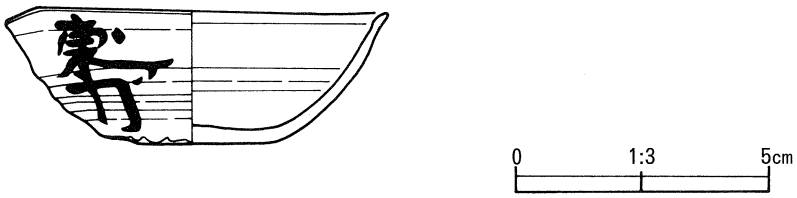
第54図　志波城跡SI442出土土器

（5）遺構外出土墨書土器

釈　文　東□

墨書の特徴　土師器坏の体部外面に正位にて記されている。やや細い筆が用いられているが、字形は整っておらず、やや稚拙な印象を持たせる。また、同じような字形で同じ文字が記されている土器が、熊堂Ｂ遺跡から西１kmに位置する小幅遺跡RA023から出土している（第55図）。

墨書の内容　判読できた「東」１文字では不明とせざるを得ない。ただ、熊堂Ｂ遺跡は９世紀初頭の約10年間、現在の岩手県北部を支配するために設置された城柵官衙である志波城の東方に位置しており、同様な墨書土器が出土した小幅遺跡も同様な立地条件である。想像をたくましくすれば、志波城から見た方位を記したとも考えられる。けれども、仮に右の想定が正しいとしても、それがいかなる機能・目的を有していたのかについては不明とせざるを得ない。



第55図　小幅遺跡出土「東口」墨書土器

4．調査の成果と今後の課題

今次調査の成果としては次の点があげられる。

（1）　合計5棟の竪穴住居跡が検出されたが、時期によって建物の占地の意識が異なることが判明した。平安時代前半の4棟は互いに接近して建てられている（ただし、同時に存在していたわけではない）。一方、奈良時代の竪穴住居跡は、並行して行われた第15次調査区まで目を広げれば、互いに離れて占地しているようである。このことから、8世紀代と9世紀代以降とでは住居を建てる際の占地の意識が異なっていたようである。

（2）　調査区の中央で検出された8世紀中ごろに構築されたと考えられる溝は、同時期の集落域を区画していた可能性がある。また、一方で9世紀以降には集落を区画するような機能を有していたと考えられる溝は検出されていないことから、集落の構造も9世紀初頭を境に変化していたようである。

今後の調査の課題としては次の点があげられる。

（1）　前述のように、8世紀代と9世紀以降とでは建物の占地の意識や集落の構造が変化していたようである。これがなぜ起きたのかについては、本遺跡のみでなく周辺の遺跡のあり方も含めて検討すべきである。すでに指摘されていることだが（第24回古代城柵官衙遺跡検討会事務局1998）、803年に志波城が造営されたことで、本遺跡を含む周辺地域に何らかの影響があったのではないか。ただし、これはあくまで現象面でのことである。今後は城柵官衙（周辺の志波城・徳丹城だけでなく10世紀にも存続する胆沢城も）との具体的な関係も視野に入れて調査すべきであろう。

（2）　今次調査で14次を数え、多くの竪穴住居跡が調査され、生活の場の様相についてはかなり判明してきたといってよいだろう。しかし、竪穴住居跡で消費される品々、例えば食料品や土器などがどこでどのように生産されていたのかについては不明な多い。今後は生産域についての調査も必要になってくると考える。

（3）　盛岡南新都市計画整備事業に伴う発掘調査は、これまで大規模に行われてきた。これは、古代の志波村のかなりの部分を面的に調査したことになる。今後は遺跡ごとではなく、それらをまとめ、志波村全体の様相を明らかにしていくべき時期に来ているといえよう。

〔参考文献〕

伊藤博幸　1989「陸奥国の黒色土師器－岩手・宮城地域－」『東国土器研究』2
1990「陸奥国における黒色土師器－その展開と終焉－」『東国土器研究』3
1997「律令期村落の基礎構造」『岩手史学研究』80
1998「後半期の集落」『岩手考古学』10
利部修　1996「北日本の須恵器についての一考察」坂詰秀一先生還暦記念会編『考古学の諸相』
高橋信雄　1985「岩手の古代集落」『日高見の国－菊池啓二郎学兄還暦記念論文集－』
西野修　1998「北上盆地北部」『第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
羽柴直人　2000「青森県内のロクロ使用土師器長胴甕について」『村越潔先生古希記念論文集』
八木光則　1981「志波城跡と周辺遺跡の土器様相」『志波城跡』Ⅰ　盛岡市教育委員会
1993「陸奥中部における古代末期の土器群」『歴史時代土器研究』8
1998「馬淵川流域」『第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
第24回古代城柵官衙遺跡検討会事務局
1998『第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
岩手県教育委員会
1982『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅢ』岩手県文化財調査報告書第68集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（集数は岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書のもの）
1995　『本宮熊堂Ｂ遺跡第１次発掘調査報告書』第226集
1996ａ『小幅遺跡第２次発掘調査報告書』第244集
1996ｂ『小幅遺跡第４次発掘調査報告書』第265集
1998　『大宮北・本宮熊堂Ａ遺跡発掘調査報告書』第281集
1999ａ『熊堂Ｂ遺跡第５次・台太郎遺跡第16次発掘調査報告書』第293集
1999ｂ『本宮熊堂Ｂ遺跡第４次・鬼柳Ａ遺跡第４次発掘調査報告書』第308集
1999ｃ『台太郎遺跡第15次発掘調査報告書』第309集
2000ａ『向中野館跡第４次・小幅遺跡第11次・台太郎遺跡第19次発掘調査報告書』第321集
2000ｂ『向中野館跡第３次・小幅遺跡第10次発掘調査報告書』第338集
2001ａ『台太郎遺跡第18次発掘調査報告書』第369集
2001ｂ「熊堂Ｂ遺跡第９次調査」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成12年度)』第370集
2001ｃ「熊堂Ｂ遺跡第11次調査」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成12年度)』第370集
2002ａ『熊堂Ｂ遺跡第10次発掘調査報告書』第377集
2002ｂ「熊堂Ｂ遺跡第13次調査」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成13年度)』第397集
都南村教育委員会
1979　『岩手県紫波郡都南村百目木遺跡－発掘調査報告書－』
（財）北海道埋蔵文化財センター
1996　『美沢川流域の遺跡群ⅩⅧ』（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書第102集
盛岡市教育委員会
1981　『志波城跡Ⅰ』
1992　『志波城跡－平成３年度発掘調査概報－』

土器観察表

番号	出土遺構	出土地点／層位	器種	外面			内面			器高	口径	底径	色調	黒色処理	分類	備考
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部							
1	RA62	／下層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.6	13.5	4.4	10YR 6／6		ⅡAc	墨書「成」、金雲母
2	RA62	／下層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ロクロナデ	5.2	14.0	5.9	10YR 7／6	○	ⅡAc	墨書「成」、金雲母
3	RA62	／－	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.3	〔14.6〕	6.0	10YR 6／6	○	ⅡAd	
4	RA62	カマド／上層	土師器・高台付坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	〔4.9〕	〔15.6〕	〔7.7〕	10YR 7／6	○	－	
5	RA62	／下層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.2	〔15.1〕	5.2	10YR 6／6		－	
6	RA62	／下層	土師器	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.2	13.1	4.2	10YR 6／4		ⅡAa	
7	RA62	カマド右貯蔵穴／上層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	4.9	13.6	5.2	10YR 6／6	○	ⅡAd	
8	RA62	／下層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.6	16.1	5.4	10YR 6／6		ⅡAb	金雲母
9	RA62	／下層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.3	13.6	5.1	10YR 6／6	○	ⅡAb	金雲母
10	RA62	／下層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.9	13.7	5.2			ⅡAc	
11	RA62	／－	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5.5	15.5	6.1	7.5YR 5／8		ⅡAb	
12	RA62	カマド／－	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	3.3	〔13.4〕	〔5.0〕	10YR 7／8		ⅡAa	
13	RA62	／－	須恵器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	3.3	10.1	4.4	10YR 6／1		ⅡC	内面に火だすき
14	RA62	／上層・下層	土師器・高台付坏	－	ロクロナデ	－	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	〔5.2〕	－	〔8.1〕	10YR 7／4	○	－	
15	RA62	／下層	土師器・高台付坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	6.4	〔14.4〕	8.0	10YR 7／6		－	金雲母
16	RA62	／床面	土師器・高台付坏	－	ロクロナデ	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	〔4.9〕	－	7.6	10YR 6／8	○	－	
18	RA62	カマド／	土師器・甕	ロクロナデ	ロクロナデ	－	ロクロナデ	ロクロナデ	－	〔12.4〕	〔14.4〕	－	5 YR 5／8		ⅡBa	
19	RA62	カマド燃焼部／	土師器・甕	－	ヘラケズリ	－	－	ハケメ	－	〔14.9〕	－	〔15.0〕	10YR 7／8		－	
20	RA62	／上層・下層	土師器・甕	－	－	回転糸切	－	ロクロナデ	ロクロナデ	〔4.1〕	－	〔7.0〕	7.5YR 5／8		－	
21	RA63	／上層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.8	14.2	5.1	10YR 6／8		ⅡAb	
22	RA63	／上層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5.0	14.1	4.0	10YR 8／6		ⅡAa	
23	RA63	／上層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	〔4.4〕	－	6.4	10YR 6／6		－	
24	RA63	／上層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	〔3.5〕	－	5.8	10YR 8／6		－	
25	RA63	／上層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5.4	〔13.2〕	〔6.2〕	7.5YR 6／8		ⅡAb	
26	RA63	／上層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.4	〔14.2〕	〔7.0〕	5 YR 5／6		ⅡAd	
28	RA63	／上層	土師器・坏	－	ロクロナデ	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	〔4.3〕	－	〔5.8〕	10YR／6		－	
29	RA63	／上層	土師器・坏	－	ロクロナデ	回転糸切	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	〔4.2〕	－	5.6	10YR 6／8		－	
30	RA63	／上層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5.1	〔14.0〕	5.7	7.5YR 6／8		ⅡAb	
31	RA63	／上層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	3.4	〔12.9〕	4.8	10YR 8／4		ⅡAc	
32	RA63	／上層・床面	土師器・坏	－	ロクロナデ	回転糸切	－	ロクロナデ	ロクロナデ	〔5.4〕	－	5.4	10YR 6／6		－	金雲母
33	RA63	／上層	土師器・高台付坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5.9	15.3	〔9.4〕	10YR 6／6		－	金雲母
34	RA63	／上層	土師器・甕	－	ロクロナデ・ヘラケズリ	－	－	ハケメ	－	〔12.0〕	－	9.8	10YR 7／6		ⅡC	
35	RA63	／上層	須恵器・大甕	－	タタキメ	－	－	タタキメ	－	－	－	－	10YR 3／1		ⅡC	
36	RA63	／下層	須恵器・大甕	－	タタキメ	－	－	タタキメ	－	－	－	－	10YR 3／1		ⅡC	
37	RA64	／床面	土師器・坏	ヘラミガキ	ヨコナデ	ハケメ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.0	16.1	－	10YR 6／6	○	ⅠAb	
38	RA64	／床面	土師器・甕	ヨコナデ	ヘラナデ	－	ヨコナデ	ハケメ	－	〔12.9〕	〔17.7〕	－	5 YR 6／8		ⅠBa	
39	RA65	／下層	土師器・坏	ヘラナデ	ヘラナデ	回転糸切	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	5.2	15.1	5.7	10YR 8／6		ⅡAc	
40	RA65	／下層	土師器・坏	ヘラナデ	ヘラナデ	回転糸切	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	4.4	13.9	5.4	10YR 5／2		ⅡAc	
41	RA65	／下層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5.5	14.9	5.3	10YR 7／6		ⅡAc	
42	RA65	／下層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.6	〔15.5〕	5.6	5 YR 7／8		ⅡAb	
43	RA65	カマド袖／	土師器・甕	ロクロナデ	ロクロナデ	－	ロクロナデ	ロクロナデ	－	〔10.9〕	〔19.5〕	－	10YR 7／8		ⅡBb	
44	RA65	／下層	土師器・甕	ヨコナデ	ヘラナデ	－	ヨコナデ	ハケメ	－	〔6.2〕	〔17.0〕	－	7.5YR 6／8		ⅡBa	
45	RA65	／下層	土師器・甕	ロクロナデ	ロクロナデ	－	ロクロナデ	ロクロナデ	－	〔6.3〕	〔13.0〕	－	10YR 7／8		ⅡBb	
46	RA65	／下層	土師器・甕	ロクロナデ	ロクロナデ	－	ロクロナデ	ロクロナデ	－	〔3.9〕	〔18.0〕	－	10YR 5／2		－	
47	RA66	／下層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5.9	15.8	5.8	10YR 7／8		ⅡAc	刻書（焼成前）
48	RA66	／上層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.9	14.8	5.4	10YR 8／6		ⅡAb	
49	RA66	／下層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.6	〔14.5〕	5.8	7.5YR 8／8		ⅡAc	
50	RA66	／下層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.2	14.4	6.4	10YR 8／4	○	ⅡAd	
51	RA66	／下層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.7	14.2	6.0		○	ⅡAb	
52	RA66	／中層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.8	〔13.4〕	5.5	10YR 7／8		ⅡAa	
53	RA66	／中層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.3	〔14.2〕	4.8	10YR 8／4		ⅡAb	
54	RA66	カマド／	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5.1	〔14.8〕	〔5.6〕	7.5YR 7／8		ⅡAb	
55	RA66	カマド／	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.1	〔13.4〕	6.0	10YR 8／4		ⅡAb	
56	RA66	／上層	土師器・坏	－	ロクロナデ	回転糸切	－	ロクロナデ	ロクロナデ	〔3.9〕	－	6.0	10YR 6／6		－	

番号	出土遺構	出土地点／層位	器種	外面			内面			器高	口径	底径	色調	黒色処理	分類	備考
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部							
57	RA66	カマド／	土師器・甕	—	—	—	—	—	ヘラナデ	〔1.5〕	—	—	10YR 7 ／ 6		—	砂底土師器
58	RA66	カマド／	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	〔4.3〕	—	5.6	7.5YR 5 ／ 8		Ⅱ Ac	
59	RA66	／床面	土師器・高台付坏	—	—	—	—	—	ロクロナデ	〔2.6〕	—	8.2	2.5YR 5 ／ 8		—	
60	RA66	／下層	土師器・高台付坏	—	—	—	—	—	ロクロナデ	〔3.0〕	—	7.1	10YR 7 ／ 6		—	
61	RA66	／—	土師器・甕	—	ハケメ	—	—	ハケメ	ハケメ	〔5.0〕	—	12.0	7.5YR 5 ／ 5		—	木葉痕
62	RA66	／上層	土師器・甕	—	ヘラミガキ	-	—	—	—	〔6.6〕	—	〔12.0〕	10YR 6 ／ 8		—	
63	RA66	／中層	土師器・甕	ヨコナデ	ヘラナデ	—	ヨコナデ	ヘラナデ	—	〔7.1〕	—	〔14.8〕	10YR 6 ／ 6		Ⅰ Bb	
64	RA66	／上～中層	土師器・甕	ヨコナデ	ヘラナデ	—	ヨコナデ	—	—	〔7.0〕	—	〔15.8〕	5 YR 6 ／ 8		Ⅰ Bb	
65	RA66	／中層	土師器・甕	ヨコナデ	—	—	ヨコナデ	—	—	〔8.7〕	—	—	7.5YR 8 ／ 6		—	
66	RA66	／—	須恵器・大甕	—	タタキメ	—	—	タタキメ	—	—	—	—	10YR 5 ／ 1		Ⅱ C	
67	RA66	／中層	須恵器・大甕	—	タタキメ	—	—	タタキメ	—	—	—	—	10YR 5 ／ 1		Ⅱ C	
68	RE11	／上層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.8	14.8	〔6.3〕			Ⅱ Ab	
69	RE11	／上層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.9	〔14.2〕	5.4	10YR 6 ／ 8		Ⅱ Ab	
70	RE11	／上層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5.4	〔14.0〕	〔6.4〕	7.5YR 5 ／ 8		Ⅱ Ac	金雲母
71	RE11	／上層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.3	〔14.2〕	〔5.0〕	10YR 7 ／ 6	○	Ⅱ Ac	
72	RE11	／上層	土師器・高台付坏	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	6.0	〔15.6〕	〔8.1〕	—	◎	—	底部外面に放射状痕跡
73	RE11	カマド／	土師器・甕	ロクロナデ	—	—	ロクロナデ	—	—	〔9.0〕	〔20.6〕	—	10YR 8 ／ 6		Ⅱ Bb	
74	RE11	／上層	土師器・甕	ヨコナデ→ヘラケズリ	ヘラケズリ	—	ヨコナデ	ヘラナデ	—	〔10.1〕	〔11.6〕	—	10YR 7 ／ 8		Ⅰ Bb	
75	RA68	／下層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5.0	13.6	5.0	10YR 7 ／ 8		Ⅱ Ab	
76	RA68	／中層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5.1	13.6	5.4	10YR 5 ／ 4		Ⅱ Ab	
77	RA68	／下層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.6	14.0	4.8	10YR 6 ／ 6		Ⅱ Aa	金雲母
78	RA68	カマド燃焼部／	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5.5	13.4	6.2	10YR 5 ／ 3		Ⅱ Ab	
79	RA68	カマド燃焼部／	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5.7	13.6	5.5	10YR 6 ／ 6		Ⅱ Ab	金雲母
80	RA68	カマド燃焼部／	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5.6	〔12.1〕	4.8	10YR 7 ／ 6		Ⅱ Ab	墨書あり
81	RA68	／上層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.6	〔13.8〕	4.7	10YR 6 ／ 6	○	Ⅱ Ab	金雲母，底部再調整
82	RA68	／上層・床面	土師器・高台付坏	ロクロナデ	ロクロナデ	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	7.0	15.3	9.2	10YR 6 ／ 6		—	
83	RA68	／床面	土師器・甕	—	—	回転糸切	—	ロクロナデ	ロクロナデ	〔7.8〕	〔7.2〕	—	5 YR 6 ／ 8		—	
84	RA68	／下層	須恵器・壺	—	ロクロナデ	—	—	ロクロナデ	—	〔8.5〕	—	—	10YR 7 ／ 1		Ⅱ C	
85	RA68	／床面	須恵器・甕？	—	ヘラナデ	—	—	ロクロナデ	—	〔8.0〕	—	—	10YR1.7／ 1		Ⅱ C	
86	RA68	／床面	須恵器・大甕	ロクロナデ	タタキメ	—	ロクロナデ	タタキメ	—	〔10.8〕	〔22.0〕	—	10YR1.7／ 1		Ⅱ C	
87	RA68	／上層	須恵器・大甕	—	タタキメ	—	—	タタキメ	—	—	—	—	10YR 4 ／ 1		Ⅱ C	
88	RG 8	／上層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.6	〔13.5〕	5.3	10YR 6 ／ 6		Ⅱ Ab	
89	RG 8	／上層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.6	〔14.2〕	6.8	7.5YR 7 ／ 8		Ⅱ Ac	金雲母
90	RG 8	／上層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.9	〔16.5〕	〔7.0〕	10YR 7 ／ 6		Ⅱ Ac	
91	RG 8	／上層	土師器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.3	〔15.6〕	6.2	10YR 6 ／ 6		Ⅱ Ac	
92	RG 8	／上層	土師器・坏	—	ロクロナデ	回転糸切	—	ロクロナデ	ロクロナデ	〔3.0〕	—	5.4	10YR 8 ／ 4		—	
93	RG 8	／—	土師器・坏	—	—	—	—	—	ヘラミガキ	〔1.1〕	—	—		○	—	
94	RG97	／—	土師器・坏	ヘラミガキ・ヨコナデ	ヘラミガキ・ヨコナデ	ハケメ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.8	14.3	〔6.1〕		○	Ⅰ Aa	
95	RG97	／—	土師器・坏	ヘラミガキ	—	—	ヘラミガキ	—	—	〔2.8〕	〔10.7〕	—	—	◎	—	
96	RG97	／—	土師器・甕	ハケメ	ハケメ	—	ヨコナデ	ヘラナデ	—	〔8.8〕	—	—	10YR 6 ／ 8		Ⅰ Ba	
97	RG97	／上層	須恵器・大甕	—	タタキメ	—	—	タタキメ	—	—	—	—	10YR1.7／ 1		Ⅱ C	
98	RD106	／—	土師器・坏	—	—	回転糸切	—	—	ロクロナデ	〔2.7〕	—	5.5	7.5YR 7 ／ 8		—	
99	RD110	／上層	土師器・甕	—	ヘラナデ	—	—	ヘラナデ	—	〔3.6〕	—	〔8.4〕	10YR 7 ／ 8		—	
100	RD110	／—	土師器・甕	ヨコナデ	—	—	ヨコナデ	—	—	〔4.5〕	—	—	5 YR 7 ／ 8		Ⅱ Ac	
101	遺構外	／検出面	土師器・坏	ロクロナデ	—	—	ロクロナデ	—	—	〔4.4〕	〔13.6〕	—	7.5YR 5 ／ 8		Ⅱ Ac	墨書「東□」
102	遺構外	／検出面	土師器・坏	—	—	—	—	—	—	〔3.6〕	〔12.8〕	—	10YR 7 ／ 6		—	
103	遺構外	／検出面	土師器・高台付坏	—	—	回転糸切	—	—	ロクロナデ	〔2.6〕	—	7.1	7.5YR 7 ／ 6		—	
104	遺構外	／検出面	須恵器・？	—	ヘラケズリ	—	—	ハケメ	—	〔2.1〕	—	—	10YR 4 ／ 1		Ⅱ C	
105	遺構外	／検出面	須恵器・大甕	—	タタキメ	—	—	—	—	—	—	—	10YR 7 ／ 1		Ⅱ C	
107	遺構外	／検出面	須恵器・大甕	—	タタキメ	—	—	タタキメ	—	—	—	—	10YR1.7／ 1		Ⅱ C	
108	遺構外	／検出面	縄文・甕	—	LRヨコ回転	—	—	—	—	9.1	9.4	〔2.0〕	10YR 6 ／ 6		—	
109	RZ12	／—	土師器・甕	ロクロナデ	ヘラケズリ	—	ロクロナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	34.5	23.0	14.2			Ⅱ Bb	

※器高で〔 〕が付されたものは現存高。口径・底径で〔 〕が付されたものは反転復元による推定値。黒色処理で○は内面のみ黒色処理が施されたもの、◎は内外両面のもの。

熊堂Ｂ遺跡　写真図版

写真図版14　RZ12 土器埋設遺構出土刻書土器

枠内が14次調査区

写真図版15　空中写真

東→

写真図版16　空中写真・調査前状況

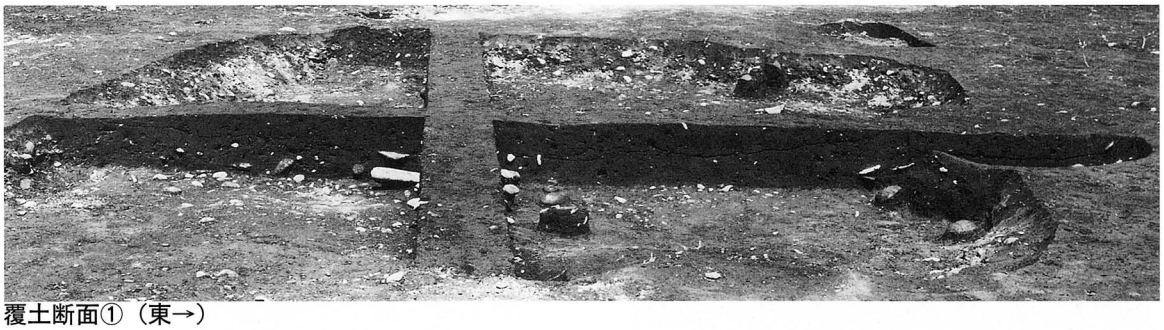
南区東

南区西

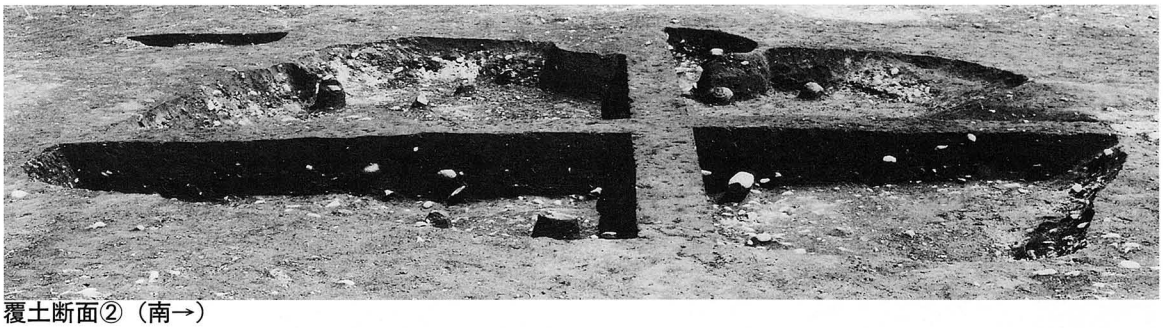
北区

写真図版17　基本層序

全景（北西→）

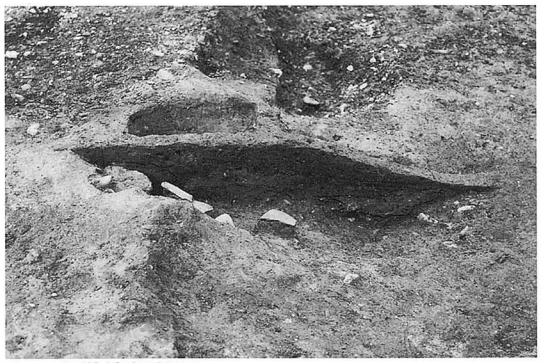


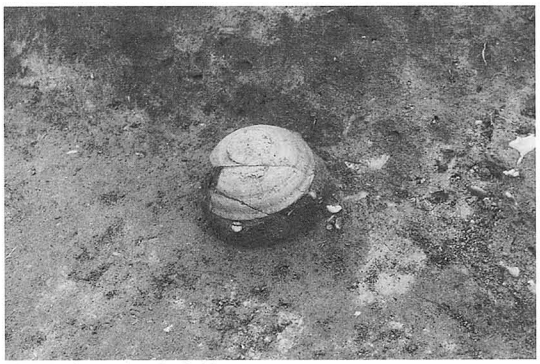
覆土断面①（東→）



覆土断面②（南→）

写真図版18　RA62（1）


カマド燃焼部断面


土器（No. 9）出土状況

カマド完掘

土器（No. 1）出土状況

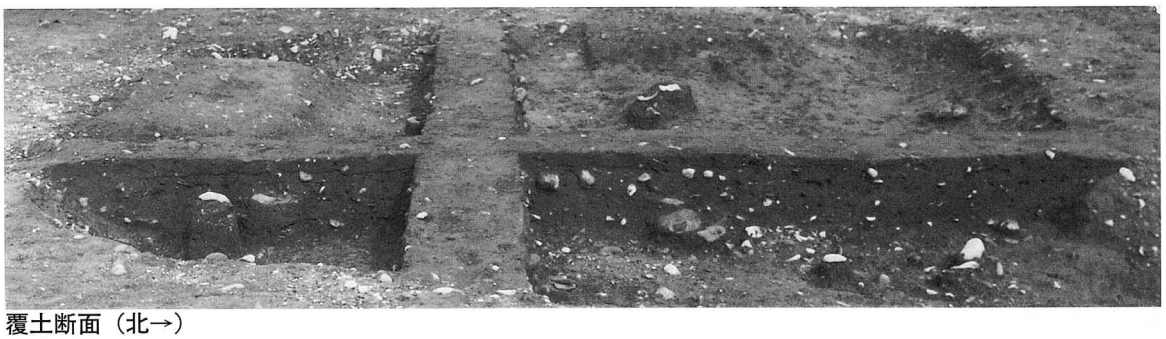
土器（No. 2）出土状況

土器（No. 7）出土状況

鉄製品（No.111）出土状況

写真図版19　RA62（2）

全景（北西→）



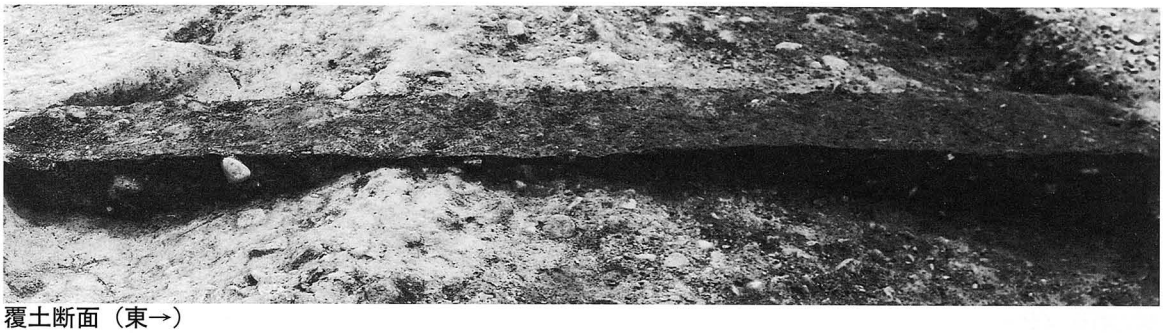
覆土断面（北→）

カマド燃焼部断面

カマド完掘

写真図版20　RA63

全景（東→）

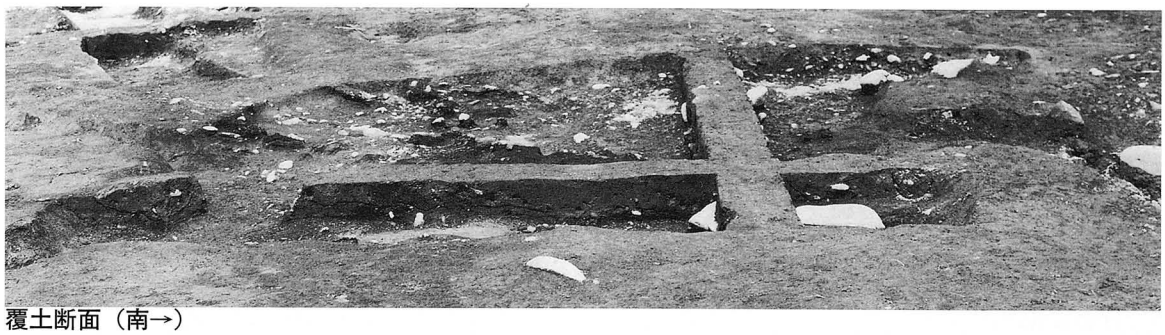

覆土断面（東→）

カマド完掘

土器（No.37）出土状況

写真図版21　RA64

全景（北西→）

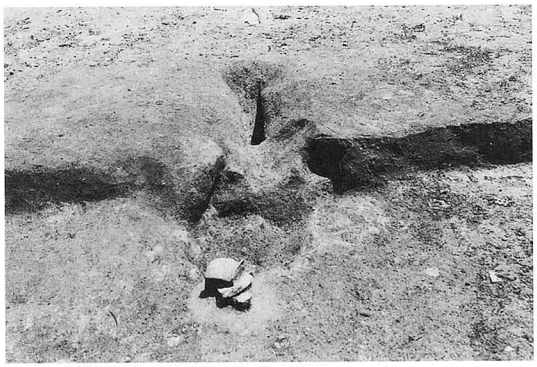

覆土断面（南→）

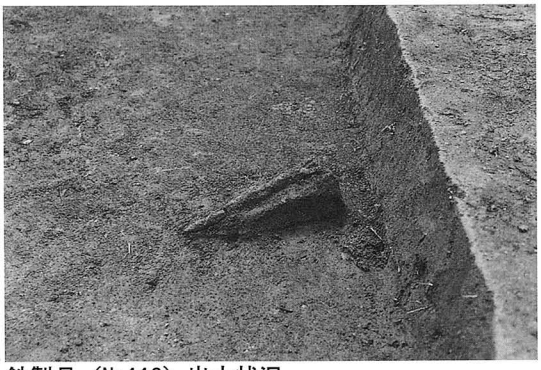
カマド燃焼部断面

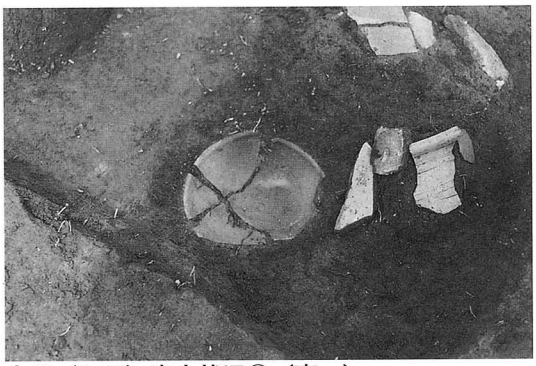
カマド完掘

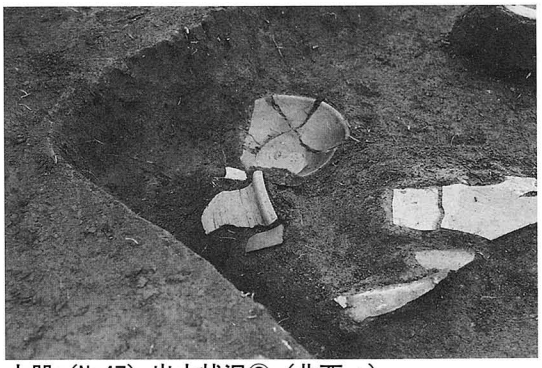
写真図版22　RA65

全景（北西→）


カマド完掘

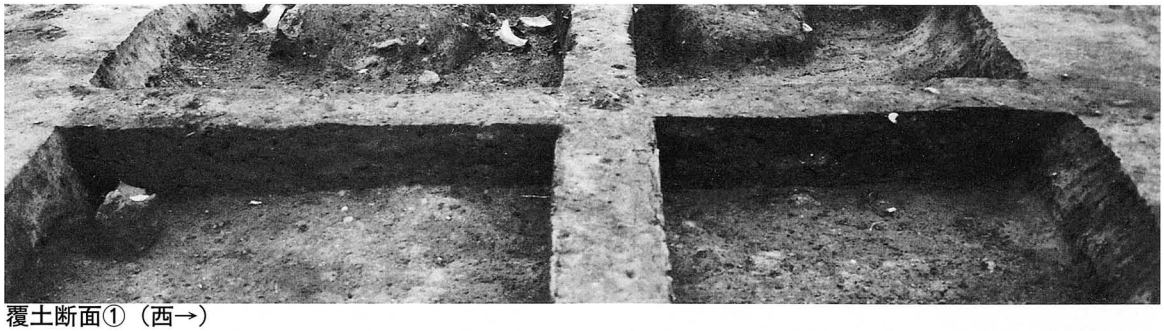

鉄製品（No.113）出土状況

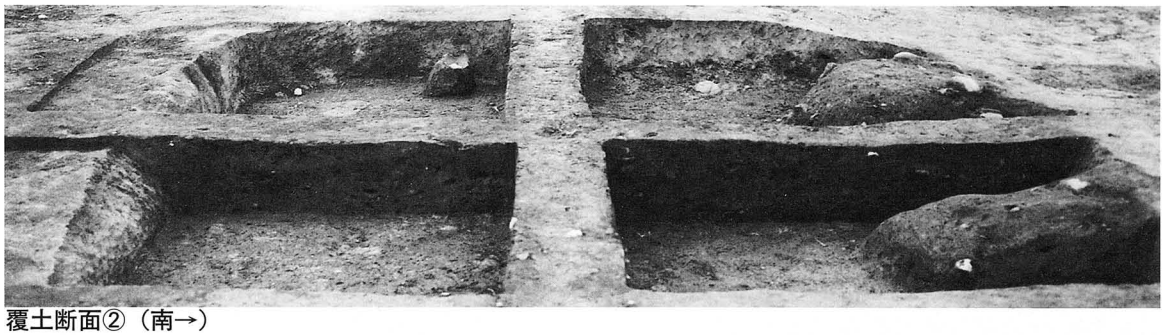

土器（No.47）出土状況①（東→）


土器（No.47）出土状況②（北西→）

写真図版23　RA66

全景（西→）


覆土断面①（西→）


覆土断面②（南→）

写真図版24　RA68（1）

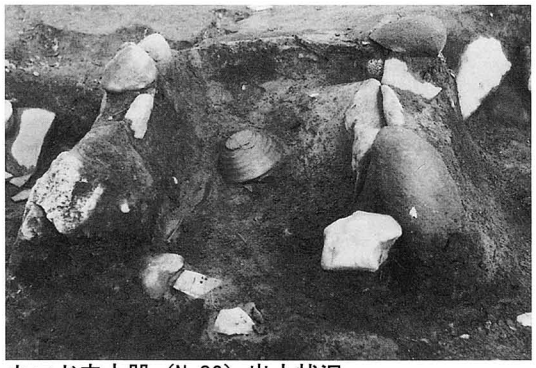
カマド燃焼部断面①（南→）

カマド燃焼部断面図②（西→）

カマド内土器検出状況

カマド内土器（No.78）出土状況

カマド内土器（No.79）出土状況

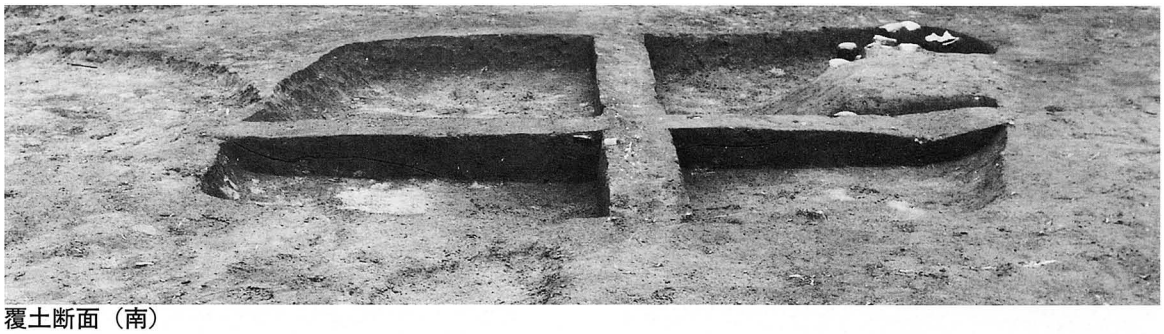

カマド内土器（No.80）出土状況

カマド支脚検出状況

カマド完掘

写真図版25　RA68（2）

全景（西→）

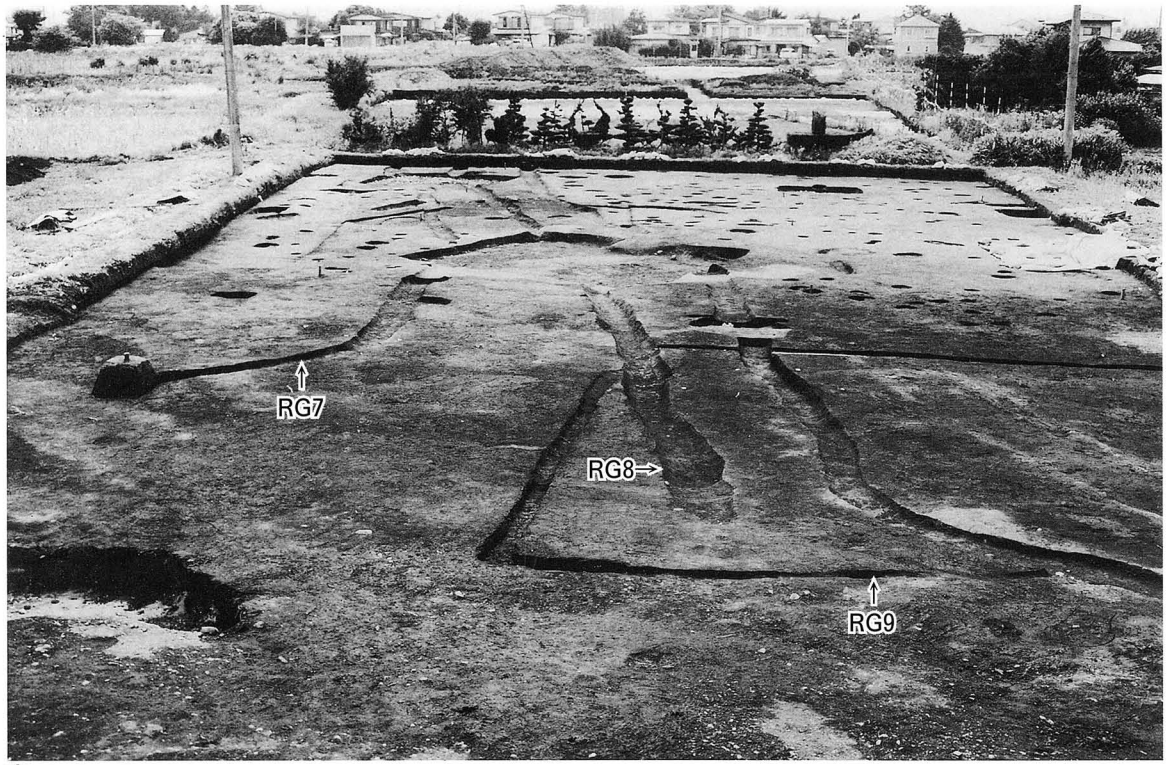


覆土断面（南）

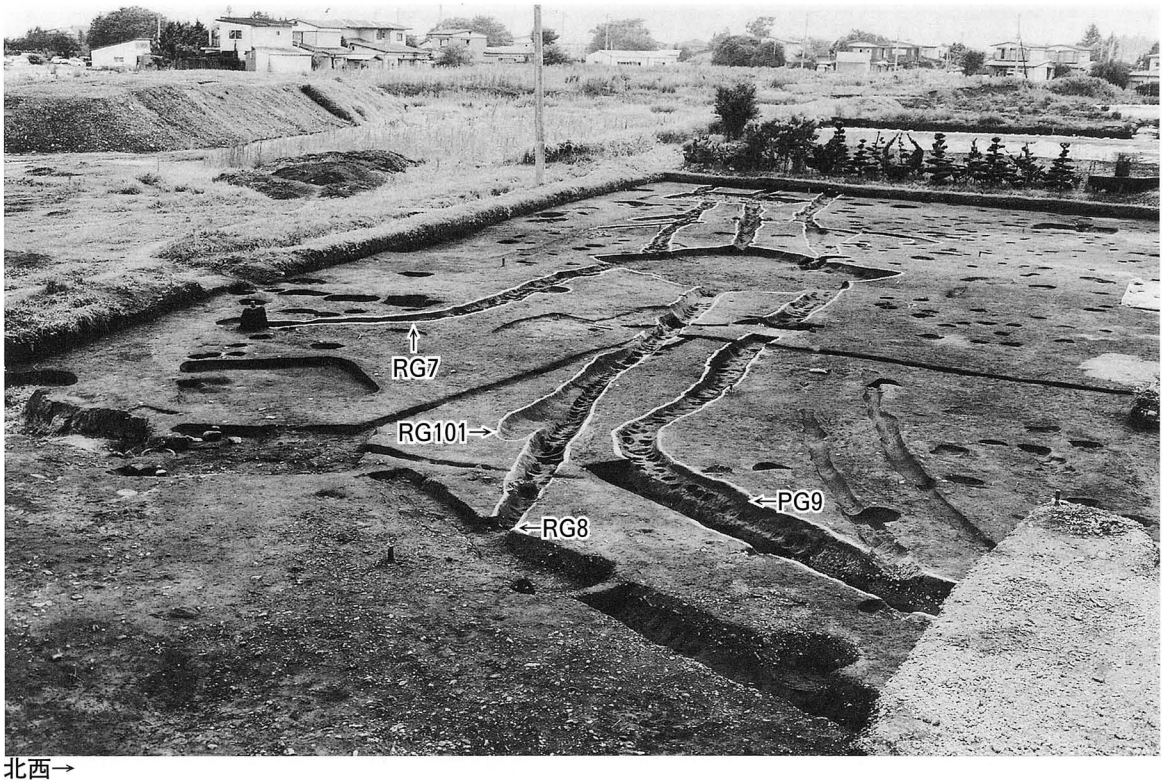
土器出土状況

P1完掘

写真図版26　RE11



東→



北西→

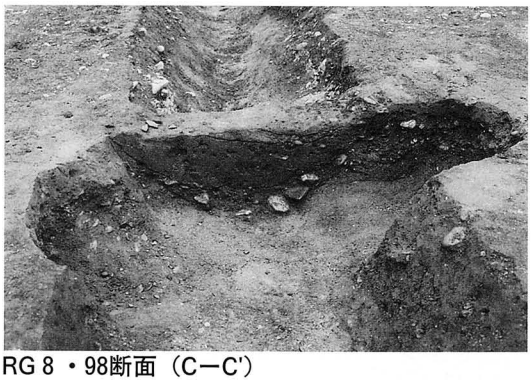
写真図版27　RG 7 ・ 8 ・ 9

北西→

RG98断面（A－A'）

RG 9 ・98断面（B－B'）

南西→



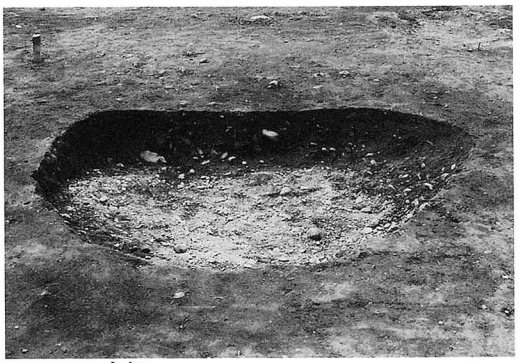
RG 8 ・98断面（C－C'）

写真図版28　RG 8 ・ 9 ・97・98・101

RG 8 断面(D－D')

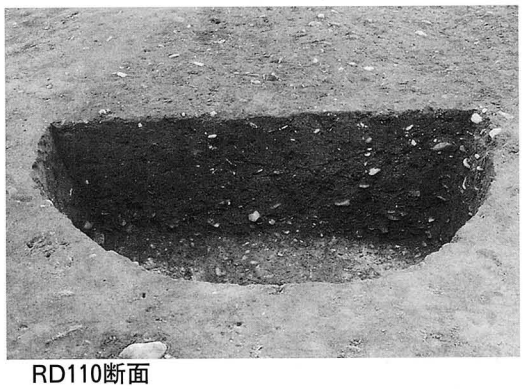
RG101断面(D－D')

RD105断面


RD105完掘

RD106断面

RD106完掘

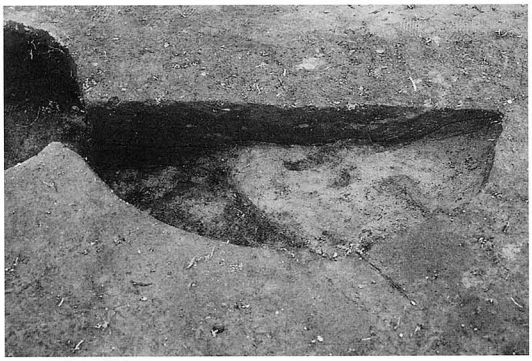

RD110断面

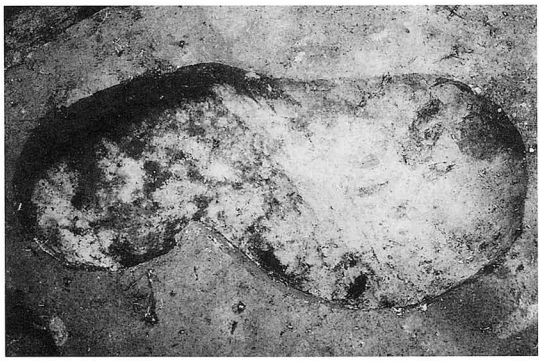
RD110完掘

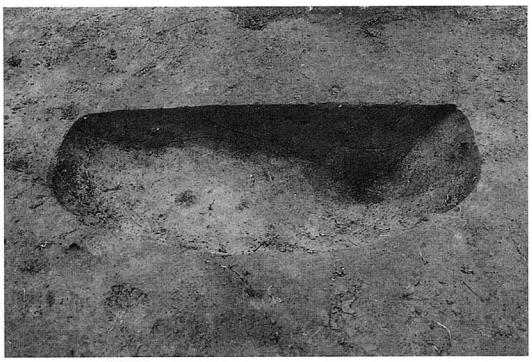
写真図版29　RG 8 ・101、RD105・106・110

RD113断面

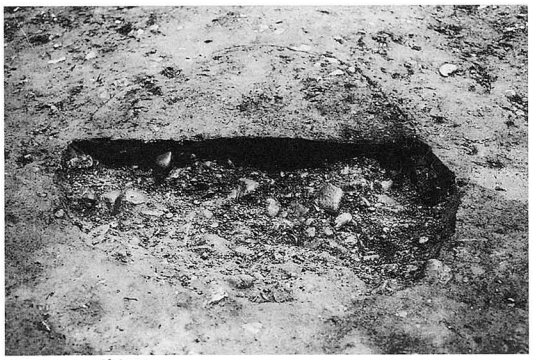
RD115完掘


RD114断面


RD114完掘


RD116断面

RD116完掘


RD123断面

RD123完掘

写真図版30　RD113・114・115・116・123

RD125断面

RD125完掘

RD126断面

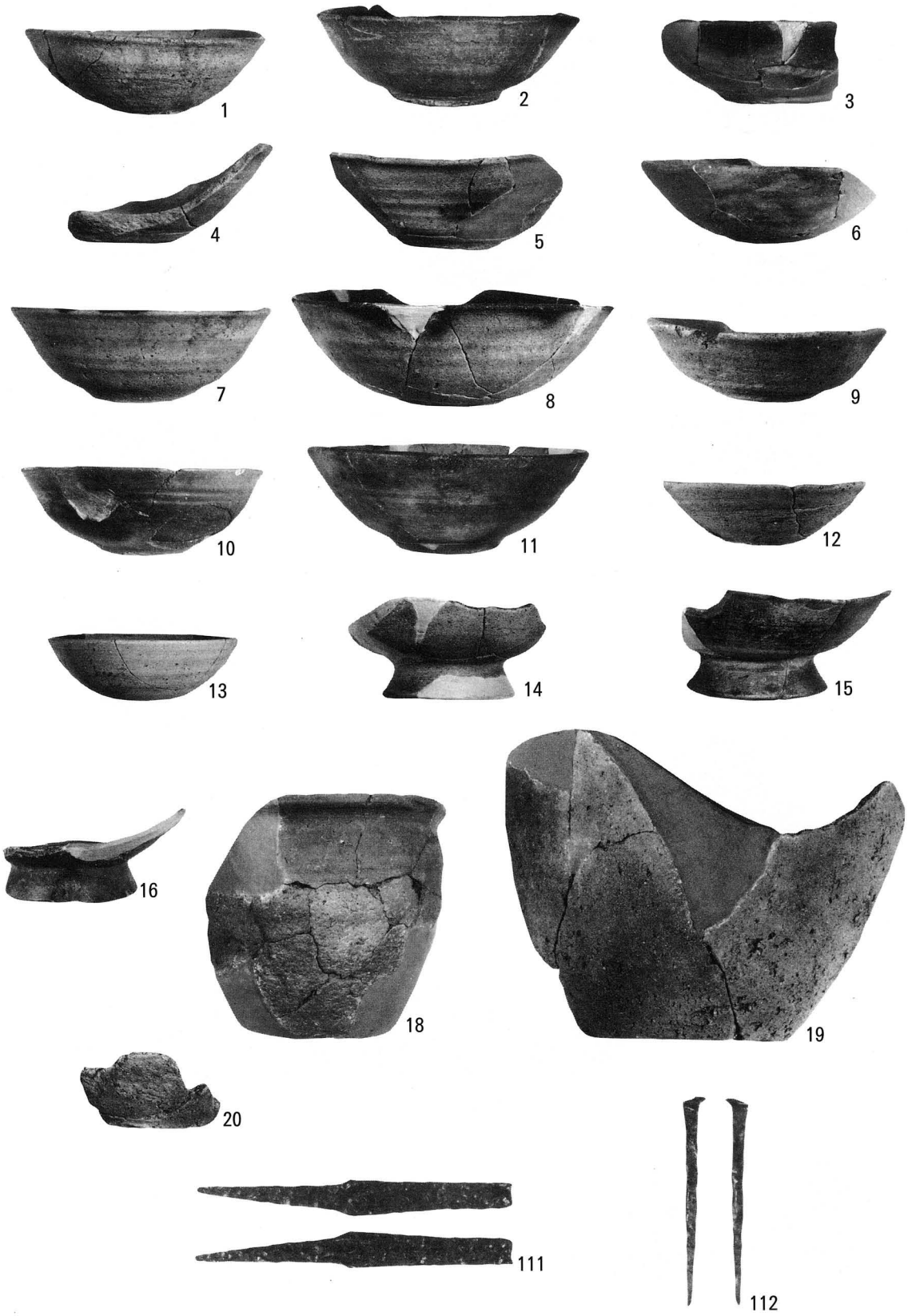
RD126完掘

RZ12検出状況①（南→）

RZ12検出状況②（東→）

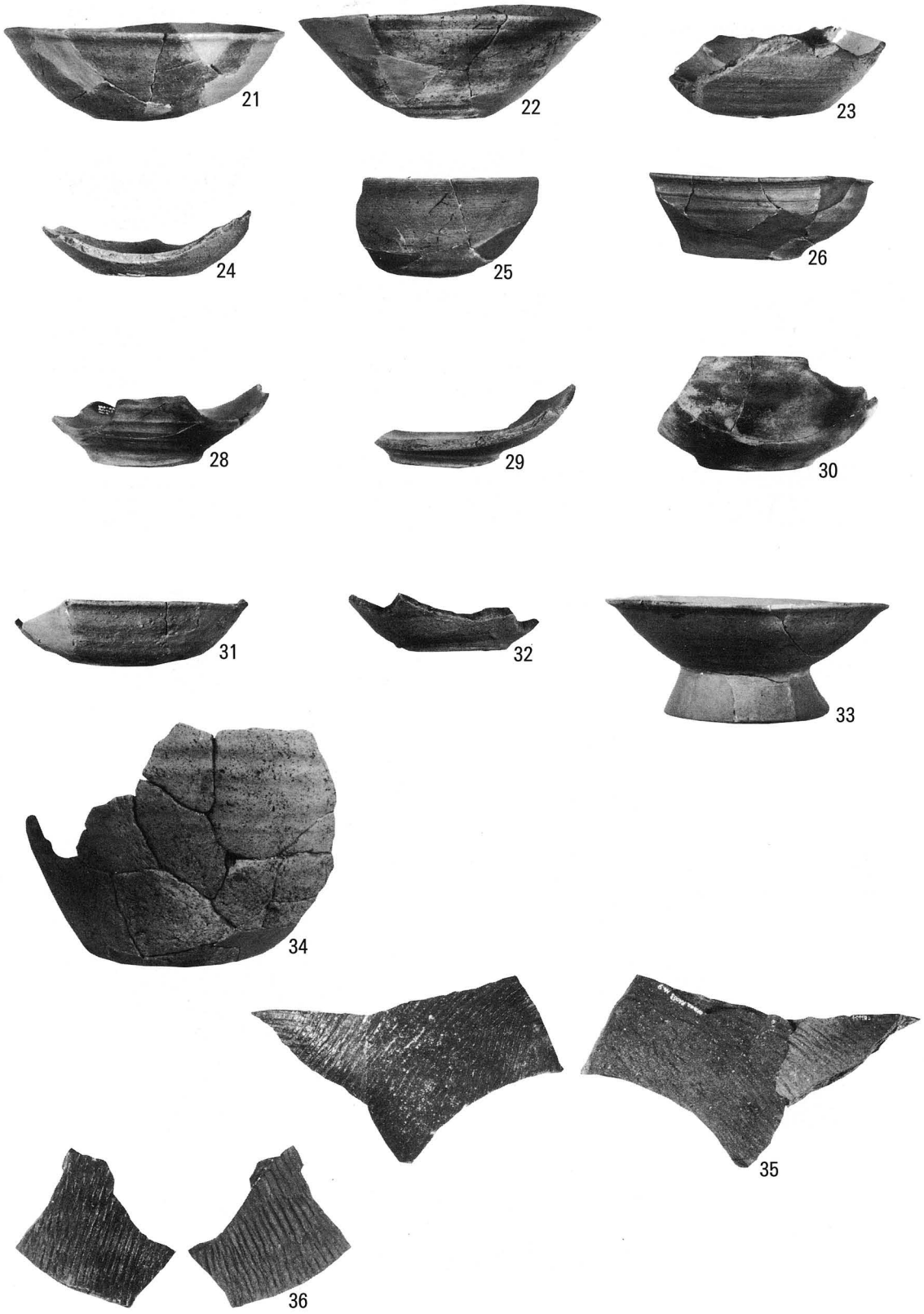
RZ12断面

写真図版31　RD125・126、RZ12



S=1/3

写真図版32　RA62（1）出土遺物

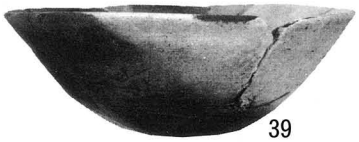


S=1/3

写真図版33　RA62（2）・RA63 出土遺物

37

38

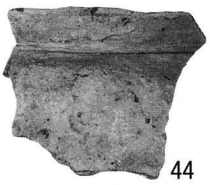

39

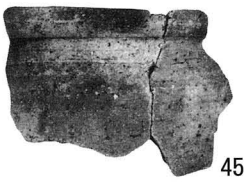
40

41

42

43

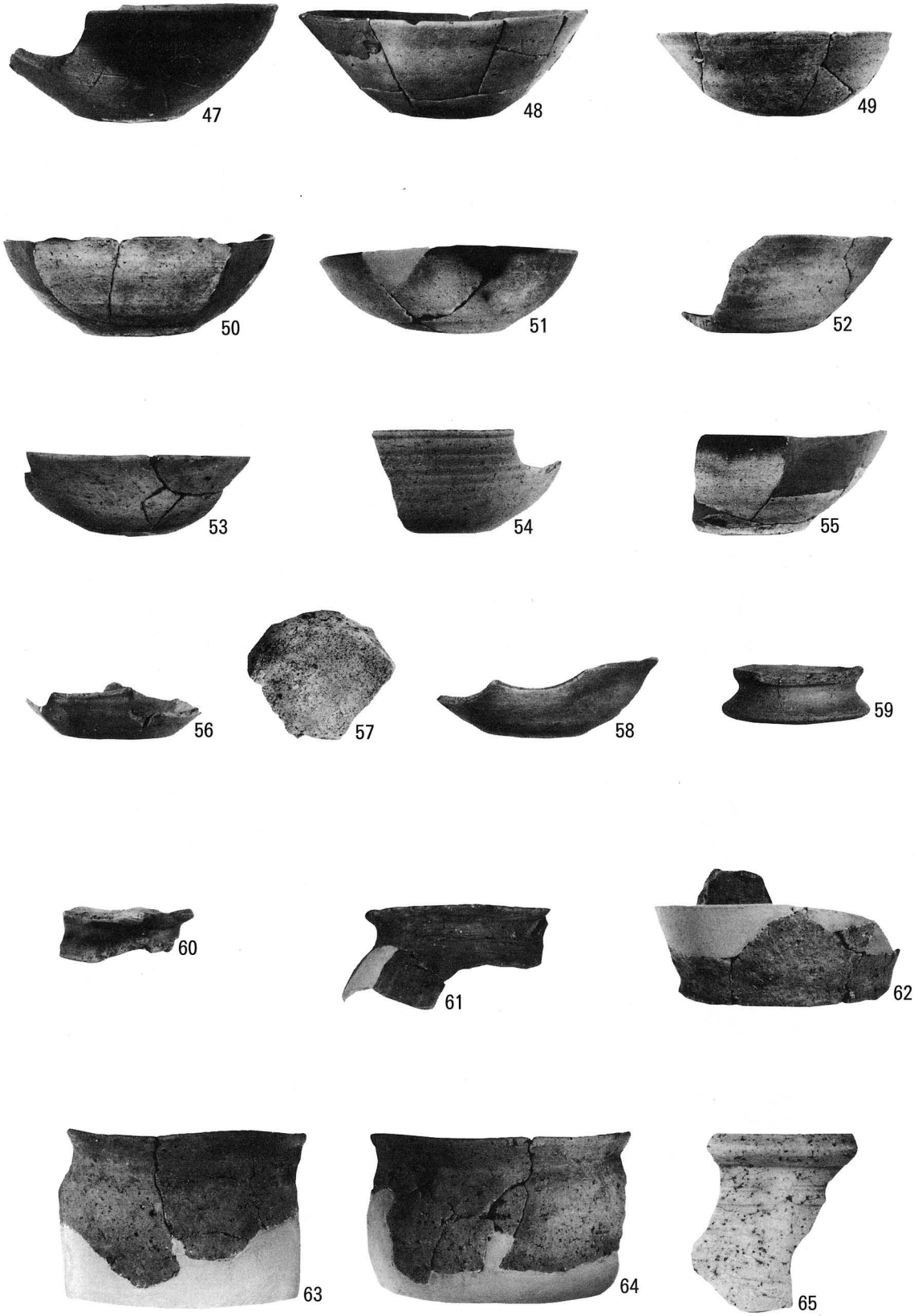

44


45

46

S=1/3

写真図版34　RA64・65 出土遺物

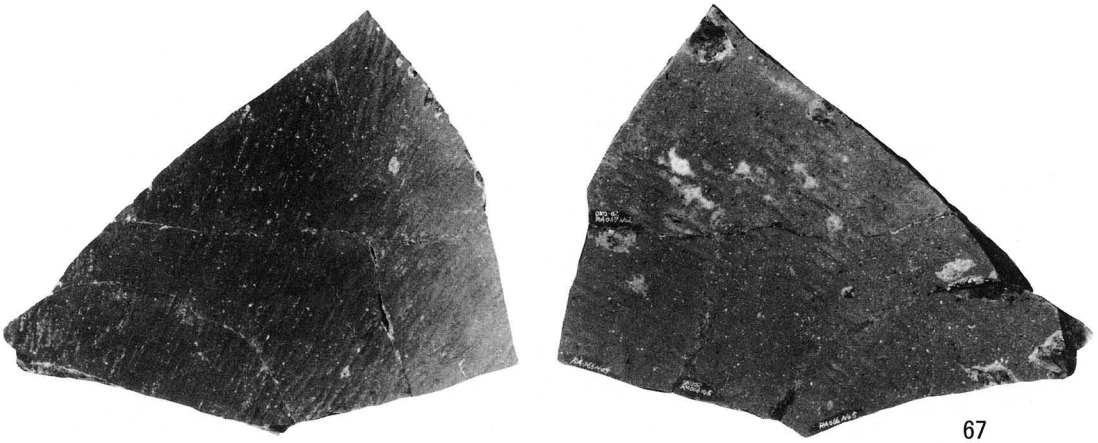


S=1/3

写真図版35　RA66（1）出土遺物

113

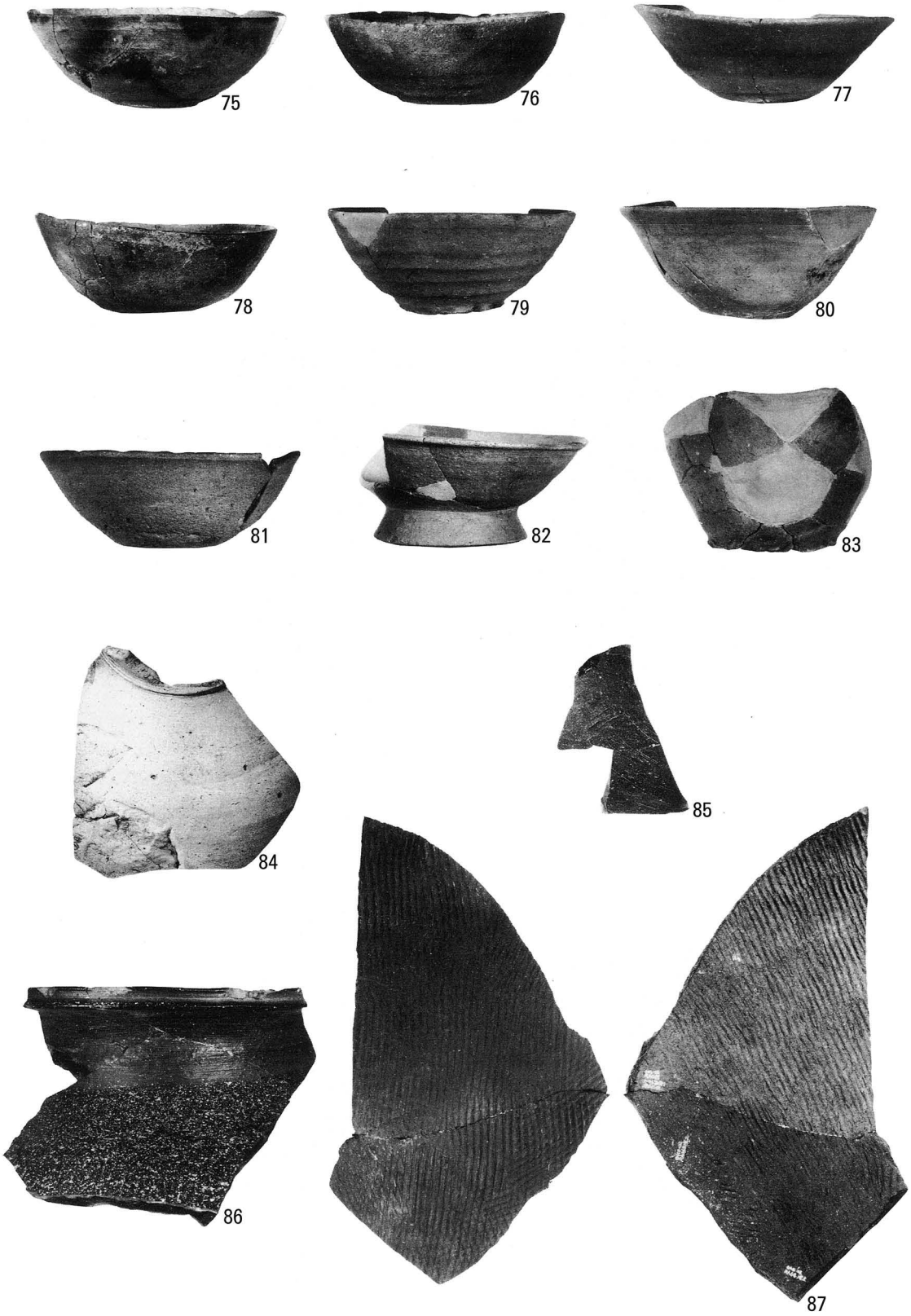
66



67

S=1/3

写真図版36　RA66（2）出土遺物

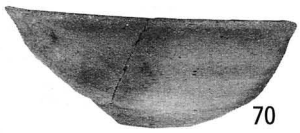


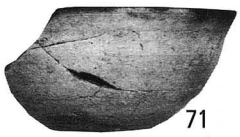
S=1/3

写真図版37　RA68 出土遺物

68

69


70


71

73

72

74

98

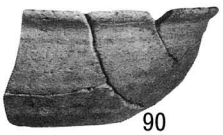
99

114

100

88

89


90

91

92

93

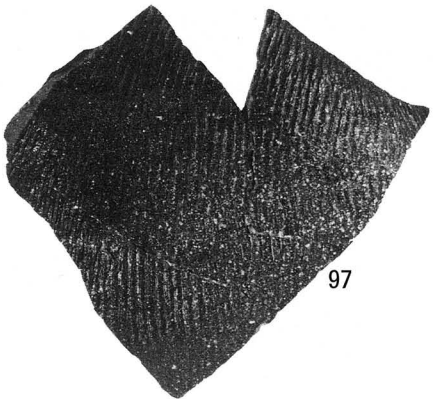
S=1/3

写真図版38　RE11、RD110・126、RG 8 出土遺物

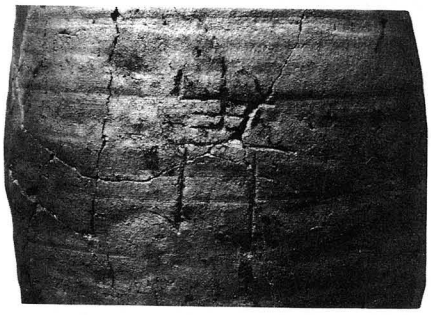
94

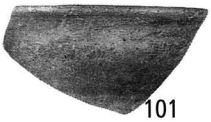
95

96


97

109


刻書部分拡大


101

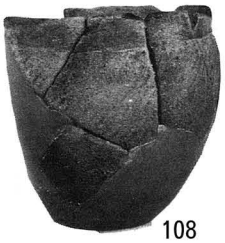
102

107

105

103

104


108

S=1/3　109のみS＝1/6

写真図版39　RG97、RZ12、遺構外出土遺物

報 告 書 抄 録（矢盛遺跡第３次調査）

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第451集
編著者名	半澤武彦
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11-185　　ＴＥＬ019（638）9001・9002
発行年月日	西暦2004年２月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
矢盛遺跡 第３次調査	岩手県盛岡市 飯岡新田第２地割 才川	03201	LE26 －0139	39度 40分 36秒	141度 08分 ３秒	2002.6.3 ～ 2002.8.6	1,560㎡	盛岡南新都市計画整備事業に伴う緊急発掘調査
				世界測地系				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢盛遺跡 第３次調査	散布地	縄文 近世	縄文：陥し穴状遺構13基 近世：掘立柱建物跡３棟・井戸跡１基 時期不明：土坑２基	陶磁器：２点（近世） 木製品・井戸木枠：６点（近世）	本年度に並行調査した第４次調査区（盛岡市分）に南北側をはさまれている。両次調査区ともに、同様な遺構分布状況を呈している。

報 告 書 抄 録（熊堂Ｂ遺跡第14次調査）

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第451集
編著者名	石崎高臣
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11-185　　ＴＥＬ019（638）9001
発行年月日	西暦2004年２月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
熊堂Ｂ遺跡 第14次調査	岩手県盛岡市 本宮字熊堂 稲荷42－２ほか	03201	LE16 －2118	39度 21分 40秒	140度 45分 45秒	2002.6.17 ～ 2002.9.6	1,954㎡	盛岡南新都市計画整備事業に伴う緊急発掘調査
				世界測地系				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
熊堂Ｂ遺跡 第14次調査	集落跡	奈良・ 平安時代	竪穴住居跡５棟 土坑10基 溝跡５条 土器埋設遺構１基	土師器 須恵器 鉄製品	土器埋設遺構から「生万」と刻まれた土師器甕が出土

平成15年度(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所長	木村　昇	副所長	平野允苗

〔管理課〕

課長	韮澤正吾	嘱託	高橋照雄
課長補佐	山岸直美	〃	湯沢邦子
主査	中嶋賢一	〃	沼田テル子
〃	猿橋幸子	〃	伊藤滋子

〔調査第一課〕

課長	佐々木　勝	文化財調査員	北村忠昭
課長補佐	佐々木清文	〃	八木勝枝
文化財専門員	金子昭彦	〃	丸山浩治
文化財調査員	吉田　充	〃	北田　勲
〃	亀　大二郎	〃	島原弘征
〃	野中真盛	期限付調査員	坂部恵造
〃	新妻伸也	〃	小林弘卓
〃	阿部勝則	〃	藤原大輔
〃	杉沢昭太郎	〃	小針大志
〃	西澤正晴	〃	太田代一彦
〃	村木　敬	〃	新井田えり子

〔調査第二課〕

課長	三浦謙一	文化財調査員	星　雅之
課長補佐	中川重紀	〃	佐藤淳一
〃	高橋義介	〃	星　幸文
文化財専門員	小山内　透	〃	溜　浩二郎
〃	金子佐知子	〃	本多準一郎
〃	濱田　宏	〃	丸山直美
文化財調査員	赤石　登	〃	福島正和
〃	阿部眞澄	〃	米田　寛
〃	水上明博	〃	須原　拓
〃	阿部　憲	〃	中村絵美
〃	早坂　淳	〃	川又　晋
〃	小松則也	〃	村田　敦
〃	阿部徳幸	〃	(村上　拓)
〃	窓岩伸吾	期限付調査員	齋藤麻紀子
〃	亀澤盛行	〃	石崎高臣
〃	飯坂一重	〃	吉田里和
〃	鈴木裕明	〃	立花　裕
〃	林　勲	〃	江藤　敦
〃	阿部孝明	〃	駒木野智寛
〃	羽柴直人		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 451 集

矢盛遺跡第3次・熊堂B遺跡第14次発掘調査報告書

盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査

印刷　平成16年 2 月19日
発行　平成16年 2 月27日

発行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
TEL　(019)638-9001
FAX　(019)638-8563
印刷　(株)五六堂印刷
〒020-0021　盛岡市中央通 3-16-15
TEL　(019)654-5610
FAX　(019)651-2167

© (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2004